

閃光のあの日から

長崎県被爆者手帳友の会 四十周年記念 被爆者証言集

長崎県動員学徒犠牲者の会50周年
長崎県被爆者手帳友の会40周年 記念

長崎県被爆者手帳友の会 四十周年記念 被爆者証言集

閃光のあの日から

長崎県被爆者手帳友の会 四十周年記念 被爆者証言集

閃光のあの日から



昭和42年6月18日、長崎県被爆者手帳友の会発足記念祝賀会

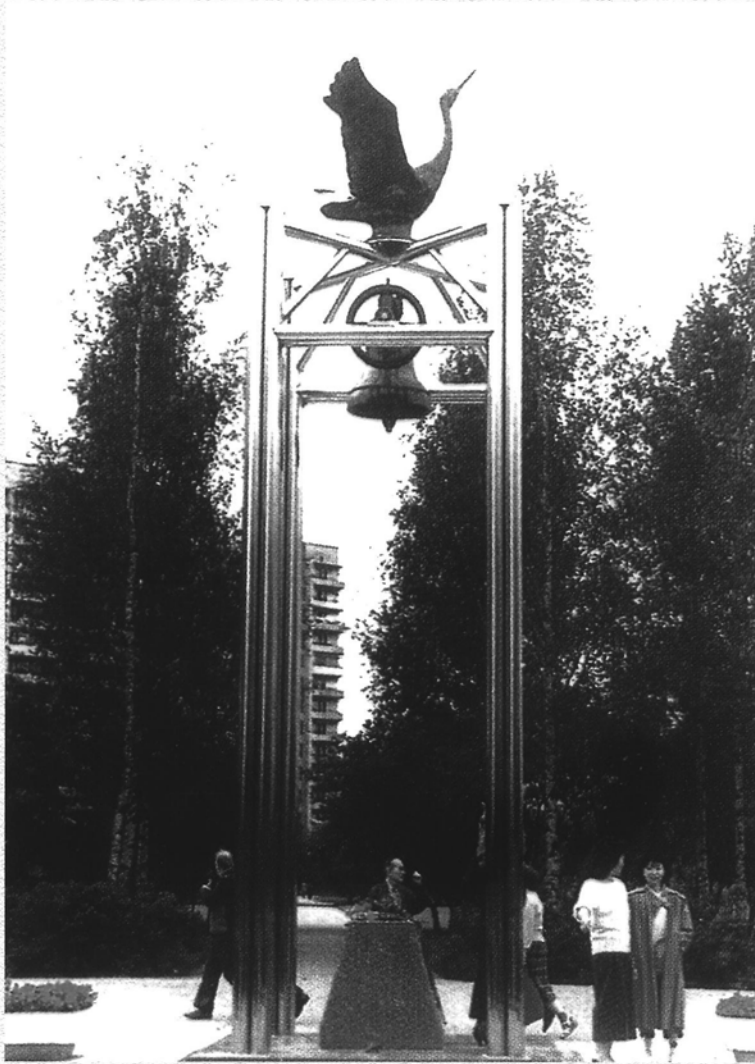


長崎の鐘 第1号

長崎市平和公園

原爆33回忌を迎えた昭和52年7月落成したものであって、原爆殉難者の冥福と世界の恒久平和を祈念して作製したものです。

除幕式 昭和52年8月5日
なお式典には、諸谷市長をはじめ被爆者1000名が参列して盛大に開催されました。



長崎の鐘 第2号

ソ連邦・レニングラード市

反戦・反核・日ソ友好を記念し、1998年8月9日、レニングラード市へ寄贈されました。除幕式には日本から安田団長をはじめ122名が出席、地元カーニン地区から3000名を超える市民が参加し、両国の代表がテープカットを行い、日ソ友好、日ソ不戦を誓い合いました。

なお、当日は長崎市の平和公園において、同時刻に平和集會が開催され、労働者・被爆者・市民が多数参加し、有意義な連帯集會となりました。

レニングラード市は、第2次世界大戦でナチスドイツ軍に900日間も包圍され、60万人市民が戦争の犠牲になり、長崎同様甚大な犠牲を受けた都市です。

贈呈式 1998年8月9日
日本代表団122名（長崎24名）出席



長崎の鐘 第3号

中国・瀋陽市

日本軍が中国侵略を開始した柳条湖事件の地である瀋陽市へ寄贈されました。

1990年9月18日、市内の青年公園で除幕式が開催され、当日は長崎から近藤団長をはじめ85名が出席しました。侵略行為を市民の立場から、謝罪するとともに、日中友好、日中不戦の誓いを固め、その後日中の参加者がスクラムを組み、市内をデモ行進し、歴史的な式典となりました。

さらに、瀋陽市のほか北京、上海市を訪問して中国人民との交流を深め、特に北京での人民大会堂における呉学謙副首相との会談や、釣魚台国賓館における大歓迎パーティーは圧巻でした。

贈呈式 1990年9月18日
「中国平和の旅」代表団85名出席



長崎の鐘 第4号

ハワイ州・ホノルル市

日米開戦の発端となり、真珠湾攻撃（1941年）の舞台となったパールハーバーへ。1990年12月8日（現地12月7日）ホノルル市役所横のシビックセンターで除幕式が開催されました。

長崎から62名の代表が出席、地元からはハワイ州知事をはじめホノルル市の反核市民活動家などが多数参加し、日米親善・世界平和・反戦・不戦を誓い合い、成功のうちに終了しました。

“長崎の鐘”は川野団長からファシ市長へ寄贈されました。

贈呈式 1990年12月8日
「12・8 反戦の旅」代表
団62名出席



昭和62年5月16日、動員学徒30周年・友の会20周年・創立記念祝賀会（宝来軒別館）

友の会平和賞に 具島兼三郎先生

友の会としては、平和運動に実践した人を顕彰するためにかねてから構想を練っておったわけです。

なにか政府、公共団体から表彰される人間はとみると、ときの政府・役所に迎合しておべんちゃら云う人が選ばれている現実を見るにつけ、私達庶民の手でこれを実現したいと思っております。

ノーベル賞についてすら最近はおかしいな、と思うこともあったわけです。

このような考えのもとで人選を急いでいたところ、具島先生が身近におられました。

先生は日・独・伊三国防共協定に反対されて満州国において投獄され、三年に亘るいわゆる臭い飯を喰べられたのでした。

しかも戦後におかれましては、平和と民主主義を守る戦いに率先されておりました。

又、長大学長として戦災復興に力を尽され、長崎市民のアイドルとしていろんな会合にも出席され、良きアドバイスをされておりました。

私達、友の会のささやかな表彰を先生が受けて頂くだろうかと心配しましたが、こころよくお引き受けて頂きました。

あらためて先生の器量の大きさを知ったわけです。

具島先生も齢八十を越えられておりますが、実にかくしゃくとして大きな声で講演をされております。どうか先生、長生きをして下さい。

末筆ながら平和賞受賞の条件は、権力者に媚びらず常に庶民の味方となって平和運動に率先垂範した人となっております。

宇都宮徳馬先生に

友の会平和賞授賞式

とき 平成元年十二月二日十二時から
ところ 平野町宝来軒別館

宇都宮徳馬先生とは

こんな人です!!

宇都宮先生は今年八十三才で東京都の生れだそうです。祖父は佐賀藩の藩士だったそうです。

たしか父は陸軍大将で、その息子である宇都宮先生が反核・平和の道を歩いておられるので、あらあらと思っていたのです。それ故にきつと戦争の空しさを知っておられるのかも知れない。

選挙区は東京都で衆議院議員に立回連続当選されております。それが反核・平和を求めてやまない高邁なる理念故に自民党を離党されて、現在無所属となられ参議院議員をつとめられてお

ります。

世が世ならば衆議院議長とか総理大臣となられても決しておかしくない器量の持ち主です。

先日、参議院議員会館でお会いしましたところなんと素朴な人だろうか、淡々として反核・平和の道、日中、日ソ親善の必要性を説かれる姿は、人生枯れはてて聖者の域に達している人だと思ったところでした。

又同行の矢上支部長西川徳馬さんと俺と同じ名前だところこばれて何度も握手されるなど、人間的に親しみを感ずる人でもありました。

反核・平和の道を歩んだばかりにすべての名誉職を投げ打って、ひたすら吾が道を行く先生こそが、友の会平和賞にふさわしい人だと思ひ決定した次第です。

今日、日中友好協会会長、核軍縮を求める二十二委員会座長として被爆者援護法制定にかける情熱は、長崎・広島国会議員をたじたとさせるところのものです。

先生どうぞ長生きをして下さい。そして反核・平和の道を行く若者に適切なる助言をお願いします。

友の会の平和賞

— 森滝市郎先生とは —

艱難、汝を玉にすると云う言葉があるが、森滝市郎先生は昭和二十年八月六日、広島市に投下された原子爆弾によって片目を失明されました。

動員学徒を引率されての事故でこのことが残りの人生の全てを被爆者運動、核兵器廃絶の運動を捧げられた動機となったわけでした。

昭和三十八年、核実験の一部停止でこれまでの原水禁運動が分裂したときも、いかなる国、いかなる理由を問わず、核実験に反対すると言う、日本原水禁国民会議に身を投じ、爾来三十年近く同会議の代表委員として八十九才の今日まで頑張っている国宝的存在である。

この人こそが具島兼三郎、宇都宮徳馬先生に次いで友の会第三回、平和賞受賞者として最もふさわしい人である。

友の会平和賞は、権力者に媚びず常に庶民の味方となって平和運動を実践した人と規定されておりますので念の為、申し添えておきます。

第三回友の会平和賞授賞式は、平成二年十二月一日、長崎市平野町、宝来軒別館において執行しました。

第4回友の会平和賞

杉原千畝氏

戦争とは、人をして狂人とならしめることであると思います。よくもあの人があのようなことができたものと、戦争が過ぎ去ってから、ふり返ってみると、とんでもないことをやっていることです。

杉原千畝さんの話を聞いたのは、たしか数ヶ月前の衛生放送だったと思います。いや立派な人もいたもんだなあーとの感想でした。その時は敗戦後の日本で外交官の職業を辞めさせられていたことも知らなかったのです。

このたび鈴木宗夫政務次官のはからいで名誉回復が行なわれたと聞いて、外務省と云う役所はなんたることだと……あらためて認識したところです。

外務省と、日本外交と云えばピントの外れた外交をするところだと国民の大多数が思っているところです。当時をふり返ってみると、日、独、伊、の三国協定で日本外交はナチスドイツに迎合していたころの話です。ドイツを追はれた難民六、〇〇〇人はリトアニアからソ連邦を通過して逃げなければ他に方法がなかったのです。

そのとき、日本の外務省は例によって、ビザ発行中止指令

を出していたのは、当時の状況を知るものにとっては当然のことであつたらう。

しかしながら、杉本千畝代理領事は敢然として、ビザを発給したのでした。その数六、〇〇〇人とも云われています。そのためユダヤ人が救われたのでした。今日の平和なときにおいて杉原代理領事の行為はと考えると非戦闘員である人達を戦禍を避けさせるための行動について協力することは当然なことであると思うのだが……私どもは杉原代理領事の行動は、権力者にこびらず庶民の味方となって平和運動に率先垂範した人と云う。友の会平和賞の理念に適切な人であると思ひ決定した次第です。

杉原さんは一、九八六年今から5年前86才で亡なられたそうです。奥様の杉原幸子さんは、存命中でしたら主人もさぞよろこんだでしょうに、と残念がっておられました。

自宅

鎌倉市

杉原 幸子

(78才)

TEL

初村滝一郎さん

初村先生は県会議員四期をされ昭和四十五年三月、参議院議員に当選され、それから平成四年七月まで二十数年の間、原爆被爆者の処遇改善、原爆病院の建設、原爆特養ホームかめだけの建設など、こと原爆に関することはすべて初村先生の手で解されたのでした。

初村先生が国会議員に就任された頃には、国家の被爆者対策費が僅かに二十八億円でした。それが平成四年度の国家予算が千三百六十六億円と、この数字が初村先生の奮闘を如実に示しているものと思います。

被爆者対策を今日ふり返って見ますと、他の戦争犠牲者に比べて私ども被爆者は一定の水準以上の援護対策が施行されているものと思います。勿論、初村先生をサポートされた白浜先生、田口長次郎先生の名前も私ども被爆者は忘れることのできない存在でした。

最後に、今後の初村先生のご健闘ご健勝を祈り、第五回友の会平和賞と決定した次第です。

平成四年九月一日

長崎県被爆者手帳友の会

会長 深堀勝一

第六回友の会平和賞

現住所 大阪市
氏名 岩崎和佳子

あなたは、眼科医としてバヌアツ島におもむき、眼疾患に苦しむ多数の患者の治療を十年間に亘ってなされたことは、私ども被爆者手帳友の会の基本的な理念に全く合致するところです。

私どもはこの行為に対して「友の会平和賞」を贈り、エールの交換を致したいとおもいます。

どうか、岩崎和佳子先生のご多幸とご健勝を祈念し、ここに平和賞を贈ります。

平成五年十二月八日

長崎県被爆者手帳友の会

会長 深堀勝一

解説

ある夜のことでした。テレビを見ていたところ、南の眼科医のいないところで十年間に亘って、無料奉仕をしている。日本人の医師が放映されておりました。私は、かねがね、どんなに医学が進歩しても、又、医師の数が増加しても、奉仕するという心がけの医師がいない限り、人間は幸福になることはないと思っておりました。

岩崎和佳子先生こそが、私の願望に叶った医師だと思ひ、第六回友の会平和賞を贈ることに致しました。

第7回 友の会 平和賞

◎ 杉山 千佐子

全国戦災傷害者連絡会々長

私達友の会が、杉山 千佐子さんを知ったのは、全国戦争犠牲者大会をひらこうとしていたときのことです。

昭和56年5月5日だったかと思います。

会長の私と竹馬さんが名古屋市に彼女を訪ねたわけでした。そのときのことです。昭和56年8月7日、長崎新開文化ホールで、全国ではじめて全国戦争犠牲者、国衆補償要求大会がひらかれました。

杉山さんは、20名ばかりの仲間をつれて参加して頂きました。

そのときは、全国から沖縄をはじめ老千名の人達が参加して頂き盛大なる大会となりました。

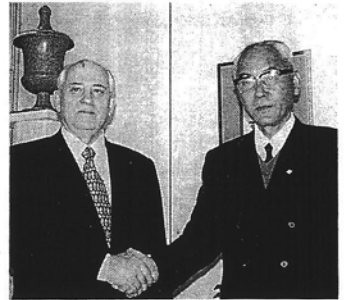
それから、杉山さんとは良きパートナーとして、国会陳情などを共同実行してまいりました。

杉山さんは、ひたむきな人で、常に戦争犠牲者のために働かれています。

このたび、友の会平和賞に決定したのは、当然なことでもしろおそすぎた感じですが。

ゴルバチョフ氏に 友の会が平和賞

福岡で深堀会長が授与



授賞式でゴルバチョフ氏＝左＝と握手する深堀会長。＝福岡市内のホテル＝

【福岡支社】異被爆者手帳友の会の深堀勝一会長は十四日、平和運動への功勞者に贈る「米由正利平和記念賞（旧「友の会平和賞）」を贈った。同氏は福岡市内で開かれ



「ゴルバチョフ氏に「平和賞」長崎異被爆者手帳友の会（深堀勝一会長）は十四日、福岡市内で、米由正のゴルバチョフ旧ソ連元大統領に平和賞と副賞の百万円

ゴルバチョフ氏は「うれしうたてなく、今後の責任あしし」と感銘。「一九九一年に長崎市訪問した際に受けた深い印象を、人々に伝えていくことを誓った。」

を贈った。写真は「友の会」は毎年、平和に貢献した人物に平和賞を贈っており、八回目、ゴルバチョフ氏への授賞理由として、東西冷戦を最終させ、核戦争におのゝく人類の将来にほのかな光明を見いだした、などの感銘を述べている。

たフォーラムに出席のため来福。授賞式で深堀会長が「東西冷戦の終結を導き、人類の将来にほのかな光明を見いだすことができたのは、あなたの高邁（こうまい）な理想と豊かな人間性による最高の殊勲（しゅくこう）である」と述べ、賞状と本県特産のべっ甲製品（べっか）の記念品、副賞として百万円を手渡した。

ゴルバチョフ氏は「受賞を心から感謝するとともに、長崎県民すべての方々に、この連の指導者として世界に示した原則や立場を堅持していくことで、これからの責任もひびいて感じている」とお礼の言葉を述べた。

第8回友の会平和賞

授与式：平成7年11月15日、ゴルバチョフ氏（平成7年11月14日付新聞より）

第九回友の会平和賞 日本山妙法寺

長崎市 坂本1丁目8-29
長崎県被爆者手帳友の会
会長 深堀 勝一

1. 趣 旨

私達 友の会が、30年に亘って 平和運動を 実行して来ました。

平和賞は、平和運動を 実践する 団体、個人は、政策的にも、地域社会において、
在の中の 偏見と対いながら、懸命なる 努力を 続けられております。

そこで、この中において、特に 熱心なる 団体、個人に対して、その 労苦に 報いる
ためにも、在向の人に、知らしむる 必要がある と思ったのでした。

2. 第九回 友の会平和賞は、日本山妙法寺と 決定しました。

私ども 平和運動団体としては、これを 在の中に 紹介する 必要もないくらい 真面目で
真しな 団体です。

ただ、敬意を表する ところです。 私が 知り合ってから 40年目にも なりますが、
平和運動のお手本だ と思います。

3. 日 時

と き、 平成8年12月8日 午前11時30分

と ころ、 長崎市 西町 平和公園

4. 行幸の あらまし

平成8年12月8日(日) 午前11時30分

原爆殉難者に 黙禱を 捧げ、在界平和の 達成を 祈願する。

その後、日本山妙法寺の 20名の 僧侶と共に 被爆者230名が 平和公園から、
爆心地公園を 通り、平和行進を 続けて、原爆資料館 前の 空来軒別館に 到着する。

そこで 12時00分から 式典を行う。 式典の 所要時間は 40分とします。

式典終了後は、式典参加者 250名による 被爆宴を 実施します。

5. 友の会平和賞授賞者の 資格 (下記の通り)

6. これまでの 授賞者の プロフィール (下記の通り)

第9回友の会平和賞
日本山妙法寺

第10回平和賞

授賞式：平成9年12月3日、高木仁三郎氏 ミニ平和賞：岩松繁俊氏、山下弘文氏



第11回平和賞
授与式：平成12年5月17日、車 貞述氏



第12回平和賞
授与式：平成15年2月17日、大相撲横綱、朝青龍関

龍田弁護士に平和賞

県被爆者手帳友の会 受賞している。

(深堀勝一会長) は二十 龍田弁護士は十年以上
九日、在外被爆者支援や 龍田弁護士は十年以上
戦後補償裁判などで貢献 龍田弁護士は十年以上
したとして、諫早市の龍 龍田弁護士は十年以上
田紘一朗弁護士に「友の 龍田弁護士は十年以上
会平和賞」を贈った。 龍田弁護士は十年以上
平和賞は平和に貢献し 龍田弁護士は十年以上
た人の功績をたたえる目 龍田弁護士は十年以上
的で一九八八年に創設。 龍田弁護士は十年以上
これまでに大相撲の横綱 龍田弁護士は十年以上
朝青龍関やゴルバチョフ 龍田弁護士は十年以上
元ソ連大統領ら十二人が 龍田弁護士は十年以上

長崎市平和町の平和祈

在外被爆者の 裁判など貢献

県手帳友の会贈る



深堀会長から「平和賞」を贈られる龍田弁護士
＝長崎市平和町、平和祈念会館

念会館であった授賞式に
は、被爆者ら約四十人が
出席。深堀会長が「被爆
者運動に力を貸していた
だき、ともに大きな成果
を挙げた」とあいさつし、
賞状を手渡した。
龍田弁護士は「依然と
して存在している日本人
と外国人の差別政策を目
本社会からなくさない
と、被爆者救済は形だけ
に終わる。国際社会に正
義と人道を確立する運動
の力になりたい」と謝辞
を述べた。

第13回友の会平和賞

(平成16年5月30日「長崎新聞」より)

記憶を正しく記録し 伝える



長崎県動員学徒犠牲者の会
長崎県被爆者手帳友の会

会長 井原 東洋一

長崎県動員学徒犠牲者の会は、一九五七年（昭和三十二年）十一月十日に、長崎市農民会館で発足し、その十年後の、一九六七年六月十八日に、動員学徒犠牲者の会を母体として、長崎県被爆者手帳友の会が、県青少年センターで結成されました。

本年は、「犠牲者の会」創立五十年、「友の会」創立四十年の節目の年であります。初代の会長に就任された、故深堀勝一さんは、持ち前の積極性と卓越した指導性をもって、長崎県下各地に組織化をはかり、育て、数多くの政治家を支援し、政治的な活動と大衆運動の有機的な連携により、政府を動かし被爆者援護施策の今日を産み出してこられました。

時に、ワンマン的カリスマ性が爆発暴走して周囲に多大な戸惑いを及ぼす事もありましたが、「犠牲者の会」も「友の会」も、深堀勝一前会長の「力」によるところが大きかった事を忘れてはなりません。

二〇〇六年（平成十八年）二月二日、七十八歳の生涯を閉じられた深堀勝一前会長の後任を引き継いで、六月十八日の総会で第二代の会長に選任されたのを機に、徹底した事務合理化と組織運営の民主化につとめ、第一年目の追悼行事・追悼集「長崎の鐘よ鳴れ」の発刊に続き、本年度は、会の歴史というよりも、会員の証言に重点をおいた「証言集」を周年記念事業として発刊する事にいたしました。被爆直前から被爆時の様子、被爆後の苦しみと生活状況、平和運動への決意など、記憶を正しく記録し、伝える事の重要性を考えていたからであります。

被爆体験を寄せていただいた方々は、限られましたが、体験を風化させてはならないとの思いをこめた「記念誌」として、被爆者の語り尽くせぬ苦悩の一部を記録にとどめる事ができたのを喜びといたします。

二〇〇八年六月吉日

発刊にあたって……………長崎県勤労学徒犠牲者の会 会長
長崎県被爆者手帳友の会 会長 井原 東洋一 19

証言集

(順不同)

証言1	中村 キクヨ	平和への誓い	平成十八年8月9日	24
証言2	東海 ムツ子	平和への誓い	平成十四年8月9日	26
証言3	大平 力男	平和への誓い	平成六年8月9日	28
証言4	平野 英男	平和への誓い	平成二年8月9日	30
証言5	山川 米雄	被爆前後の手記	「空白の20時間」両手をぶらりと…	32
			「忘れぬあの日」死体運びも怖くなかった	55
証言6	熊 健	浦上の地獄を歩いた私達	短歌・俳句 59	56
証言7	平山 兼則	真夏の悪夢		58
証言8	大隈 直之	私の被爆体験記	「忘れぬあの日」広島の話聞いた直後に	61
			子どもたちに語り伝えたいこと	74
証言9	長濱 キミ子	私の「原爆」その日、その時		76
証言10	早崎 猪之助	「忘れぬあの日」すべてが真つ平らに		84

証言11	辻原	津田子
証言12	松尾	富士雄
証言13	嘉松	愛子
証言14	深井	美智子
証言15	河邊	總子
証言16	山本	正人
証言17	吉田	ハルエ
証言18	永田	マツエ
証言19	小嶋	美智代
証言20	末次	昌子
証言21	寺井	眞澄
証言22	赤倉	ミサヲ
証言23	井原	東洋一
証言24	田中	清六
証言25	藤原	只夫
証言26	坊上	テイ
証言27	川副	政子
証言28	川口	与作

四十年の軌跡

主な歩み

歩き続けた一昼夜	90
核の廃絶に願いをこめて	94
生きている証し	99
未だに苦しむ毎日	101
戦争体験記	103
あの日、あの頃、そして今へ	106
あの頃、あれから、これからとの声を聞き	109
一瞬にして命が絶たれた日	118
鮮明に残るあの時の光景	120
原爆体験記二題	122
少女の遺体	125
あの日・あの時の思い出	129
あの日あの時	137
私の被爆体験	140
死者名簿に自分の名	142
突然赤と黒の光線	144
みな口々に「水欲しい」	146
走る格好で息絶えた人	148
燃える町ただ見るしかなく	150

証
言
集

平和への誓い

八月九日、今日は、「ながさき平和の日」です。

昭和二十年（一九四五）八月九日のこの日を、人々は決して忘れ去ってはなりません。

美しかった長崎の街は、アメリカによって投下された、たった一発の原子爆弾で、一瞬にして無惨にも壊滅しました。

「ながさき平和の日」には、「長崎を世界で最後の被爆地に！」との、核も戦争もない平和な世界を創ろう！という、切なる、そして強い意志が込められているのだと思います。

私は、女学校を卒業すると同時に、川南軍需工場に動員され、日の丸のハチマキをしめて一日一食で働きました。

夫は戦地に赴き、新婚生活や青春時代の楽しみなど考える暇もなく、銃後の守りにあったその日、二十一歳の私は、旧小樽村で被爆しました。

生後わずか一カ月の長男を抱きかかえた防空壕の中で、空襲警報解除の知らせを伝え聞き、安心して外へ出ました。



中村 キクヨ

家に帰り子どもを寝かせつけて、物干しに洗濯物を広げながら、少し暗くなったのに、キラキラする様な光を感じて、何か変だなあと太陽を見上げたその瞬間、ゴオーツという地鳴りと共に、物凄い強風で、その場に吹き倒されました。

何が何だか、全くわかりませんでした。

ふと気がついて見ると、倒れた場所から大分離れた所に居る事に驚き、おののいて急に子どもの事が気になり、家の中へ走り込みました。

足の踏み場もない様に倒れた家具などの隙間で、母がしっかりと長男を守っていてくれました。爆心地からは、山を越え、五・八kmも離れているのにこの有様でした。爆心地に近い岩川町にいた叔母と姪は、爆死しました。

その日は息つく暇もなく、次々に船で送られて来る重傷者の救護に追われました。その中には学生さんが多く、皆若く前途のある人々ばかりなのに、全身火傷などで痛んでおり、

喉をかきむしりながら、「水をください」「水をください」と叫ぶ姿に、この世の地獄を見ました。

「水を飲ませてはダメだ」との声にそっとかくれて、タオルに水を含ませ絞り入れました。蚊の鳴くような声で、「ありがとう」と力なくかすかに笑いながら死んでゆきました。「お母さん」と力づくよく叫んで息絶える人など、次々に息をひきとる若人達になすすべもありませんでした。

つい三年前、五十五歳を迎えた被爆二世の次男は、白血病で亡くなりました。放射線がまだ生きていたのです。先生から「次男の広さんの白血病は、母体からもらったものです」と言われたこの一言が忘れられず、私は今も苦しんでいます。

六十一年前の記憶を忘れることはありませんが、語る事、書く事の苦痛から、身を避けていた自分を反省し、今、戦争のおろかさ、怖さ、むごたらしさを「伝えなければならぬ」との切羽つまった思いがあります。それは、戦争を知らない世代の人々が求める強い日本の姿が、戦争前の様子に重なり、居ても立つてもいられないからです。

戦争が遺す国民や被爆者への贈り物は、未来永劫にもう要りません。被爆二世、三世の援護も切実な事です。核が使われれば、逃れる方法はありません。

私達が生きている時代に、平和な世界になってほしい、そ

のためには、私も残された人生で、出来る限り努力し続ける事を誓います。

平成十八年八月九日

(「長崎原爆犠牲者慰霊平和記念式典」被爆者代表のことば)



平和への誓い

一九四五（昭和二十）年八月九日、当時私は十一歳で川平町に住み、西浦上国民学校の五年生でありました。同校は、川平、滑石、西浦上の三校舎で分散授業をしており、当日午後からの授業となり、樹齢三百年余りの「千茶の木」と言う大きな木の下で国取り遊びをしておりましたところ、突然ピカーツと閃光が走りました。のちに原子爆弾のことを「ピカ・ドン」と言う呼称で呼ばれるようになりましたが、私の記憶にはドーンと言う音はなくピカーツと言う光だけが残っております。

急いで家の裏に掘られた横穴式の防空壕の中に逃げ込み、どの位の時間が過ぎたのかわかりませんが、外に出て見ると辺り一面建物は倒れ、物は吹き飛び、空は暗く、黒い油雨が降り、あちらこちらには火の手があがっております。私の母校西浦上国民学校の校舎は爆風で押し潰され、四名の教師と、百三十六名の生徒達が犠牲となりました。



東海 ムツ子

当時西浦上国民学校の教師だった岩本喜十先生の遺作の中に

* 屍の重なる中を灼け爛れまだ命ある友を運びぬ。

* 校庭に爆死の友を吾は焼き髪逆立てて友は焼かれき。

このような詩があり、今も私の脳裏に焼き付いて忘れることが出来ません。

私の母のたった一人の弟は、長崎の寺町から道の尾の叔母の家へ、疎開荷物をリヤカーに積み移動中の出来事でした。時間的に見て大橋付近で被災しただろうと推測されたので、親戚一同が茂里町から大橋一帯にかけ、焼け焦げた遺体と臭の漂う中、浦上川沿いを中心に俯せになった屍を表面し、両手を合わせ祈り乍ら一生懸命に捜しましたが何一つ手がかりとなるものは見つかりませんでした。

戦争とはいえ、アメリカによる、たった一発の原子爆弾のために幾多の尊い命が奪い去られ、万物総てが灰と化し、五

十七年目を迎えた今も原爆症で、心身共に苦しめられている人が沢山いることは現実の姿なのです。

今なお、世界には、核の時代へと移行し、核保有、核実験、テロによる惨事、戦争による犠牲者と不幸は絶えません。この不幸の芽を摘みとるためにも、私達被爆者は、我が国における非核三原則の法制化を早急に進めながら、世界の「核兵器廃絶」を提唱し、私たちが体験したような悲劇が二度と起こらないよう、平和な明るい世界が一日も早く訪れることを日夜念じ、又祈り「核のない世界平和実現」のために努力していくことをここに誓います。

平成十四年八月九日

〔長崎原爆犠牲者慰霊平和記念式典〕被爆者代表のことば〕



平和への誓い

大平力男

今日、被爆から四十九回目の八月九日を迎えました。あの日の原子爆弾は一瞬にして七万余の尊い人命を無残に奪いました。

私は、母と妹、弟三人の肉親と、多くの親しい友人を失いました。このことは永遠に忘れようとしても決して忘れることはできません。

あの日、私は大橋町の三菱兵器工場で被爆いたしました。当時十六歳、原子爆弾の炸裂によって工場は破壊され、大きな鉄骨が三千度を超す灼熱をあげ、「アメ」のように曲がっていました。私は爆風で五十米程、吹き飛ばされ、屋根材の下敷きになって意識を失って全く動くことができませんでした。二時間位経過して意識が回復したと同時に無我夢中ではい出し、昭和町方面の林へと避難しました。避難する途中負傷して助けを求める者。火傷して皮膚がポロポロになり水を水をと泣き叫ぶ者。また、川沿いには水を求めて焼け焦げた

死体が至るところ、黒山の如く、重なり合っていました。とても悲惨で残酷でありました。戦争中とは言え婦人、子供まで犠牲にした原子爆弾投下は人道上、決して許すことではできません。また二度と繰り返してはなりません。

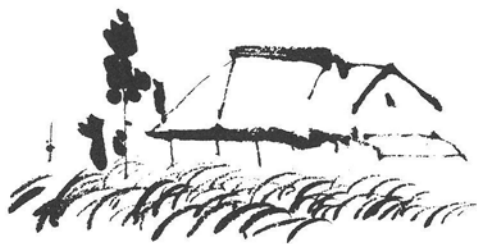
NPT核拡散防止条約問題が論議されておりますが、被爆者である我々の願いは核兵器廃絶であります。世界各国の人々へ訴えて一日も早く核兵器のない世界平和が実現することを望みます。今日、ここに出席されております村山総理大臣様に声を大きくして申し上げます。日本政府は、核兵器を保有する国に対して廃棄するよう働きかけて下さい。そして、我々の悲願である被爆者援護法を一日も早く制定して下さい。政府の責務であります。

あれから四十九年、私たち被爆者は高齢化が進むにつれて、病弱になっておりますが、私たちはくじけません。我々が被爆した体験を次の世代へ語り継ぐまで生き抜くことを約束し

て、私の「平和の誓い」といたします。

平成六年八月九日

(「長崎原爆犠牲者慰霊平和記念式典」被爆者代表のことば)



平和への誓い

平野 英 男

「ヤルタからマルタ」と言う言葉がありますが、さきの第二次世界大戦はここに終わったと言っても過言ではないと思います。

しかしながら、東西冷戦は終わっても局地的には戦争の危機は継続されており、核保有国においては未だ核実験を行っています。一方、地球環境の悪化による大気汚染、人口の爆発的增加にともなう食糧不足等、人類が戦争に悩まされたもの以上に深刻な問題がクローズアップしております。

私達は過ぐる四十五年前、原子爆弾の投下を受け、肉親の多くを失い、又、友人知人等、一瞬にして多数のものが不幸な運命で命を失くしました。思えば悲しみの極みであります。また、かろうじて生き残ったものの多くは後遺症と闘い、病苦と生活苦のはざまの中で、この四十五年間をあけくれてきました。

それに対し、日本国政府は被爆者の援護対策として、昭和

三十二年に原爆医療法を昭和四十三年に特別措置法を制定しました。この二法によって被爆者対策としては一定の成果を収めたものの、それはあくまでも社会保障の枠の中のことであつて、抜本的な対策ではありませんでした。

本年五月発表された、原爆死没者の実態調査においても、身元すら確認できない数多くの原爆犠牲者の方々がおられます。一瞬にして、あるいは原爆症との長い闘いの末、無念にもこの世を去っていった方々の声なき声に、残された私達はどうのように答えればよいのでしょうか。

なにとぞ、日本国政府におかれましては、被爆者が納得する援護法を一日も早く制定して、被爆者が安んじて生きてゆくことができるよう格段のご配慮をお願いいたします。

本日の原爆犠牲者の命日に当り、霊前に立ち、被爆者・遺族の代表として、人類が地球上に生き残るため、主義主張・民族・宗教を超越して、紛争は正義と真理に基づき、話し合

いによって解決し、二度と過去のあやまちを繰り返さないよ
うにとともに平和に生きてゆくことをお約束し、私の「平和
への誓い」といたします。

平成二年八月九日

(「長崎原爆犠牲者慰霊平和記念式典」被爆者代表のことば)



被爆前後の手記



山川 米雄

昭和二十年（一九四五）一月の、山川家の家族構成

世帯主 父 山川主太郎（六十七歳）

母 山川 マツ（五十一歳）

二男 山川 正雄（二十八歳）

二男妻 山川 チマ（二十五歳）

三男 山川 三郎（二十二歳）

注、現役兵で大村第五十五聯隊に入隊中で不在

私四男 山川 米雄（十七歳）

右記通りで、六名家族で、長崎市西郷八二五番地、現西町六二五番地（二三番四二号）で、元旦を、迎えて、今年、家族全員、悲惨で悲劇的な、運命が、待って、いようとは、夢にも思はず、生活を営んでいた。

兵隊に行っている、三郎の為には、陰膳を供え（自分達が食くする、物を、蓋付きの、器に入れ）夕方膳を、引く時、

蓋の裏側に、露が着いて、いると、無事と、占いのな、ことで無事を祈る。

兄正雄は、昭和十七年（一九四二）に、三菱重工業長崎造船所に勤務中、突然赤紙一枚で、御国の為、君（天皇）の為に、召集令状なるものが、きて、「出征」兵士と、美名の下に、軍隊に執られ、福岡県久留米聯隊に輜重兵として、入隊後、中支那（現中国を北支那、中支那、南支那）と分けて、中支那派遣軍本部付として、就隊中、大東亜戦争（第二次世界大戦）が始まり、ジャワ島（インドネシア）に転進し、「マラリア病と結核に罹り、昭和十九年（一九四四）に病氣除隊となり、元の造船所に、復帰したが、病氣悪化して、休職となり、家で療養生活しながら、いたが、大村連隊に入隊せよと、再度召集令状が、来て、入隊に行ったが、検査の結果は通るわけがなく、前に病いで、除隊になった者が、当時良薬は皆無の状況で、病氣が治癒する、はずがなく不合格で、

帰宅する本人は、不名誉だと嘆くも、しかたがない。

其の後家で静養中に、病いがひどくなり、二月十三日に、病死する。官身分陸軍上等兵勲八等瑞宝章、二十八歳であった。

三男の三郎は、三菱重工業長崎兵器製作所茂里町工場に機械工として、勤務中、甲種合格となり、現役兵として、大村連隊歩兵として入隊数ヶ月後、出発前日、門司港より、出港すると、連絡あり、現北九州市小倉南区若園町にいた、義姉山川アサ子さんが見送って下さったが、軍の機密で行き先は、明かされなかったのであるから、其の当時は行き先不明で何処に行ったか、分らなかった。

昭和二十三年（一九四八）二月二十七日になってから、ピルマ国（現ミヤンマ）ピンマナ県ピヨウベ北方七二五高地で、昭和二十年（一九四五）四月十三日に（二十三歳）時戦死と公報が来て、寺町の大音寺にて、遺骨傳遣があり、白木箱に名札が入ったものを、わたされた。

数年後長崎県庁内引揚援護局にて、調べたところ、昭和十八年（一九四三）四月十日歩兵第五十五連隊要員現役兵として歩兵第四百四十六連隊補充隊第五中隊に入営轉属為八月十六日門司港出發○月○日？港上陸同月同日同隊に転属戦死時の所属歩兵五十五連隊（注？印○印とも、当時軍の機密で一般に

は知らされていなかったので不明である。）

官等身分陸軍兵長 山川三郎（二十三歳）勲八等白色桐葉章

昭和二十年（一九四五）八月九日の私（年齢十七歳三ヶ月余）は午前六時三十分すぎから工場に出勤途中いつものことながら、今日も無事であることを念じつつ、最近は米國航空母艦から発進する艦載機グラマン（戦闘機）がいつ飛来襲いかかってきて、機銃掃射されるか又西太平洋マリアナ諸島テナアン基地グアム島から、発進する。爆撃機B29に爆弾を投下されるか分からないように最近は戦地同様銃後（国内）も、空襲により戦場化し、制空権は、完全に敵國（アメリカ）の手中にあった。

当時日本には、迎え撃つ戦闘機はほとんどなく、あるのは特攻隊が敵連合軍艦に突入体当り自爆用に使っていた。

最近は、高度八〜九千米位を保って、晴天の日は、白銀色の機体を太陽の光を機体に受けてキラキラさせながら、一機又時には、爆弾を投下するでもなく、拾機編隊で、幾編隊も長崎上空を白昼堂々と、飛去って行く時、たまにB29が高度が高いので、高射砲陣地から砲射撃するが、射程距離が低く、B29の下の方で、むなしくバンバンと破裂雲が見え

るだけの悲しさ。どこを空爆に行く編隊機かその他は毎日の如く一機B 29が昨日は南から北に、今日は東から西に、明日はどの方向から飛来するかと飛去って行くばかり(注 終戦後其の飛行は航空写真を撮っていたことが判る)ばかりで甘く見たか、上空をB 29が通り過ぎる頃警戒警報のサイレンが鳴ったり、空襲警報が出たりしていた。

仕事をする時は一応住吉トンネル工場で守られているつもりでいるからよいが?家の方は西郷(現西町)の田舎の一軒家で隣りと云っても向い側(現錦二丁目五番八号)の家出口さん家で、隣組と云っても、長崎市立西町小学校の裏門まで山際に「ポツンポツン」と六軒(山川土太郎西町二三番四二号)(出口伊三郎現錦二丁目五番八号附近)(永富時雄現錦二丁目四番五号)(木下喜作現西町一〇番二八号)尾下聡十現九番一号山下七太郎現西町三番五号附近 各氏六軒あった位だから、一軒家だから、だいたい大丈夫と思うから、疎開(ソカ)荷(良い着物等大事な物が入った箆笥)を向いの出口家から、長崎市水ノ浦町の方に嫁に行った平山ナミさん(当時六十七歳)当町に三菱造船所があるから、空襲で家が焼ける恐れがあるからと預かってくれと云われて預かっていた位だから。しかし預け人の家は焼けず無事で、預かり人の家が爆心地から二km位も離れた位置にあった吾が家が焼けてしまった。

原爆の威力には通用しなかったのである。

私は三菱重工業長崎兵器(航空魚雷)製作所大橋第一工作部第二機械工場大橋工場より昭和二十年始め頃より住吉トンネル工場に機械共ども移る。

第二トンネル(現赤迫路面電車終点右側より二番目のトンネル)内の作業で昼・夜勤で朝七時より夕七時まで夜勤は夕七時より朝七時まで十二時間勤務で、各昼・夜食事は十二時夜〇時に一時間食事休憩と中間各十時と三時に草煙休みとして、各勤務中二回十分程休憩があり、相方が病気等で出勤できない時は、そのまま續勤となる時もあり過酷な勤務であった。

トンネル工場の入口は普通のトンネルの型で奥行八米七十cm余位の所に、防壁があり、そこまでは、コンクリトで固め普通の構造になって、表には十cm余の部厚い板で観音開きで名を作り、迷彩色を施して、そこが仮事務所になっていた。防壁は厚み一米位いで、その奥は素掘りで、荒削りそのままで、裸岩盤がいつ落下してくるかわからない。今なら到底考えられない、状態の危い場所に、工作機械を据え付けた、危険な中での作業でした。

午前九時過ぎ頃か?警戒警報、續いて、空襲警報が発令されたらしく、現在住吉電停から住吉神社参道に向って三十米

位進入して、左側〔元昭和十一年（一九三六）三月まで、西浦上村立西浦上尋常高等小学校跡地〕に、三菱兵器女子寮が建ち、その寮生女子報國隊、女子挺身隊等の少女達が、トンネル工場内に避難して来ていたのが、各警報が解除になり、外に出て帰寮途中寮に帰り着く直前B 29がいつもの通り飛去つたと勘違いし、各警報を解除したのであったろうが、其の日のB 29爆撃機はいつもの爆撃機とは違った悪魔の使いだったのだそれを誰もが知るよしもなかった。

実はあの恐怖の原子爆弾を抱き抱えて、投下する場所を捜し廻っていたのだ。誰もが、そんな恐いことを夢にも思っていないからである。

爆撃機が再飛来して来た時はもう遅かった。せっかく安全な場所に避難して来ていたのに哀れ、寮生少女隊員達が、原爆投下破裂にあい、熱傷者負傷等全員が被爆し、ほとんどの少女が悶絶死亡したと後程聴く。

私は四尺（一米三十cm）余の旋盤工として、航空魚雷部品のネジ切削り製作中、突然停電、今までの騒音が一瞬に消え去り、真暗闇の中シーンなる。

「オヤツ」なぜだろうと、思いながら、しばらくそのまま立っていたが、手探りでモーターのスイッチを切り、トンネル工場の中は真暗の中を防壁側の通路の方から、差込んでき

ている、外の明るい方を目標に外に出ようと手探りで、旋盤を離れようとした時なんと、今まで体験したことのない、暴風（爆風とは知らなかった）が突然吹き込んできたと共に、荒削りのままの天井に張った水滴防止用のトタン板が工場の中の天井下に張ってあった電線に引つ掛かって下には落下せず、グワラグワラと鳴り爆風は一瞬の間に西側から穴を吹き通り過ぎて行つた。後はトタン板が電線に引つ掛かったままでガラガラと軽く鳴っている。

今のはなんだつたんだろうと思う間もなく、外の方から異様なざわめきがして来た。なにごとが起つたのだろうかと思つて、しばらくジイトしていると外の方から、トンネル工場の前に爆弾が落とされたから、奥の方に行くようにと言われたが、奥の方は真暗で行けそうにない、それでも行こうと思つて動く足元に色々と物品が散乱しているようで、奥には行けない。皆其の場でザワザワしているだけであつた。

どの位の時が過ぎただらうか、永いようであり短時分のようにもあつた。その後、外の方から、外に出て山に避難せよとのことで、外に出る時、私の三米位離れた奥にいた、前田君が自分の額を指して、なんかこのヒリヒリすると言うので見ると、（直経）一cm位の渦巻状の工作物の切り子が突刺っていた。「コリヤ（これは）簡単にはトレンバイ（取

れないよ)」と言って、そのままにしていたが後はどうなったか？

外に出て見ると、これはいかに空は真暗に近い黒煙に覆われて、下は火の海に近い状態で阿修羅の如く、小学生の頃長崎くんちの見世物小屋でのぞきを見た時の絵に書いた地獄絵図そのままの惨状で身がふるえた。

前を通っている国鉄（現JR）の鉄道の向う側の民家が燃えさかっている、ドス黒い煙をモクモクとあげ火の粉をパチパチとあげて燃え盛っている。

トンネル前の広場、トンネルを掘削した土石を置いて広場になった。土手に置いてある旋盤（工作機械）で削り油の付着した切削屑を入れたかます（稲藁で作った穀物等入れる四角い袋）に火がついて燃え盛っている。なんでこんなに何もかも燃えているのだろうか、あちこちで熱傷で水ぶくれ、汁が出ている人、又皮が剥けて、皮がぶら下がっている、丁度トマトの半熟位の薄皮を剥ぎかけのように、皮が垂れ、赤身、白身が出て、汁がにじみ出している人がなんと多いのか、火傷、熱傷、負傷者等が倒れ呻いている者、呻きもできない者、頭から血が噴出しに近い出血をしている人もいる。

いったいどうしたことか、すると第一号トンネル（赤迫電停）側の方から、当時乗艦するはずの軍艦を敵米国軍に沈め

られ、少年海兵隊がトンネル工場に工作機械等の移動や据え着け等の手傳いにきていた。その少年海兵隊の一人が上官らしい人の肩に手を廻して、うなだれながら「班長殿、もう僕はだめです。」「なに貴様言ってるんだ、この位の怪我で」と励ましながら来る人、被害者があまりの多さに助けるすべもなくごく一部の救護班が救助に係わっているだけでどうすることも出来ず、山に一応避難せよと誰れか上司の人が言っ

て、北側に向って左手に仕上工場が入る予定のトンネルを掘っている、山の裾の方から少し上った所に入りまだその時、市内浦上方面の出来事はなにも知らず、周辺の惨状だけ見て恐ふに怯る中で色々と言が出て、結局は、四・五人組んで行動することになった。

私は時津村（現時津町）の池田忠雄君外三人と共に行動することになり、私達の作業をしていた。トンネル工場の上の山に登って見ようと云うことで、山裾を出て小さな谷間に畑があり何本かビワの木を植えてあるその畑の脇の小道を通って行く時には、もう此の畑にも被害者が苦しみながら何人かいた。

私達の前を、たどたどしい歩みで若い婦人が、もう亡くなったと思われる、赤ん坊を知らぬか背負い、おうむけになった赤ん坊の首はぶらぶらさせて自分も右側の身体半分火傷を

負って髪の毛は焼けちじれ放心状態で上がって行く。

その婦人を追いこして畑の脇の小路を山の上に登って行き、住吉の長崎市西浦上支所（現チトセピア手前北消防署）の方を見てまず視界に飛び込んだのは、支所附近住宅の密集地という家が殆ど全部火の手が上がっている。外には人が慌ただしく、右往左往しているのが見える。

住吉神社下附近、鉄道の向こう側の部落西北郷（現若竹、西北、柳谷、音無、其の他の各町）の点在する。家も燃えている所もあるが、先の方は煙で見えない。今朝はあんなに晴れていたのに、空は雨雲がでたような空。なんだか薄気味悪くなった。

広島に新型爆弾が投下されて大被害のあったのを知らなかった。私はこれは焼夷弾を余程沢山投下したのだろうか、それにしても火傷者焼傷者怪我人が異状に多いのはなぜだろう。

それから時間にして、どの位経ったか。全員集合との声で山から下る途中畑を見ると又怪我人焼傷者が増え、火傷の人は、前の全部とか、後の方全部とか、身体の左側か右側とか焼傷し、そういう人の焼けた側はほとんどの人が着衣が燃え、焼けてない方に少し燃え残って身体に付着している者、全身焼傷の人は衣類が着たまま燃えるのを脱ぐひまもなく燃え全

部焼けたらしく全身火傷になったのでしよう。脱ぎ捨てえたら全身火傷しなかった人も多かったでしょうに、側に水でもあれば、と思っても無い所が多いから、県道側には川もあつたのだが川岸が高くて飛び込まなくてはだめだし中には飛び込んだ人もいたろうが、

びわ畑には火傷していない方を下にして、何人も横になり、又俯せに又上向になって、倒れ込むように苦痛に耐えられず、座ったり木とか土手にもたれかかったり、寝るも、座るも出せず、立ったままフラフラしている人、皆んな苦痛な声を出して、水を求める人、唸るか呻く人々、悲痛な声、生血の臭いの中、死者も何人かいた様子であった。

その中に母親と思われる婦人が頭から血を流し、良く見ると、後頭部が石榴の実の様に割れ血が噴出して地面にどす黒い血が溜っている、それでも赤ん坊を抱かかえ、生死の界をさまよっていても、自分の子供を守らうとする母親の強さには敬服するばかり、それでも赤ん坊がオツパイをまさぐりながら泣きじゃくっている。たぶん乳が出なかつたんだろうと哀れであった。

まだまだ怪我人、火傷者焼傷と各方面から集まって来ているが、吾々にはどうすることもあまりの多さに手も足もでない、唯上司の命令で行動に従うだけしかなかった。

集落地に行つて皆んな集つた所で、「今から大橋の本工場（現長崎大学）が大変だそうだから今から、救助救援に行く、県道（今の国道二〇六号線）は塞がっているから、鉄道線路傳いに前の鉄道を通つて、岩屋橋上方の西郷踏切（現西町踏切）まで行く。

途中杭木までが燃え所々で燻くまっている中を少しでも遠くへ逃げ救いを求めて行くのだろう、普通の軽い負傷者にまじつて、重傷者が軽い負傷者焼傷者並に思っているのか、そばを通る人が皆んな焼傷者とか、怪我人だからだから、神経が麻痺しびしていて、あまり痛みを感じないのか精神力で歩いているのか、普通なら歩くどころか動けそうにないような人まで棒切れを拾つて、それにしっかりと両手でつかまつたり（支え棒）にし又杖としているもの、口をかみしめてヨボヨボと歩いて来る者、さまざまで、大橋方面から、前を焼傷した者は、手両腕を斜め下にたらし手の平を下にして手首から斜め前に曲げうすいビニールの破れを身体の焼けた部分に付けたように皮ふが垂れ下がり赤身少し白身が出汗がにじみ出て見るからに、見た者自身ヒリヒリするような苦痛を感じる位だ。

本人達是一所懸命で、先の人の後について行けばどうにかなると思つてか、又知人、親戚を頼つてか、自家にかとにか浦上から早く離れ逃げたいのか、滑石郷、岩屋郷、時津、

村松、三重方面に向かつているのだろう。そのほとんどが水を飲ませて、水はどこにありますかとたずねる、水はもつていないと答えるしかない。その人達とは逆さかに大橋方面に向つているのは私達救援応援に行く者のみだ。

しかし途中力尽きて座り込んでいる人、倒れて虫の息の人もある人等さまざまで、西郷踏切を渡つて橋を通り川に側つて、左に入った所で「水を飲ませて」と足首をつかむ人「助けて」と弱々しい声で哀願する人、「どうして助けないのか」と怒鳴る人此の辺の人はもう動けない者が多かつたが、無情にも足、手を振り払つて、自分達の目的地に向つて行動するだけだった。

鉄道を歩いてくる時から気付いていたが、大橋（岩屋橋）のガスタンク（現西郷公園附近）がめちやくちやに北西方向になぎ倒されていた。破裂してフニャツと曲つているのを見つつまだ変なガスくさい臭においをかぎながら、やつと大橋本工場の門（現長崎大学本部正門電車通り側）にたどり着いた。

工場を見ると、屋根のスレート板は紛微塵になつて飛散りメチャクチャにへし曲り倒れ折れた鉄骨が見え、皆同じ方向に傾かたむき倒れている。工場敷地内の瓦礫がれきの上を踏こえて真直ぐ（注 工場の正門は純心高等学園側にあつた）正門の方向に行つてい途中の防空ごうの入口に上半身出していた。

第一工作部長（海軍佐官級）から十人余の吾々に説明があり、「敵機B29のブーンと爆音がして、しばらくしたら何か落下傘のようなものが、フアーと落下して来たと思うまもなくピカツとしたら、このざまだから爆音がしたら、すぐに防空ごうに避難するように」と注意指揮をしておられた。部長の話では広島に落された、新型爆弾と同じだらうと言っておられた。

私は新聞・ラジオ等見たり聴いたりしていなくて初めて聴き知ったので、道理でひどいものだと思った。たった一発でこの惨状とは、そら恐しささえ感じた。（未だ放射能の恐怖を知らず。）

そこで指示通り防雷工場に行く途中、防火用水槽（大型）がある所の全部の水槽高さ一米余、幅三米余、横幅二米余の所に、水の中に首を突込み息たえている人、片手を槽に入れたり、水槽の淵まで顎をのせてそのままの人、水槽にやつとつかまったもののそのままの人。そばまでやつとたどり着息たえている人々なんとむごい皆んな力いっぱい水々と水を求めて、すぐ側まで行って、水も飲めずに息たえて逝く皆んなたどり着いた状態でおり重って息たえている。そんなに皆苦痛の内ながら、水水と水を求めて傍に届きながら力尽き折重りこと切れ水の傍にたどり着き、安心して死んだのか、さぞ

無念であつたらうに、そんな人が多い。水ー水と特に熱傷、火傷、怪我した人達は水が欲しかったのでしよう。

思わず合掌していた。

指示された場所に行く前から救助救援活動に入るも負傷者は先に救助に行った人達、又現場にいて軽負傷者も加わって救出したり、自力で脱出したりして殆どいなかった。先に救助活動をしていた人の中には自分自身が怪我をしているにもかかわらずに救助救援活動をした人も多数いたと聴く。

私達は生血の匂いのする血の海につかっている死体運び。四人で手足を片方ずつ持ち運ぶ、担架がなかったので、そうするよりほかなかった。時が時なので、死体安置所とてなく、唯空いている場所に置くだけ。十人位遺体を空き場所に並べ、ある程度して休息していると、その内昼食用に運んできていたのでしよう、誰れかパンを見付けてきて箱ごと出して、皆んな食べるように言ったが誰れも手を出して食べる者はいなかった。

しかし、今まで多数の負傷者、熱傷者、死体等見て視野に入る焼野原その惨状を見たからか、自分の神経が麻痺したか、精神状態が異常をきたしているのでしょうか、負傷者、火傷者、熱傷死体を見ても、なんとも思わないようになっていた。唯血の臭い、異臭が鼻につくだけだった。

最後まで行動を共にしていた池田忠雄君が午後五時頃と思
う時お前の家に行ってみようかと言ったので（ほんとそれま
で家のことはまったく考えていなかった）、「ウン」と言っ
て家に帰って見ることにした。

瓦礫がれきの中を歩いて西郷のお寺の照円寺（現清水町）の右下、
川側の道路（JR鉄道音無踏切を渡って十五米位の所）で
前から素裸で歩いてくる背の高い人が全身焼傷し皮がむけ垂
れ下り、肉が赤・白色で汁がにじみ出て頭髮は焼け縮み、両
手を前下方に出し手首をたらし、衣服は焼け剥はがれ、まる素裸
で腰にベルトだけ残り、腰に食い込んで、身体が腫れあがっ
ているから、丁度風船をふくらましたのをまん中で紐ひもで括くくつ
たように、締括しめくられ状態で「バンド（バンド）ハルシて（外
して）」と言うので朝鮮人だなと思った。取り除くのに苦労
して、やつとの思いでベルトを外してみると、水の流れが少
なくなった、川岸の草や底木に破れたビニールが絡んで垂たれ
ているように、皮ふが付着して、ぶら下がって取れてきた。
ベルトを返そうとしたが、本人はそれどころではなかった
のでしよう頭を左右に振って、そのままヨタヨタしながら
音無踏切の方に去って行った。あの後朝鮮人はどうなったら
うかと気にかかって、今もこの場所を通ると未だ思ひだす。
ベルトを道端の草むらの中に置く、この道にも怪我人や焼

傷した人達が寝たり、座ったり横になつたりして呻いたり、
悲痛な声を出し、又水を求める人等がやはりいた。又犬まで
背中を焼傷して痛そうにウロウロしている。カラスは羽根が
焼け飛べなくて、地上をピョンピョンと跳ねていたのが、う
ずくまってしまうた。

狩股（現音無町）を通り現南山小学校下から先の方（現錦
一丁目）、白鳥町の四ツ角から田川療養所の間いだ右側田・
畑で左側が山で切り通しみたいになっていた。山手の倒木を
くぐり抜け、飛来物を踏みこえ、取り除きして、やつと家の
見える手前（現錦二丁目五番）附近で下の畑の隅すみにリヤカー
小屋を建てていたのが、小屋は吹き飛びリヤカーだけポツン
と残っていた。

「リヤカーだけあるバイ」と言いながら、少し進んで行っ
て、家の見える曲がり角を廻って見ると向い側の山の下（現
上の山は綾部台）西町六二八番（現六二五番地）にある家は
焼けてしまつて燻くまって（注 一週間位）いるばかり、あの家の
中には、目の不自由な父（六十七歳）が寝ていたはず、どう
なつたらうかと思うと、いても立つてもいられなくなつて急
いで（注 ここでやっと人間らしい、感情が湧いてきた。）家の二
十米位の所に横に川があり、家から五十米位の所に橋はなく、
雨が降らない時は飛び石の上を渡り、川岸の所に鉄分を含む

湧き水があり、それを飲料水として使用していた。川に降りる時は、兩岸に斜道がありそこから降りていた。(注 錦二丁目六番十五号前と西町小公園の間今暗橋になっている)川の方に降りて行った。

此の場所も水を求めて負傷者焼傷者等で足の踏場もない程被爆者が狭い川川に良くも集ったものだ。それもそのはず雨が降らない石ころだらけで、その透間を水が流れる程度の川で、上の畑の端(現バス道路)に植えてある根元直径一米余の梨の太木が川の上に斜めに倒れる格好で生えていたので、川を覆うようになっていたから、好都合の隠れ場所にもよかった。

小枝葉は多少吹き飛んでいても広水はあるし、その中に父が右足首から下を火傷して土手の斜面に倒れかかるようにしていた。どうしてここまで来たのかを父に聴くと、二男正雄の嫁のチマ(二十五歳)義姉さんが家が燃え盛る家の下敷で足の方から焼け出しているのを、自分も大焼傷しているにも係わらずに助け出してくれたと聴いて頭が下がってよかったですと安堵した。とたん後はしばらく言葉も出なかった。

ふと吾に戻り周囲を見まわして見たが二人の母も義姉も見あらないので、父に二人のことを尋ねると、私の家の東方にある、出口さん方の裏の孟宗竹山(現錦二丁目五番八号の裏

手)にいらるとのことで行って見るけん父に言って、行ってみると、ここも同じ人達が地面に寝たり、横になったり、座ったり、伏うつしているもの等いて呻く人、痛いよと泣く子、泣きもえずして苦しいと繰り返して顔をしかめ苦痛に耐えている子供、どうにかしてくれと怒鳴る者その中の多くの人が水を求めている。様々な様相の中の傍にただで自分までも痛くて苦しくなるようだ。

母達はと良く見ると、母と義姉二人は、その中に義姉が持ち出した布団を地べたに広げて二人寝ていたが、ほとんど全身焼傷で頭髮は焼け縮れ顔は煤すすけ薄黒く、目は「トローン」として、哀れな姿になってしまっていた。なんと行ってよいかわからず、言葉がつまってしまつて、しばらく唯じつと見つめているだけだった。

ヤツと気を取りなおして、「どこにオッタトネ」と尋ねると、苦しそうに目をつむっていたのが目をあげ、弱々しい声で椎立(注 現三芳町十三番)の所で稻田の草取り(除草)に二人で行っていて、ブーンと飛行機の飛来音がしたので腰をおこして飛行音の方を見ていたら、ピカツとして気がついてみたら、田んぼの中に尻もちを着いていた。二人で向き合つてみて相手が異様な格好に気付き、自分もなにかヒリヒリしている、着衣が燃え全身近く火傷焼傷し着衣の一部が身体に焦着

いているのを見ながら恐くなり、稲田から一km位の場所から自分の身のひどい熱傷でヒリヒリ痛かったろうに又激痛をこらえて急いで家に帰った。

家は倒壊し燃え盛っている家から、家の下敷になっている義父を助け出し、又布団も少し出し自分の荷物も出している。普通の人でも大変なのに、よくもまあ自分は大火傷していて稲田からどうして来たかわからなかったでしょう。義姉は二十五歳の若さとはいえ、その気力はどこから出るのか、その勇気唯頭がさがるばかりであり、感謝でいっぱいである。本人は氣に付いた時はさぞ苦痛を感じ一氣に力が抜けさぞや痛みを覚えたことでしょう。

川岸にいる父を連れてこようと川の方に下って行って見ると、私の姉の小角初江(二十五歳)が姪を初江の次女良子(二歳)を背負って呆然として父の傍に突っ立っていた。

宣子(姉の長女、五歳)はと聴くとやっと我に返って、的場(注 元陸軍所有で当時は長崎医科大学の射的場になっていた現在国際交流館留学生寮)の上方(西町十二番附近)に防空ごうがありそこに火傷して義父母達と寝ているのを義妹のアヤ子(二十歳)に頼んで、一寸来て見た。と言うので「早く行って宣子の側に、いてやれ」と言って帰す(注 その夜、死亡した)。

それから父を孟宗竹山に連れて行き母の側に寝かせたが、一人で三人を見ても手当をするにもクスリも何にも無く、どうすることも出来なくて唯見ているだけ着いてきていた池田君も早く帰っていた。日が暮れ夜となり、だんだんと苦痛の声がひどくなる、敵機が時々飛来してきて照明弾を投下して青白色の光を出し照らして、地上の状況を調べていたのでしようが、我等に唯恐怖心を煽り飛去っていく。

晩中呻き声の中苦しみ痛がる声、水を求める声の中で一睡もされないどころか皆んなになんにもしてやれない腑甲斐い無さの内に夜明けとなり、この家族三人をどうしようかと思案している内に時がたち、その内に警防団(今の消防団)の人が来て土橋(注 現西郷橋、当時石橋だったがその前は直経四十cm位の橋桁の上に丸太を並べた橋の上に道路の土が流れ込みそれぞれどろ橋と呼んでいた。)の踏切(現西町踏切り)か照円寺下の踏切りまで行くと汽車が停車して、諫早か大村の病院に乘せて連れて行くそうだから、怪我人、火傷した者は連れて行けとのことだった。

一人でいっぺんで連れて行きえないので、リヤカーに乘せて行こうと思つて見に行ったら昨日あったリヤカーが今日はもう誰れかが持つて行つてしまっていた。(注 三十七年後、城栄町の上戸病院(現みどり病院)に入院中、同室の杉本さんが讀ん

でおられた「奄美の原爆乙女」上坂冬子著書に記載によると長崎県被爆者手帳友の会会長深堀勝一氏を乗せて行ったとある。当時部落に、五〜六台リヤカーがあったが小屋の焼失と倒壊で押しつぶされ使用不能だったので私家のリヤカーだったとわかる。しかたがないから父は一応孟宗竹山にいてもらい、私が母を背負い、義姉は歩いてもらうことにした。

義姉がとほとほと先に行く、六十kgに近い母は私には重くて、少しは歩いてもらったり（注 水稲の田の中で草取り中足は水に入、水稲の影で足の方はあまり焼けていなかった。）又背負いながら引摺るかっこになったりして、一步一步進んで行く。普通なら点滴でもしながら、又冷したりしながら救急車で搬送しなければならぬ焼傷の重傷者だが、そんな手段などなく、車で走れるどころかほとんどの人が火傷、怪我人だらけだからそんな事が出来るわけがない。

途中（現音無町四番清水町二十一番の境界の道路附近）の、当時畑の土手の所を行くとき私からもみくちやにされて、さぞ苦しく激痛にもたえてか、痛さを知らせる神経が麻痺しているのか、じっと痛みを我慢しているのか、ここで休もうでと言うので、畑の端に背をもたれかけ座らせると、「チマさんは」と聴くので「先に行っている」と言う。「早よう連れで行ってこい。わが（自分）はここにおるけん」と言うから

「そんなら（それでは）」と言って、追いかけて行って、追いついて「大丈夫ネ義姉さん連れて行くけん」と言う。「私は一人でよいから米雄さんはお義母さんを連れて来て」と言って義姉さんは「トボトボ」と歩いて行く背を見ると哀れに見えても一人でどうすることも出来ず、見送るだけだった。しかし後三十米位いで音無踏切に着く所だった。

しばらくして母の居る所に戻って「義姉さんは一人で行くと言って行った。もう着いているじやろ（だろう）」と言うと、「そうなの!!」と言って水を飲みたいと言っているのでその附近の金井方等の共同井戸水を汲みタオルに浸して来て「シャブ」らせている内に西郷踏切方面から上って来た汽車は全部を乗せて発車してしまった。本人は、いかにも満足したようにしてチマさんなどどうしろうかい。と言うので「今の汽車に乗って行ったジャロ（だろう）」と言った。

それから数十分休んでから次の汽車で、とやっと音無踏切に辿り着くと、汽車は行ってしまったのもう後は来ない、道ノ尾駅まで行けばそこからは出るからという。アーアーやっとしん苦こん苦しここまで来たのにと泣き出したくなり、いつきに疲れが出てきて座り込んだ。しかし義姉さんは乗車して行ったもようだった。どこにも見えなかったから義姉さんだけでも乗って行って良かった。しかし道の尾駅まで

私一人では母を連れては行きえない。だがどうかして連れて行かなければ、どうにかしなければ、そこで頭に浮かんだのは現清水町八番に住む叔母さんの家に応援を請いに行くことだった。あそこは少し山影だから大丈夫だろうと浅はかさ、母を線路の脇にいてもらつて「椎立の叔母さんの家から車力しゃりき（大八車）バ借りてくるケンここにおらんの」と言つて叔母（山下ミヨ（四十九歳）父の妹）さんの家に行つてみた。

山手にあつた小屋は少し傾いて、住家は山から少し離れていた為に倒壊しかかつていたが燃えてはいなかった。しかし、叔母は家の梁はりの下敷したじきになり頭を強打して怪我をし、仮小屋の中に唸つて寝ておられた。従姉弟達も負傷火傷したりしていたが、私は家の実情を話して、大八車を借してもらい、親切にも義叔父の山下萬次郎さんが従弟の諫男（十六歳）さんまでも「お前も行って加勢してこい」と言われて自分の家の状態はさて置いて、なんと義叔父さんの心の温あたたかい人でしょうか、自分は私の内のことしか考えていなくて、涙が出る思いで感謝でいっぱいでした。

諫男さんの加勢で、母を大八車に乗せて、道ノ尾駅まで、瓦礫がれきの中をやつとの思いで辿り着くと駅前駅前の広場に敷物もなく、地面にここも例外なく怪我人、焼傷者の重傷者ばかり軽傷者は怪我の内に入らぬ様子ようす、重傷者が一杯で応急救護所用

に天幕を一張して、応急的に油様の薬を塗っていた。

聴くと諫早、大村、其の他の病院は満員で塞がってどうにもならないから、ここでは仮り治療をするだけ。まともな薬等なく、馬の油とか言つて塗るだけ、今のよう痛み止めの注射をするでもなく、化膿止めの注射、クスリを与えるでもなく、包帯を巻くでもなく、さっきも言つた通り油の様なもの塗つて終り、それで帰れとは。そのまま無い場所に連れて帰るだけ、苦勞して何をしに来たかと腹が立つがしかたなく、薄暗くなつた道を大八車に母を又寝かせ、引いて力無く諫男さんと帰る。

途中丁度住吉トンネル工場の前に来た時、母が急に留留（留とは母の弟の留五郎叔父）ぢやなかな」と言い出した。私達には知らなかつたが血のつながりか、母の兄弟二人が話して来ているのを耳みみ悟さとく聴出して、呼んで二人ともびっくりしたのでしよう。自分の名を呼ばれて母の兄駒市伯父さんが、私の顔をのぞき込み「米雄じゃなかな」。弟の叔父さんは母を見て顔が汚れているので良くわかりづらく「姉な」と聴いている。「えー」と母が答えている、大八車を止めて、良く見ると駒市伯父さんと、滝口留五郎叔父さん二人だった。とにかく私はほっとして肩の荷がおりた氣になった。

村松村子々川郷（現時津町）、自分達の姉・妹の変わり果

てた姿を見て驚きの声で又「姉ナア」と言うが母が力なく「アア」と涙声になって兄弟に会って安心したのでしよう。叔父達は駒市伯父の子供である娘の山本キンヌさん（注 山本キンヌさんは後程にわかったのだが家の下敷のまま焼死していた）が錢座小学校の右手附近に住んでいたのを捜しに行く途中だった。

捜しに行くのをやめて「家は」と聞かれて「焼けてしまつてなかと」「そいじゃ滑石の肥塚酒造所に連れて行って見よう」と言われたが「向いの出口さんの孟宗山に「オトト（父）バおいとるケン、足を焼傷して寝せとるケン（から）」と言うと、叔父が「ナンジョン（そうだが）」（滑石の肥塚酒造場には叔父達の姪、私の従姉で現私の義母。娘が私の妻、家族全員で住み込みで杜氏として勤めていた。現滑石二丁目九番附近）と言われて、引き返してお世話になりに行つて見る。

広い土間に寝たり、座ったり、ねるも座るも出来ない人は太い柱に凭れ掛かりして、痛いと苦痛をうったえる人、苦痛にどうしようもなく呻く者と、ここも負傷者焼傷者を含む瀕死の重傷者等であらうだった。母は第八車に乗せたまま、母の事を叔父さんが姪の亀野ジノ（四十一歳）さんに頼みに行っている間に、一斗ジョウケ（一八〇ℓ籠）に何杯も焚き出した握り飯とタクアンを入れてあるのを食べるように言わ

れ、昼から何にも口に入れてなかったもので、腹は空腹だったのでもらつて飯べた。安心してか非常においしかった。

酒造用の米を倉から出して炊出し被災者負傷者等に救援活動で酒造場の人滑石郷の住人達の人が炊出しをしたり、怪我人の飯手当をしてくれていた。

握り飯をたべ終つた時叔父さんが、「後は自分達にまかせて。もしかしたらどこかにチマ義姉さんが居るかも知れないから気がけて見て行け」と、裸ローソク一本貰つて行くも、すぐに消える始末で役にはたたなかつた。

母を肥塚酒造場内に一夜泊らせてもらうことにして、肥塚を出てまもなくローソクの灯は消え、暗闇の中を諫男君と二人道の尾駅の長崎寄りの二番目の岩屋踏切り（注 現在は道路の位置が変り少し上の方に陸橋が出来JR鉄道を股つて架つて踏切りはなくなり道路は線路に側つて通っている）に出て汽車線路上を通つて、汽車に乗つていったのはわかっている義姉がもしやその辺に居ないかと、暗い中を見て行くが暗闇の中でわかるはずがない。現西浦上駅の上方の踏切りまで来た時、側溝の中から手がのびて来て、足首を捕まえて助けてくれと呼ぶ声があったが吃驚して恐くなつて走つて逃げた。諫男君も変に思つて「なんしたとな」と言つたので足を捕まれたと言うと何も言わずについて来る。

鷹の巢（現音無町西浦上駅下り右側一帯）は当時家も点々として、まばらだった。家も焼けたり、倒壊したり人もどこにいるか防空ごうの中か、死体が所々にころがっている位いでそこを通り過ぎ狩股（現音無町南山小下清水市場）前道路附近で諫男君と別れそれぞれの居場所に帰途につく。諫男君が応援してくれて多いに助かった。

私は孟宗竹山に戻る、父はどうしているかと思いつつ父の居場所に帰り着き今日の事を父に話す。姉初江は父の世話をしたり、昨夜亡くなった長女宣子達を警防団の人達が三菱兵器西郷寮焼け跡（現白鳥町拘置所の門から少し入った右側）で茶毘に付してもらったとの事、姉もほんとに子、良子を背負って、自分の子供宣子の亡骸に嘆くことも出来る状況ではなかったのである。一人で両方（自分の内と実家）を世話するとは大変なことであつたらう。

母は私達が帰途に付いた後に現私の義母で従姉の亀野ジノさんが母の所に来て「松叔母非度かことになったノマイ（です）ね」「エー、ジノなあコギヤン（こんな）なってしまったバイ、世話になるバイ」と言うのが精一杯の会話だったとのこと。

孟宗山に戻って見たことは傍に呻いて寝ていた山田伊三郎（軍隊に出征中）の妻光枝さんの妹さん椎立（現清水町）の

清水シズ子ちゃんが死亡して其の場に埋てあつた。（注 数年してから焼いて緑ヶ丘中学横の清水家の墓地に納骨したと）。又負傷者、焼傷者も減つて、それぞれ鉄道の方か道ノ尾方面に行つたものと思われる。ほとんどの者が西郷寮生だったやうだった。未だ動けない瀕死の重傷者だけ残つて呻き唸りも出来なくなっている。

姉も姪の良子も二日目の夜を孟宗竹山ですごす。翌朝父を隣組の山下秀吉（現白鳥町四番一号居住）、永富時雄（現錦二丁目五番八号）さんの協力を得て担架に乗せ、担いで住吉トンネル工場内に救護所があると聴いて来て下さつて、父を連れて行つてもらふことにして行こうとすると、もう一人出口家を実家とする、水ノ浦町の平山ナミさんの妹、出口マシさん（六十二歳）の人が自分も連れて行つてと言うのを、「二人は連れて行けない。無理だから、後で連れに来る」と言つて、孟宗竹山に残して行く。後はどうなつたか私にはわからない。

永富榮一（時雄さんの異母兄弟）さんの木戸前（現白鳥町六番四号）を通つて、石垣にそつて下にくだつて向い側の山手の下の道を（現清水町）今、山も田畑も家が建ち昔の面影なし。道も變つて今のバス道路は田畑だった）左に曲つて通つて行くと、山手の防空ごうの中に寝ている怪我人、火傷

した人達、少しでも動ける者は這い出て来ていて、人が来ると助けてくれと哀願しているが、誰れもそれぞれの目的で通っているのです、気の毒でもいたしかたがなかった。(注今だにあの声、水を、助けて、いっしょに連れて行って、いっそ殺してくれと、言う悲痛な声が言われた場所あたりを通ると耳について来る。今思えばどうにかして、その人達に手を差し伸べることが出来なかったのが悔やまれてならぬ。)

そのまま通り過ぎて狩股(音無町)を通り行く途中にも、手とか足を無くしたり身体は腫あがっている人達の屍があちこちに横倒れている。ほとんどが苦しそうな表情をして歯を食いしばったり目を見開いて腫れて膨み顔も身体も丸くなっている。腐りかけたのうじ虫が湧きうぢやうぢやと幾重にも重なりあつてうごめいている死体もある異臭の中を通過して、住吉トンネル前広場に鷹の巣(音無町)から鉄道線路を通過してヤットに着いた。

第一号トンネル工場の中にカンテラ(灯油を燃やして灯もすランプ)を置いて薄暗い中にも近くの人の顔は見える位で、怪我人、火傷者等遅く来た人は奥の方に、早く来た人乗り越えたり、踏付けたりして奥に入り順番を待つ。治療をしているのは明るいトンネルの入口で、応急的な仮治療がされていた。

後から来た人をよく見ると、頭皮が幅5cm位、長さ8cm位剥れて垂れ下がって頭蓋骨が白く少し赤味があった肉が付着して見えている人が、順番が進み明るい所に来た時見えて、私自身がそうになっているような気がしてズキズキと頭部がして来た。

その間にも前々から順番待ちしている前の方の人達、後に来た人達の怪我人、焼傷者の人の顔をしかめ苦痛に堪えているもの、堪えできない者は呻き声、唸る声、早く助けてと水を飲ませ、どこに行っても疼き苦しむ人達ばかりの中で、何時間位経った。やっと順番が来たかと思っても、ろくなクスリもなく、又々母の時と同様馬の油とか言うのを塗布してもらった。父は右足首から下の内側を火傷だったので当時の人の火傷から見ると軽傷の内だから、すぐにチヨイチヨイと油を塗ってもらいガーゼ等もなくそのまま治療も済んだ。

帰途につこうとしていると、私達の隣組の人に尋ねてトンネル工場に行っていることを聴いて来たとき母の実家村松村子々川郷田ノ浦(現子々川郷だけ時津町に編入)から使いの従兄(尾崎さん)が来て、私の母は叔父達が明けの日の十一日に実家の方に連れて帰る途中実家を右下に見える地点官道(県道、現国道二〇六号線子々川郷田ノ浦)の路上で息を引き取ったと連絡を受け、牛車まうしやをひいて来てくれたので、

少し義姉が出してくれていた。

寝具等乗せ父も牛車に乗せて、姉は良子を背負って子々川に行き、子々川の伯父瀧口盛太郎（母の長兄）の内に一時お世話になることになる。

翌日十二日に田ノ浦部落隣組（まぢ）の人の応援の元で葬儀を出してもらうも、当時は土葬でしたので墓地に行く途中も戦闘機グラマンが飛来してきて、皆恐れおののいて木陰に隠れたりしながら無事済ましてもらった。

父の足首の内側の火傷の薬も無く（注 今ならアロエの葉か滝舌蘭の葉の汁が火傷の熱冷しに良いの聞くが当時しかなかった）病院に行った人はある程度薬もあり手当を受けられた。尚、軍関係で尉官以上の知人でもいれば手厚い手当を受けた人もいるとのこと、病院に入れなかった人はほとんど早く死亡して逝く人が多かった。

火傷痕は爛れ「ハエ」がたかり卵を生み着け「ウジ虫」が湧き、それを取り除くと又次々と生み付け、それでも取り除くだけ父もさぞや「ズキンズキン」と激痛になやんだことでしょう。他の焼傷者負傷者達全員がその様になって、なげき苦しみもが腕もがき悲痛な思いして傷心な気持ちで、いたのである。

平和な今の日本では考えも付かないだろう。生きながらにして「ウジ虫」が湧くなんて、しかし戦争とはこうしたもの

である。戦争になると必ず物品、薬、生活用品は不足し、戦災孤児が出る悲惨な結果になるのである。

姉ハツエの夫、初雄は、三菱長崎造船所立神工場に勤務中、工場が昭和二十年七月末日頃と思う、二三日爆撃に合い使用（作業）不能になり、町工場（注 三菱の下請小工場）の駒場町（現県宮野球場）と市営サッカー場の境い附近に向向、作業中同所で行方不明で、五、六日後にハツエは良子を背負い、私と捜しさがに行つたが見付けえず、なにかも焼け燃えてしまつて機械とか工具類が赤錆び色に焼けた残骸と灰等死骸が灰いになつてしまつて、どれが誰かわからず見付け用もなかった。

また作業をしていた工場自体わからず、下大橋の所を通つて来ると橋の下川の東側に死骸をうず高くまるでさつま芋の腐つたのを捨てたようにしていた。その上側の道路の端しの倒れかかった塀に二人の大男が塀に倒れかかり両手両足を前に出し空をつかんだようにして（四ツ脚の動物を尻もちつかせたように）目は両眼ともペロンと飛び出てぶらさがり身体は二人共同じように腫れあがり風船人形をふくらませたように大男に見えた。もう異臭がしウジ虫が湧いていた。

それから一週間位してから、会社関係の人から印かんの燃えたのに小角の字がかすかにわかり前歯の入れ歯でわかり遣

骨を收拾して骨壺に入れて持つてきて下さったと。原爆でなにもかもなく宣子の骨と初雄さんの骨はお坊さんもなく墓地に穴を少し掘って葬むる。

瀧口家にお世話になってからまもなく瀧口家の子供、ジツ子、広子、徳美、私の姪良子、計四名下痢に苦しみ、病名不明のまま瀧口家の近所にあった内科医者もわからず、「もしかしたら、私達が持ち込んだ品物で熱焼した。南瓜が原因ではなかったろうか」と数年してから放射能の話しを色々聴いてからそのせいではないかと思つたがわからずじまい、その内自然におさまっていた。

お世話になって一週間位いしてから、小倉市足原熊本（現北九州市小倉南区若園町二丁目二一番二二号）に居住し、陸海、空どちらか不明の小倉工廠に勤務していた。長男の清太郎（三十九歳）兄さん（後胃ガンで六十歳で亡くなる）が道ノ尾駅止まりの汽車で来崎。道ノ尾駅から歩いて、西郷八二五番地の自分の実家である私共の家に行つたが家は灰になり、柱石だけぼつんぼつんと残っている、鍋釜の焼残骸だけを見、落胆し家の者達とは思ひ誰れか残っていないか、浦上方面は新型爆弾で全滅とは聴いては来たが誰れか一人でもと思つてもこれ程までやられては思ひなかつた。誰れかに聞かなければと、現錦二丁目四番五号に居住の永富時雄宅（家は

頑丈な骨組で建築家で瓦屋根で瓦は皆吹き飛んでも少し傾いた位いで柱は少し焼けていたが燃えなくて建在だった）に行つて、山川の状態を聴き尋ねたら村松村の子々川郷とかに行っているらしいと聞き幼少の時義母（私達は異母兄弟）に連れられて行つた記憶をたどつてやつとの思いで途中で子々川郷を聴きながら尋ねて来たと言つてきてくれる。大変苦労して来てくれたのだらう、私達を見て一応安心して又来た道に戻つて行つた。

その内台風も吹き荒れたりし、たまには田・畑の雑草取等手傳いながらあまり永くお世話にもなれず今まで殆ど毎日八km余の道のりを姉は良子を背負つて私と二人西郷の八二五番地の焼跡まで二時間片道歩いて早朝に子々川を出て日暮れ近くまで西郷の自家の焼跡の後片付け、畑仕事等していたが、自分達の仮住まい小屋作らなければと、九月末頃私一人朝、子々川を出て、西郷の自家の焼跡の方に行つてみると、日並郷の県道側（現国道二〇六号線）にある、松崎家（私の妻ユキエの伯母の家）に滑石郷の肥塚酒造場から避難して来ていた。

従姉の亀野ジノ（現義母）さんが庭先に出ていたのか、私を見て「米雄さんなどに行くとなア」と聴くので「浦上に（注当時西浦上、山里方面の者を浦上んもんと言われていた）」と言

うと「今アメリカの兵隊の人を殺して来よるげなバイ、あぶななケン行くな。早よ戻って子々川に帰ったがよかバイ」と言ってくれたが、半信半疑ながら其のまま下って行くと、時津の久留里郷の海岸側の県道（後国道、今海岸の埋立で裏道になつてゐる国道は埋立地を直線に通つてゐる。）を長崎方面から黄濃緑色のアメリカの進駐軍用自動車トラック幌を被せ、又ジープや赤十字のマークの付いた角型の自動車三台と何処に行くのかすれ違つて行つた。

子々川に夕方帰つて見ると「米雄お前さんな何んにもなかつたノマイ（ですか）」と言うので「なんで」と聴くと私が浦上に向つた後にアメリカの兵隊が来て男は殺傷したり、婦女子は暴行恥辱されるからと食糧等持つて山に隠れるようにと部落長（現自治会長）からの緊急の連絡があつて、特に女達は山の中に振え息を殺して潜んでいたそうです、後で「デマ」と言うことがわかり山から出たそうです。そう言えば今朝行違つた、あの自動車が来たのをそう思つたのでしょうか、常時日本軍部がアメリカ人は鬼畜のような人種で大好きな好色なやつらだから、婦女子を見るとすぐに暴行恥辱するやつらと宣傳をしていたので「デマ」が飛んだのでしよう。駐留地、長崎市内等では一部実際にあつたと聴も日本の軍隊も外国に進駐した時は同様の事態はあつたと戦争の悲しさです。

そのような事があつて一時は一部の女の人は男の服を着、男の戦闘帽子を冠り、又女の大事な髪の毛をそつて頭を丸坊主にしたたり、顔に薄すみを塗つてわざと汚したりした人もいたとのこと。

私は上が焼跡屋敷の下が畑になつていたので、その段差を利用して差が一米五十位いあつたので畑の方に一米位の高さに錢座町の桑原と云う人が自分の家を解家して疎開するために古材木を内の家の下の川岸に置いてあつたのを貰い受けて柱を埋建て上の屋敷の石垣に斜に置き骨組をして、西郷寮焼跡から、焼けトタン釘等拾つてきて屋根、壁変りに焼けたタンを焼け釘で打ち付けて透まだらけの小屋を作り、小屋の中の地面に疎開で家を解いた時、根太木付いたままの板張をそのまま据置、其の上に藁俵（稲ワラで編み米、甘薯等入れるもの）を広げて敷き、その上に敷布団もなく、配給で貰つた毛布二枚、布団一枚、姉、ハツエ、姪、良子、私、その内父も連れて来て一坪余の程度の所で四人寝起して暮らす。

又その内雪の降る冬となり、毛布の追加配給二枚ありはしたが四人ではたりない。二人で二枚冠り着ても眠れず、おまけに雪まで降り寒くて寝れぬ夜をすごし、朝起きて見ると毛布の上に透間から吹き込んだ雪が積もつてゐる。惨めなことだがどうしようもなく、よくも風邪をひかなかつたものだ、

外を見ると銀世界の雪、よくもひどく降り積もったものだ、戦争が生んだ、これが悲惨な状態であった。

又クスリも無く吾々庶民の手にははいらなかった。痛み止めもなく激痛にも堪え^{しんた}虐げられなければならない、父の足首より下の火傷もやっと治癒したが歩くのに不自由していた。

私と父は被爆して三ヶ月位いしてから突然右脇の下に湯呑茶碗大の「腫物」ができて化膿し十日余りしてから二人共同時頃破れ口があき血膿みが出て治る方向にむかっていった。今でも傷が残っている。後で思うことはあの時放射能性の毒が出たのではないかと思うのである。

そんな生活を六ヶ月位強いられる中にも、姉ハツエの指示で家を建てる準備の材木集めに又焼跡の後片付け等している時、小倉市在住の義兄清太郎さんが再度泊まり込みで応援に来崎してくれた。そうして家作りの準備に協力してくれる。大いに助かった。

跡片付け中、焼跡から使用可能品のステンレス製のマグカップ（注 一男正雄が軍隊に行つてジャワ島（マレシア）から病氣除隊。マラリア病になり、その時米国兵かオランダ兵の持ち物と思われるのを拾ったかどうしたか出所不明品を持ち帰った）が一個出てきた。現在家に保管してある、焼跡にタンス預の金が仕用不能で出る西郷寮の燃え残りの木切等又焼けたセメント瓦等

拾い集め又家の仙八谷の杉山（現錦三丁目六七九番地）から切り出した杉の木竹等叔父さん、子々川郷瀧口家の人、従兄の水口武一さん、尾崎国四郎さん達の協力応援で家建の準備終る。大変な仕事だった。

大工さんは瀧口駒市伯父さんの義弟で長与村（現長与町）の山道峰作さん（私家の建築後滑石町に団地が出来る前田の中に家を自家を建築された、現滑石町二丁目）、弟子一人（名前不明）に家を建ててもらう。八畳一間、三畳一間、土間と縁付き床ノ間、佛間、押入二ヶ所炊事場、戸棚又横に物置。小さな家ながら夜る寝ても雪の降り込み積らない家、荒壁ながら小手でなで塗りの中、二ヶ所に瀧口盛太郎（母の長兄）伯父さんの手の平と五本の指の型が残る温かみ愛情のこもった手型だった。その家で娘二人、輝美、誠子も誕生し、安心して、二十三年後の家を新築するまで住んでいた。今の家よりは隙間はあったが建換えるまで眠られる夜を過して来た。やはり貧乏^{びんぼう}しても平和がよい。

核兵器のない世界であつて

戦争・テロの無い平和を願つて

一九九八年六月、長崎市西町、（七十歳）

付記

私達 山川一家が昭和二十年（一九四五）八月九日被爆以後お世話になった方々、及び家建築に協力して下さった人、

長崎県西彼杵郡村松村子々川郷田ノ浦（現時津町子々川郷）母方の伯父瀧口盛太郎、叔父留五郎一家 伯父瀧口駒市一家 従兄 尾崎國四郎一家 従兄 水口武市一家 従兄 尾崎和市 各氏

大工 西彼杵郡長与村（現長与町）山道峰作（伯父駒市さんの義弟）と弟子一名

外滑石郷の肥塚酒造場（銘柄千代鶴ちよづる）に家族全員九名住込みで務めていた、亀野浦一・ジノさん（現義父母）

椎立（現清水町）の義叔父の山下万次郎さん

従兄の山下諫男さん

又当時の隣組の山下秀吉さん、永富時雄さん

平成九年（一九九九）一月～二月記

追記

義姉 チマ（行年二十五歳）

チマの墓地は、長崎県西彼杵郡琴海町西海郷、岩井本家の分家、岩井健次郎家の墓所にある。

前記の人達と共に忘れてはならない。

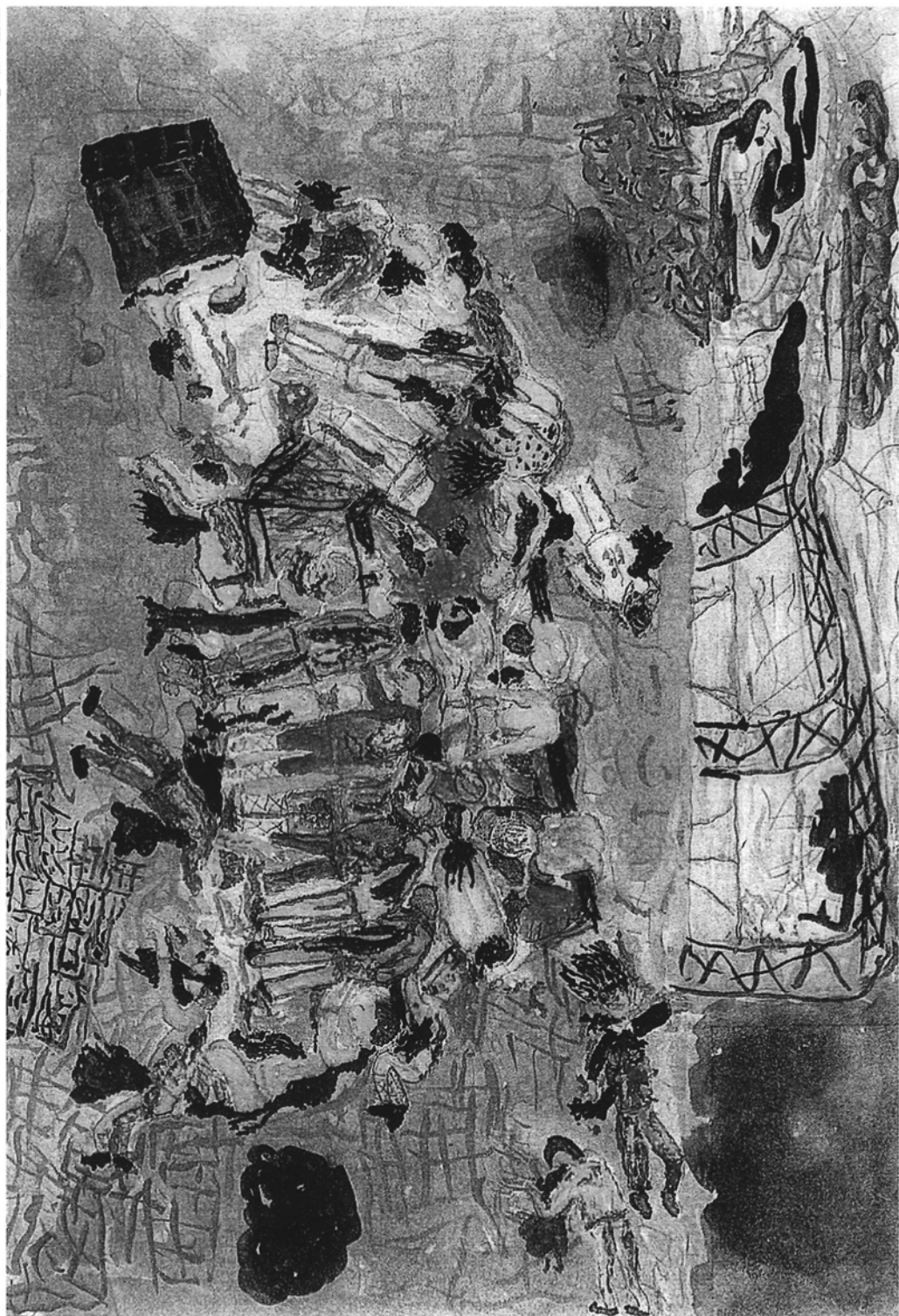
恩義ある恩人の人々である。

又瀧口留五郎叔父の近所の人にも同じである。



防火用水の水槽に首を突っ込んだままじくなって
いる人、水が飲めず水槽に手をかけたまま無念そうに息絶えた人、
たくさんの方が水を求めて群らがっていた。

——山川 米雄



原爆の絵「ナガサキの折り」：市民が描いたあの日のNAGASAKI 編者 NHK 長崎放送局より 2003年7月25日 41頁

三菱兵器工場の寮。(現白鳥町浦上拘置所)
夜勤者が帰寮して寝入ったところに原爆が投下された。
ほとんどの人が下敷きになり焼死した。



——山川 米雄

両手をぶらりと…
照円寺の下で

絵は、照円寺近くの路上（現・長崎市清水町）での一場面。山川さんは三菱長崎兵器製作所住吉トンネル工場で、魚雷用のねじ切りの最中に被爆。この後、大橋工場へ行き、負傷者の手当てや遺体の処理を手伝い、気になる自宅へ向かう途中「彼」に出会った。

「このバンド（バンド）外してくらさい（ください）。全身焼けただれた朝鮮人らしい男性が、両手をぶらりと前にして歩いて来た。体は膨れ上がり、腰にはベルトが食い込んでいた。

「周囲は負傷者でいっぱい。「頭が錯乱し、助ける余裕さえなかった」山川さんだが、彼には手を差し伸べ、ベルトを外してやった。すると「（ベルトは）いけない」と言い残して去っていったという。印象が強かっただけに「どうしているだろうか」と、山川さんは今でも時々そう考える。

（文と絵、「長崎新聞」に掲載）



死体運びも怖くなかった

当時十七歳。旋盤工だった。西郷（現在の西町）の自宅は両親と兄（二男）の嫁と私の四人暮らし。ジャワ島でマラリアを患い帰還した兄はその年の二月に、三男の兄も四月にビルマで戦死した。

その日はいつものようにトンネル内にある工場で、魚雷用のねじを旋盤で切る作業に従事。すると突然、停電になった。「休憩できる」。喜んで仲間たちと一緒に外に出ようとした瞬間、ものすごい爆風が襲った。外にいた人たちは吹き飛ばされ、天井に張り付けてあったトタンははがれトンネルを通っていた電線に引っ掛かった。どれくらいの時間が経過しただろうか。周囲がざわつき始めた。

「トンネルの前に爆弾が落ちた。中に入れ」と言われた。トンネルの奥に入ろうとしても暗くて入れない。その後「山の上に避難しろ」との命令に従った。見晴らしのいい山の上から見る住吉地区は火の海、空は真っ暗。「たくさんの焼夷弾が落ちたのだろう」。原爆のことなど知るよしもなかった。

しばらくして三菱兵器大橋工場にけが人の救助に向かうことになった。近くに多くのけが人がいたが手も差し伸べな

かった。ただ命令に従うだけだった。神経がまひしていたのかもしれない。

壊滅状態の大橋工場では工作部長がじかに指示を出した。「飛行機が飛んできてピカッとしたらこのざまだった。気を付けろ」。焼夷弾でないことがそこで初めて分かった。工場内は血の海。そこでの作業は救助というよりむしろ死体運びだった。でも怖くはなかった。

その後、家のことが気になり友人とともに自宅へ。こっちもやはりけが人や死体ばかり。必死にがれきを乗り越えたり着いたが、わらぶきの家は跡形もなく、煙が出ているだけ。目の不自由な父は自宅下の川の土手に、兄嫁と母は近くの山でいずれも大やけどを負い休んでいた。

翌日、母を病院に連れていこうと道の尾駅まで行ったが「病院は満員」と言われ、引き返さざるを得なかった。そうこうしているうちに母は薬もなく二日後に、自力で病院に向かった兄嫁は四日後に死んでしまった。

（爆心地から約一・八kmの三菱長崎兵器製作所住吉トンネル工場で被爆、長崎市在住）

私の願い／原爆で多くの家族や親類を亡くした。平和利用、自衛のためなどと核保有国は主張しているが、理由は何であ

ろうと核兵器は人類を自滅に導くだけのもの。「おれには関係ない」などと言っている若者たちは、目を覚ましてほしい。核兵器は地球上のみんなに関係する。

(「長崎新聞」より)



浦上の地獄を 歩いた私達

昭和五年に生まれた私です、日本はその頃から外国へ侵略の戦争を始めたのです。私が十五才の夏、長崎の原爆で長い戦争の時代が終るのです。少年時代に、早く大きくなって軍人になり、お国のため命を捧げることが、日本男子の本懐と教えられ育ちました。

昭和二十年三月、学校を卒業し少年兵を志しましたがすでに戦争末期、私は軍属になり、佐世保海軍軍需部横瀬基地に勤めました。アメリカ空軍の爆撃も経験しました、身近に爆弾も落ち九死に一生を得たことです。

八月九日、遠い長崎の上空に大きな黒い雲が見え、友だちと「長崎が爆撃されよることある、我が家は大丈夫やろうか」と話したことでした、程なく雲も消えましたので良かったと思ひましたが、この雲が、原子爆弾の雲だったこと、あとで知りました。八月十日の朝海軍下士官が来て初めて戦況を知りました。



熊

健

アメリカ空軍が物凄い新型の爆弾を投下、広島が全滅して十万人死んだ。昨日は長崎が新型爆弾一発で全滅十万人位死んだ。今日か明日にはここ佐世保にも落とされるかも、お前たちはここで死ぬ。すぐ逃げろ、帰れと言われ荷物をまとめて待機、夜になってから、船で基地を出て大村湾に入り亀岳の港まで行って降ろされたのです。

夜通し歩いて十一日の朝時津に着きました、長崎の方から歩いて来る人、怪我をしたり、火傷をした人、リヤカーに乗せられた歩けない人など浦上へ向う私達に「浦上は行かれんよ、行きなさんな行ったら死ぬよ」と言われましたが、私達は浦上を通らねば自分の家へ帰られませんでしたので、仕方なく浦上に足を踏み入れました、浦上は見渡すかぎりの焼野原、家が一軒もありません、山の草木もありません、あちこちでまだ家が燻って居りました。何千いや何万の焼死体が転がり、動く人影は肉親を捜す人でしょうか、本当に地獄の

短歌

原爆碑に中学生の子ら並ぶ逝きたる友らこの子らの時

【一瀬 理選評】原爆中心地の碑は沈黙して立つが、参拝者は思いが深い。作者の回想と現実が去来する。

(平成十九年九月二十二日「西日本新聞」歌壇)

友逝きし浦上の野かてふてふの翻り飛ぶ君のごとくに

【一瀬 理選評】被爆して当時の浦上の惨状を知る作者の回想。現在生き延びて蝶の姿に友を偲び哀れである。

(平成十九年十月二十七日「西日本新聞」歌壇)

逝く我を引き戻せしはだれの手か蘇り見る並びし医師たち

【一瀬 理選評】重い病気で手術した時の歌であろう。無事にすんで、目が覚めた時の思いと医師の状態が佳い。

(平成十九年九月八日「西日本新聞」歌壇)

長崎の空には白き雲流れ遺骨さへ無き友の一人よ

【一瀬 理選評】(「西日本新聞」歌壇)

B29銀にかがやき飛びゆきし遠き記憶の長崎の空

【一瀬 理選評】(「西日本新聞」歌壇)

中だと思いい足がすくみました。道がありません 電車の線路の枕木の上を歩きました。もやのような煙の中 息もつけないような死臭の中 駅の方を目当に友達とはげまし合うて急ぎました、長崎駅近くになって家が燃えてなく 山も木が青く茂って居り自分の村が無事であることが分り安心しました。長崎から西へ五里 高浜に帰りついたので夕方でした丸一日歩いたので、家に帰りついたら 祖父母父母がびっくりして「どこに居ったとかい、生きて帰ったかい 早よ風呂に入って飯をたべんね」と涙してよろこんでくれました 私はそれまで居場所も家に知らせて居りませんでしたので。

私の友達は何人も浦上の工場に学徒動員で居りましたので原爆で死にました 今だに遺骨さえ無い友もあります、生きのびて自分の家に帰りついた友が 四、五日で亡くなった人も居ます、看病してくれるお母さんに「お母さん僕は死ぬと死にとうなか ぼくは何にも悪かことしとらんとに」と言ったと聞きます。

私はそれから 六十余年 生きのびて 元気で暮して病院も無料で 月々手当も貰うて居ります、これは 爆死した人たちのお陰だと思つて居ます。これからも御恩を忘れずに生きてゆかねばと思ひます、(合掌)

友征きし海に生まれし白き雲秋夕焼に染まり美し

【一瀬 理選評】

〔西日本新聞〕歌壇

〈第二席〉

船並べ大漁旗立てし老人ら初日の浦に朝酒しをり

【清水房雄選評】

昔ながらの仕来りしきたに老漁師の新春。今年もまた

豊漁のようにと、祝賀と祈念と気負いのさま。初句・二句・結句と、一つ一つ具体的に言つて印象鮮明だが、歌としてのかなめは「老人ら」であろう。

〔平成十九年一月四日〕西日本新聞〔短歌〕

一里塚古びて立てり山道に清き流れのささやきを聞く

【二瀬 理選評】

山の古道に発見した一里塚の碑であろう。近く

清い水の流れを聞きつつ昔を偲ぶ作者の姿が浮かぶ。

〔西日本新聞〕歌壇

俳句

草紅葉去来の句碑は山道に

【森 澄雄選評】

熊氏の作。長崎街道が長崎（野母）半島基部を

横断する日見峠に去来のへ君が手もまじるなるべし花薄の唐印型の句碑芒塚があり、いま草紅葉している。

〔西日本新聞〕俳句

友征きし海より生れて夏の雲

【西山 常好選評】

かつて大戦の折、召集され親しい友は戦地に

征き、未だ帰らず。その友が渡つて行つた海より、「夏の雲（入道雲）」が湧き上がってくる。まるでその友が帰るがごとく。

〔西日本新聞〕俳句

〈入選第一位〉

初鶏やしづかに里の闇去れり

【中尾杏子選評】

平穏な村里の元朝。暁の薄闇の中に聞く鶏の声

にも心改まる幸せ。

〔西日本新聞〕俳句

〈第一席〉

夫婦岩注連新しき初日かな

【森 澄雄選評】

二見ヶ浦は五十鈴川の河口の名勝。伊勢参りの

人がここで身を清めたという。白浜青松の遠浅の海岸、沖に大注連縄が掛けられた夫婦岩が並び、岩の間の正面から昇る初日が有名。新しい注連が張られ、初日が昇る。

〔西日本新聞〕俳句

真夏の悪夢 —木の十字架

爆心地から四百米附近

爆心地から僅か四百米しか離れていない本尾町二番地ノ三（浦上教会の下）が自宅でした。裏隣りが川口さん宅（教え方）、近所に八幡町教会の深堀政美主任神父様の本家である提灯屋で、風造や煙草、切手、乾物などが販売され、又筋向いに田川商店（現在もある）では稽古（教会学校）帰りにカレント（芋の油揚げ）とかハジキマメ、ツネコンプをお小遣いとして一円貰って稽古に行くのが子供の頃（戦前）の楽しみの一つであった。下崎商店には十字架、ロザリオ、ろうそく立て、御絵等が販売され、その前向いでは浦島桶屋があつて葬式の前日には忙しそうに棺桶を造っていた光景が今でも目に浮ぶ。周囲はどこどころ田畑に囲まれた長閑な感じ（のどか）で、風揚げ（ハタあげ）に舞中になり、ハタ合戦が繰りひろげられたものだ。戦前では異色の浦上教会の吹奏楽団が有名で、お祝い日は勿論葬式ときは、ベーターベンの葬送進行曲が



平山兼則

荘厳なミサの中で奏でられた。又、野球は長崎大学のグラウンドで、教会壮年部主催で地区対抗の試合が盛大に行われていたのを覚えている。

その様な平和な雰囲気ローマ法王が申された戦争という悪魔が訪れることになり、八月九日の忌まわしい原爆が落ちたのである。

（注）カトリックの戦前の話し言葉

- 一、教え方……カトリック教の考え方、要理を教える先生
- 一、稽古……カトリック教の勉強会（現在教会学校）
- 一、ロザリオ……仏教の数珠の様なもの

八月一日前後

六月、七月になると、間断なく空襲警報が発令されるようになったので、警報が鳴ると、またか！と思いつながら家のなかの押入れに入るのだった。しかし、押入れに入っても、こんなことはただの気休めで、木造の家では爆弾が落ちたらと

ても命はないだろうと思っていた。そう思いながら、遠く離れた防空壕に行くのもおっくうで、母と二人、やつぱり押入れのなかに身をひそめるのであった。

そのころは、空襲警報が発令されてしばらくすると、B29と呼ばれるアメリカの爆撃機がジュラルミンの翼と胴体をキラキラと銀色に輝かせながら、長崎の上空を素通りして飛んでいった。岩屋山方面から大村湾上空を川棚のほうへ向けて行き、しばらくすると、どどーん、どどーんと爆撃の音が聞こえた。

その不気味な音を聞きながら、

「浦上はカトリックの多かけん、爆弾は落とさんとはい」とか、

「いや、浦上教会がよか目標やけん、きつとやられるばい」といった話が、ひそひそとまことしやかにささやかれ、みな空襲におびえて戦々恐々といった状態であった。また一方で、長崎だけは大丈夫じゃなからうかといった希望的観測もささやかれたりした。しかし、八月一日の空襲はそうではなかった。腹底に、ズシン、ズシンと爆弾の音がつきつぎに響いて、今にもやられるのではないかと、夢中でふとんを頭からかぶった。今までの空襲のなかではじめて恐怖の念を覚え、一生懸命にマリア様の祈りを唱えた。

ひとしきり爆撃が続いたあと、最後は低空飛行の爆音がし、機銃掃射のバリバリという音と同時に、ヒュンヒュンと弾丸のとんでくる音が聞こえる。相当近いところをやっているらしいと、なおいつそう押入れのなかで息をひそめた。この日は、大学病院の煙突の付近に二発、宿の坂（現・平野町）偶然にも現在の住所の前、岩川町付近にもそれぞれ爆弾が投下されたと聞いた。

八月九日の悪夢

八月九日午前七時ごろ、いつもは母に言葉をかけてから出勤するのに、その日に限ってだまって家を出て、七時半前に勤務先の三菱造船稲佐製材所（現在の稲佐山ロープウェイ発着所前）に着いた。間断なく空襲警報が発令されるのが日常茶飯事になっていたので、そのころは、毎日防空壕を掘るのが仕事であった。さっそく、渕神社下の現場で作業をはじめた（爆心から南西へ一・五kmのところである）。まもなく空襲警報が発令されたので、稲佐山中腹の横穴式防空壕に避難した。行ってみると、壕のなかは老人・子ども・婦人いっぱいだったので、入口付近で待機していたが、どうやら敵機来襲はないらしい。

しばらくすると空襲警報は解除されて警戒警報になった。

それで山を下りて露天掘りの防空壕を掘りはじめた。夏空は照り輝き、蟬の音のすだくなかを、すき腹をかかえながら作業を続けていると、飛行機の爆音らしい音がかすかに聞こえてきた。それで、いっしょに作業をしていた中年の人が仕事をやめて外に出た。爆音は次第に大きくなり、敵機らしいと予感したが、すでに穴も背丈以上に掘っていたし、周囲は大木が生い繁っていたので、かまわず掘りつづけた。外に出ていったさきほどの中年の人の声が聞こえた。

「敵機かもしれない。白い落下傘のようなものが落ちてきよるけん、新型爆弾かも……」

と言うと同時に、マグネシウムを一度に大量にたいたような閃光があたりを包み、そのあと瞬時に、土砂とほこりであったりは暗くなり、体にも砂粒がざあーとかかかってきて、生き埋めになるのではないかと思った。同時に、眼鏡が吹きとび、体も穴のなかにたたきつけられ、体じゅうが砂とほこりにまみれてしまった。口のなかはざらざらし、気管のなかまで砂粒が入ったような感じで息がつまり、ああこれで死ぬのかと観念の臉を閉じた。

しばらくすると、目の前が明るくなってきた。助かったなあー、という気持になって起きあがると、あれほど生い繁っていた大木が、そしてでんと坐っていた墓の石塔がすべて横

なぐりにされて倒れている無惨な姿が目に入った。私は無我夢中で穴からはい出して横穴式防空壕へ逃げこんだ。その間、恐怖から逃れようとするまったく本能的な行動で、途中、人が倒れていたのを覚えていてる程度で、あとは全然なにも目に入らなかった。

まもなく、眼鏡がなかったらなにも見えないことに気づき、元の露天掘りの穴のほうへ下っていかうとすると、浦上川から向こうはすべて火の海で、もうもうたる黒煙が湧きあがっている。川の手前側、竹の久保は、家が全部倒壊してしまっている。近くで「助けてくれえ」と悲痛な叫び声があがった。とにかく、眼鏡がないと助けることもできない。もといた穴のなかを手探りしながら必死で探した甲斐があつて、無事に見つかった。幸いに壊れてもいなかった。

川ぞいの道までおりてくると、いったいどうしたことだ、頭、顔、そして上半身が焼けただれた人、顔の形が全然わからないほどに変形した人、足をけがして、血を流しながら引きずっている人など、この世の地獄が今、目の前に出現したような形相の人たちが、ぞろぞろと浦上川ぞいに歩いてくる。

自分の家族の安否も気になるが、「助けてくれえ」という声が耳に残ってそのまま立ち去ることができず、そこらにいた五、六人で瓦を取りのぞき、倒壊した家屋の木材を動かそ

うとするが、素人ではなかなか動かすことができない。仕事が遅々としてはかどらない。それでもようやくやく四、五人助けたころには、もう夕方近くなり、わが家のことも心配になる。そのころには、製材工場まで火の手がのび、堆積された木材の山が、猛烈な勢いで燃えさかっていた。私はそのまま帰途についた。

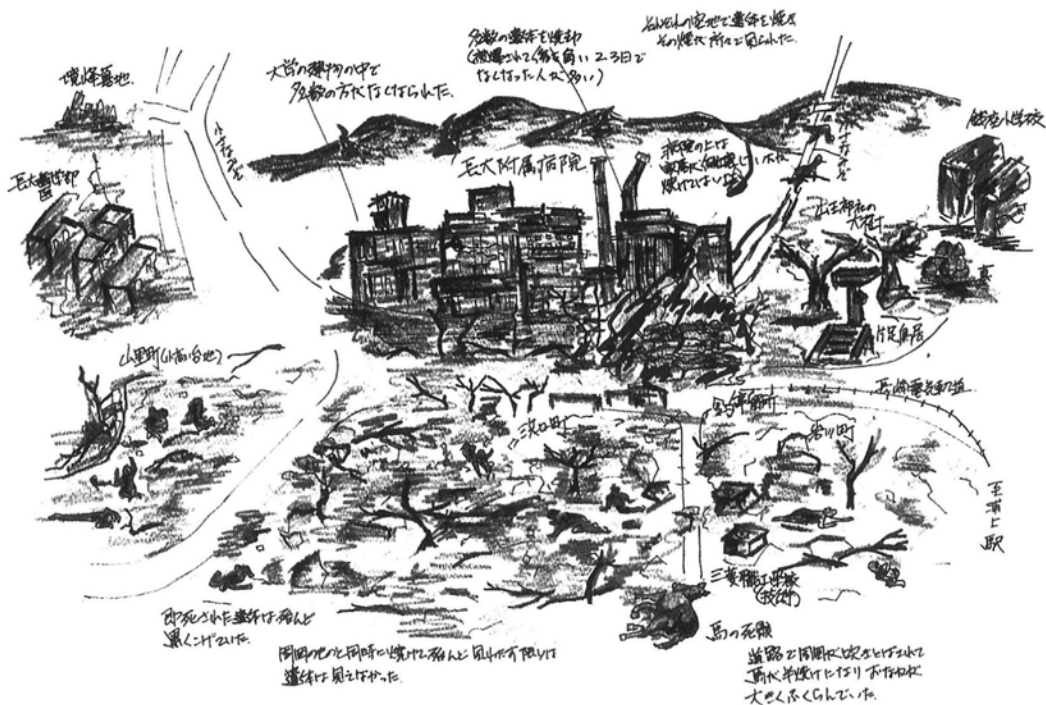
家という家が、ぼうぼうともものすごい音をたてて燃えさかり、真っ赤な炎が天にのぼっている。道路もわからない。浦上川だけが道しるべである。私は川のなかへおりて上流へすすみ、途中で川を横切つて下の川に入り、そこで川からはいあがった。たくさんの人たちが、まるで呆けたように無表情でぞろぞろと鉄道線路の上を、道の尾方面をめざして歩いていく。

私は、松山町の電停のところで鉄道線路からはずれて、浦上教会へ通じる道を行こうとした。しかし、前方は炎の海である。とても通れそうにないとためらっていると、警防団員らしい人が「そっちへ行くと死んでしまうぞ」とどなった。私はあきらめて、再び鉄道線路を通って大橋の鉄橋を渡った。もう日はとつぷり暮れて、夕闇が足もとを包んでいる。まだ燃えている家の炎が、あちらにもこちらにもたちのぼっている。

鉄橋を渡るとき、そばを歩いている人に声をかけられた。その方は、鎮西学院中学の片岡先生だと言われた。鉄筋校舎の陰にいたおかげで助かったそうだ。「あたりが暗くて前へ進むのは危険だ、ここで野宿しよう」と先生に言われて、西町付近の畑の崖の下に腰をおろした。先生は、「昼食も食べていない、ごはんを炊こう」と言つて、背のうから飯盒を取り出し、近くにあった井戸水で米を洗った。洗い終わると、こんどは、その飯盒を燃えている材木のそばにもつていってご飯を炊いた。私もごちそうになった。しかし、口のなかは砂やほこりでざらざらである。ごはんを口に入れると、じゃりじゃりと砂の音がする。文字通り砂を噛む思いの食事で、まったく食事がすすまなかつた。

食事をすまして横になると、今日一日のショックの連続で頭がかんかんに冴えていて寝つかれない。それでも昼間の疲れから、うとうととまどろんだと思つたら、夜半に爆音がしてとび起きた。照明弾らしい閃光が、三菱兵器製作所（現在の長崎大学）の上空で、ぱつと光った。また新型爆弾か！と思わず身を伏せた。二、三回、真昼のような光があたりを照らした。もうここで死ぬのだと思つた。

しかし、それでおしまいであった。あとは何事も起こらない。私は再びまどろんでいた。



まどろむうちに夜が白々と明けてきて、あたりが判別できるようにになってきた。付近を見まわすと、まだ家々はくずぶりつづけている。ふと見ると、前方の燃えつきた家のなかに、真つ黒に焼けこげて一塊の骨だけになった遺体がいくつも横たわっている。横を見ると、昨日、片岡先生が米を洗った井戸水にも死体がうかんでいた。

八月十日、熱い瓦礫

少し離れたところにある三菱兵器製作所、山里小学校、そして右手のほうの城山小学校など大きな建物はまだ火がおさまらないで燃えていた。立ったまま燃えている建築物以外の木造の家は、もうみんな燃えつきてしまつて一面の焼け野原である。目をさえぎるものはない。一面の焼土を眺めながら、母も兄もだめかなあと考えたら、はじめて涙が出た。涙が出はじめると、あとからあとから流れ出てとまらない。そのとき私は、はじめて人間らしさを取りもどしたようであった。

そこで片岡先生と別れて自宅をめざした。足元の瓦礫はまだ熱い。熱い土を踏みながら浦上天主堂の近くまできた。私たちが毎日曜、祈りを捧げた天主堂が無残にも打ち砕かれて、れんがの壁がやつと残っているだけである。それを見たとき、

私は体じゅうの力が抜けていくような気がした。しかし、ここでくじけてはだめだ、と自分をはげまし、がんばらなければ、がんばらなければ、と自分に言いきかせながら、わが家へむかった。

わが家とおぼしきところまで来たが、どこが自分の家だったかわからない。隣に住んでいた母の伯母の家も、もちろん跡形もない。私は途方にくれて、しばらく焼け跡にぼんやりと腰をおろしていた。それから、叔父が住んでいた浦上天主堂の裏手の城の平にむかって歩き出した。教会のそばを通ると、あの東洋一を誇った煉瓦造りの建物は、ただ、煉瓦の山にしかすぎなかった。そして、非常用の米がたくわえられていたのであろうと思われる倉庫の米俵が、むき出しになって、材木といっしょに燃えている。もったいないという気持は全然起こらず、ただ呆然と通りすぎた。

途中で知人と出会った。お互いに無事を喜びあつて、元氣でがんばろうと言いいい、いろいろたずねてみると、彼は私の兄を高尾町付近で見かけたと言う。一縷の望みが開けたような気がして、一刻も早く肉親に会いたいと思ひ、足も早くなつて叔父の家にたどりついた。

「叔父の家は大丈夫、被害も少ないだろう」と思ひながらきたのだったが、ここも完全に破壊され、燃えつきていた。

そして、ただひとり、私のいとこがそばの畑のなかで、うんと苦しそうになつていた。しかし、私にはどうする術もない。

「しつかりがんばれば助かるぞ。もうしばらくの辛抱ぞ」

と、慰めるだけである。慰めながら、彼にいろいろ聞いてみると、爆弾が落ちる直前まで自分の家のなかにいたが、異様な爆音がするので、家からとび出して、一目散に医大グラウンドまで走ってきたとき、パツときたそうだ。あとは全然、記憶にないと言う。彼と最初会ったときには、足先から太もものあたりまで青黒い色だったのが、だんだんと上半身までひろがつていくのが目に見えてわかる。

「自分はこんなことで死にたくない、助けてくれ」

彼はなんどもその言葉をくり返した。しかし私には、なす術もない。

「がんばつて、神様にお祈りしろ」と言うだけで、残念でならなかった。

「もうダメかなあ」と思ひ、できたら末期の水を飲ませてやりたいと思つたので、水を汲みにいって急いで帰つてみると、彼はもうすでにこと切れていた。結局、最後は胸のあたりまで毒素がまわつたように青黒く変色していた。早く水を飲ませてやればよかつた、と悔やまれてならなかった。

その間にも、兄のことが心配で、早く兄を探さなければ、と思うのだが、あたりで苦しんでいる人を見ると、そのままにしておれない。動くことができずに、あえいでいる人の口もとに、水を汲んできては飲ませてやった。

高尾川の川辺におりると、そこにも、多くの人が水を求めてやってきていた。すでに息の絶えている人。水を目の前にしながら、動くことができないで、「水をくれ！水、水」とうつろな眼で訴える人もいる。着ていた服がみな焼けおちて全身やけどの少女がいる。ただ、「みず、みず」というのが精一杯の様子である。近くの湧き水を手ですくって飲ませてやる。自分が丸裸ということもわからないのであろう、羞恥の念もまったくない様子である。私は突然、はげしいいきどおりを覚えた。あまりにも残酷な情景に、このかたきはぜひともとってやるぞと高ぶった気持になった。

その場を離れて、あちこち探しまわっているうちに、ようやく兄と出合った。兄の頭の右側は頭蓋骨が砕かれて脳の中身が露出していた。また左顔面も焼けただれて、容貌を判別することもできなかった。右側面から見ると、ようやく兄らしい様子がうかがえた。もうすでに、精神状態ももうろうとなつて、うわごとのように、「もうすぐ救護班がくるから大丈夫だ」とか「日本は最後には勝つんだから」と言っている。

「水を、水を！」となんども訴えるが、水をやるとつぎつぎに死んでいくのを見たので、「水を飲むと死んでしまうから、がまんしろ」と言っているうちに兄嫁がやってきた。

「フランシスコ診療所の下に仮救護所ができています」と彼女が言うので、二人ですぐにそこまで運んだ。兄はだんだんと弱ってきて、「みず、みず」と最後の力をふりしぼって叫ぶ様子を見ると、もうとてもたまらなくなり、傷口にヨードチンキをぬってもらったあと水を与えた。兄は一口それを飲むと安心したのか、兄嫁の腕に抱かれながら最後の息を引きとった。

母の行方もまったく手がかりがなく不明である。まったくひとりぼっちになり、これからどうなるのか、と不安に襲われる。兄嫁の実家がある大病院横の坂本町へ行ってみたが、ここらあたりも、家は跡形もなく吹きとんでしまっている。横の小川は、破壊された家の材木や瓦で埋まってしまっている。焼けた木々が、まるでこの世の終りの世界に立っている木であるかのように、ひよろひよろとのびている。夕闇が迫り、夜空に星がまたたきはじめる。その空の下で、人びとのうめき声があちこちに聞こえる。

「天にましますわれらの父よ……」と祈る声を聞きながら、露天にそのまま横たわり、死人のように寝てしまった。

後程調べて見ると、祈りの人が妻の父であった。

八月十一日、遺体を焼く

今日こそは叔父が戻ってきているかもしれないと思って、浦上天主堂の裏手の家へ行ってみた。幸いにして叔父は傷も負わないで戻っていた。しかし、家族が全部死んでしまっていたので放心状態で坐り込んでいた。焼け野原のなかで、大きな建物はまだくすぶりつづけている。浦上天主堂、山里小学校、大学病院、三菱兵器製作所、そして三菱製鋼所などの建物が、消火の手段もなく、完全に燃えつきるまで燃えるにまかせていた。

「これからどうしたらよいものか？」

「俺の遠戚にあたる深堀の家まで行こう」

「よし、行こう」

と声をかけて立ちあがり、二人で行ってみると、ここももちろん全滅状態で、深堀のお母さんは防空壕のなかで息を引きとる寸前であった。もうほとんど意識がなかった。他の生き残った人びとは、材木を集めて焼死した人びとを焼いていた。私たちも手伝ったが、まるでなにかの物体を焼いている感じで、無感情になり、かわいそうだとか、ひどいとかいう感情はなにも起こらなかつた。まったく人間性を失った異常

な心境になってしまっていた。しかし、遺体を運ぶときに、その冷たい膠着した手を握ると、心のなかまで冷たくなるような、なんとも言えない気持になった。

このあたりには、家の周囲に畑や田んぼがあったので、家が吹きとび、品物が田畑に散乱して、それが燃えないで残っていた。私たちは、それらの品物を集めて防空壕の入口まで運んだ。防空壕のなかは重傷者でいっぱいだったので、われわれ元気なものは戸外に畳を敷いて休んだ。

深堀さんは肉屋だったので、死にかかっている牛を始末して、近くの人たちにも分けてくれたので、畑からジャガイモやカボチャを取ってきて、肉といっしょに煮こんで食べた。それは、いく日ぶりかで、おいしいなあという思いで、生きかえったように元気が出た。

夜は、防空壕は負傷者でいっぱいなので、元気なものは、露天にかやを張って寝た。被爆後二日目の夜であった。空には星がいっぱい輝いていたが、美しいなどという気持で空を眺める余裕はなかつた。

八月十二日、六歳の子どもの死

深堀さんの、六歳になる弟さんが山里小学校に運び込まれているという話を聞いたので、行ってみると、全身傷だらけ

で血まみれであった。また、食事をとっていなかったせいか、すっかりやせ細り、目だけがぎらぎら光って、なんとも言えない異様な感じがした。あんなに無邪気で無心な子どもを、大人の戦争の犠牲にするとはなんとひどいことだと、だんだん感情が高ぶって腹が立ってきた。私はそれまで、どんなひどい様子を見ても、ちっとも人間らしい感情がわかなかったのだ。まったく心が動いていなかった。すっかり神経がマヒしてしまっていた。夢のなかの出来事を見ているような感覚であった。

私は今、正気に返っている。ほんとの被爆の姿を知ったら、誰でも原爆を使うことは絶対にできないはずだと思う。正義のために原爆を使用するということは絶対に成り立たない論理なのである。そのためにも、私たち日本人は、みながヒロシマ・ナガサキを知って世界の人たちに訴える必要があると思う。

木の十字架

原爆が落ちた時、木造の家は土台から吹き飛ばされ母も何方不明、勿論家財、道具もどこかで一緒に燃え尽きて仕舞ったのが、家屋敷は地肌がそのまま母の遺品も探していると、丁度基礎石のかけに何時も母が祭壇に置いて、ロザリオを唱

えていた木の十字架が不思議に熱風にも遭わないで、そのままの姿で発見した。母の身代りのように感じて現在も我が家の祭壇に安置している。

原爆被爆五十八年間或は未来に生き続ける子孫の為に、ローマ法王ポウロ二世が申された「戦争は人間の仕業です悪魔の仕業です」と被爆の地日本より世界に向けて発信されました。被爆したこの十字架が未来を見つめ見守ってくれると確信し、大切にすると共に、この木の十字架の身代りとなった母や兄や又多くの原爆犠牲者の方々に祈りを捧げ平和の尊さを体験した。残された者としての責務を果す力を与えて下さる様に毎日の生活を祈りとして頑張って行きたいものである。

ライオン誌を借りて私の拙い原爆体験記を載せて頂き、感謝申し上げますと共に、原爆の恐ろしさが伝われば幸甚に思います。

(爆心から南西一・五km竹の久保町で被爆、当時十八歳)

(注) 平山兼則様は、残念乍ら平成二十年二月三日帰らぬ人となりました。



私の被爆体験記

大隈直之

被爆五十周年を迎える節目の年に当たって、ここに被爆体験をしたためて、原爆の恐ろしさや悲惨で残酷さを、より一層認識を深めて頂きたいと希求したい一心から、その内容を抜れきするものである。

先ず、私は、当時十九歳の向学心に燃えている青年であった。昭和二十年四月に、長崎医科大学附属薬学専門部（現在の長崎大学薬学部）に入学できて、長崎市浜口町に下宿して通学を始めたのである。しかし、当時は、大東亜戦争の真最中で、日本にとって戦況は極めて悪化の一途を辿りつつある状況にあった。こんなきびしい環境のなかでは、勉学も思うに任せず、従って、講義ですら満足な状態ではなかった。そのうえ、私達学生は、「動員学徒」の名目のもとに、長崎市内にある軍需産業関連工場へ出向を命ぜられ、私も同窓の学生仲間と共に、三菱電機長崎製作所の工場の仕事に従事することとなったのである。そのうちに、戦争は益々激しさを増

し、米軍による空襲は毎日のように行われ、米軍の日本本土上陸もささやかれる戦況になってきたのである。従って、私達学生も夏休み返上という緊急措置により、工場の仕事を続けさせられたわけである。折しも、私達の工場に隣接していた三菱長崎造船所の工場に、八月一日米軍機による爆弾が投下され、若干の死傷者を出す被害をうけたため、更に警戒を強めていた矢先に、八月九日を迎えたのである。当日の朝は、よく晴れており、今日も真夏の太陽がガラガラと照って、暑い夏の日を思わせる天候であった。予定通り、午前八時三十分から仕事を始め、午前十時五十分には休けい時間となった。その際、新しい作業服の支給をうけたが、その折、「広島に新型爆弾が落ちて大きな被害をうけたそうだ。」との話を聞いて休けいが終わった。そして、午前十一時再び工場の仕事を始めたと思つた途端、突然紫白色と思われるような閃光が、目の前を通り抜けるように走り去つたかと思うと、「ドカン」、

「バリ、バリ。」という感じの音がして、工場の窓ガラスは、粉々に破れ、工場の屋根は、潰れてへこんだ状態に変わり、同時に負傷した人々の悲鳴や苦痛の音が、あちらこちらから響き渡ってきた。工場のなかの窓ガラスの近くで作業していた作業長は、破れたガラスの破片で顔全体が血だらけの状態であり、その隣で作業していた私は、傍に立てかけられていた十数本の鉄棒が倒れてきて、私の背中を直撃し、激しい痛みを感じて倒れた。しかし、これは大変な被害をうけたに相違ないと直感し、無我夢中で立ち上がり、直ちに工場の外に出てみると、数人の人達が倒れており、そのうちの二人は、私達の工場の窓ガラスの鉄製の枠が倒れてその下敷となつて押し倒され、助けを求めていたため、附近にいた人達と協同して、その枠を取り除き、無事防空壕の中に収容して助けることができた。なお、当日私達の工場には、同級生が十数名いると聞いていたが、その後、防空壕に避難してみると、鹿児島県出身の山口広志君しか見当らなかつた。やがて、少し落ち着いたので防空壕の中で昼食を食べていると、工場の係の人が「元気な人は、負傷者の収容に手伝ってほしい。」との救護依頼があり、午後三時頃まで負傷者を防空壕まで搬送収容する作業を手伝った。負傷者の状態は、爆風によるガラスの破片で血だらけになつた人、鉄骨かなんかで足や腕を骨

折した人、皮膚が焼けただれて赤色のような肌になっている人など、様々であつた。やっと作業が一段落した時点で、工場から離れて帰つてもよいとの許可がでたので、私と山口君の二人は、工場の外へ出ることができた。免も角、二人は、長崎市街を離れるのが先決であると判断し、一路浦上から道尾方面へと歩き始めたのである。さて、歩き始めると、住宅街は火災が頻発している状況で、階段の多い路地を飛んでくると火の粉をふり払いながら、行きかい、すれちがう軍人や市民の人達と言葉をかけ合いつつ、取り敢えず、稲佐川まで辿り着き、川の水を浴びながら一時的にでも暑さを凌ぐことができた。やっと一息ついて川から岸の上にはいあがり、再び歩き始めると、当時の私達動員学徒の仲間でもあつた女子挺身隊員と思われる女子学生が、私達二人に向つて「ヤケドのクスリがほしい。」「水や食物は持つてないか。」といつて、哀願するように話しかけてきたので、私達が工場を離れるときに持参してきた缶詰二個を渡して「頑張りなさい。」と、なぐさめ、はげました。そのときの女子学生は、服装はボロボロに破れて、あらわになつた肌は火傷したように腫れ上り、全く生地獄をさまよう人間の悲惨で残酷な光景であつて、本当に筆舌に尽くし難い、想像を絶する現実であつた。何れにしろ、彼女達を何とか楽にしてあげたい気持で一杯であつた

が、どんな手段を施すべきか思案するばかりであった。「しつかり頑張つて、早く安全な場所へ避難しなさい。」という言葉葉を繰返し叫びながら、つらい思いで彼女達と別れた私達は、燃え続ける長崎製鋼所の川沿いの狭い裏道路を突っ走って、あちこちで死体が転がっているのを目前で確めながら、現在の大橋球場のグラウンドを横切り、国鉄長崎本線の線路上にはい上がることができた。そして、ためらうことなく、ところどころくすぶり続ける線路の枕木を避けながら、ひたすら、道尾方面に向かつて歩き続けた。まわりを見渡すと、民家のほとんどが押し潰されて火災が発生しており、全く壊滅状態の有様であった。そのとき、私は、途中で私の出身母校である福岡県立中学伝習館（現在の福岡県立伝習館高等学校）の先輩の坂口君と偶然出会った。彼は、顔全体が血だらけになっていたが、身体を動かして歩ける程元気であつて、彼から「今すぐ帰れないが、元気であることを福岡県柳川市の実家へ連絡してほしい。」旨の伝言を依頼され、お互いにはげまし合ひながら、「必ず約束を守る。」と返事して彼と別れた。全くの奇遇であつた。やつと、道尾駅に着いてホッと一息ついた。時計を見ると、すでに午後七時を過ぎていた。いくらか落ち着いて気がついてみると、二人共着衣は、ポロポロに破れ、まるで浮浪者の服装のような状態になっていた。やがて、私

達は、道尾駅前の駐在所に立ち寄ると、その巡査さんから道尾国民学校で炊き出しが行われていることを聞き、漸く夕闇も迫り、長崎市街の空が赤く染め上った風景を眺めつつ、早速道尾国民学校へ向い、握り飯の支給をうけて一夜を過ごすことができた。そして、翌朝再び道尾駅に戻った。駅に着いてみると、駅を通過する列車には、皮膚の赤く焼けただれた人、頭髮が引きちぎられたような人、顔や手足から出血して苦痛を訴えている人など、多くの負傷者を満載して諫早方面に走り去つてゆく有様で、とても私達は、乗れそうな状態ではなかつた。しかし、駅員に促がされて、三本目か四本目（記憶不詳）かの列車がきたとき、最後尾の貨物車輛に飛び乗ることができ、無事諫早駅に着いた。早速、駅員に列車の運行状況をたずねると、大村線の列車は、負傷者の輸送で一杯で乗れないとの話を聞き、鳥栖行きの列車に乗って肥前山口駅に着くことができた。ここで、私達二人は、それぞれの故郷へ帰るべく、山口広志君は鹿児島県出水市へ、私は佐賀県武雄市へ向かうため、お互いに再会を約して別れた。それから一人になった私は、佐世保線の列車が動かなかったため、肥前山口駅から歩き続け、翌日（八月十一日）午前二時頃、やつと武雄市の実家へ帰りつくことができたのである。

以上の被爆体験記を通じて、是非皆様方に理解と認識をし

て頂きたいことがある。それは、私の記憶が如何に強烈な印象として、私の脳裏に刻まれているかということである。

「忘却とは、忘れ去ることなり。」という言葉があるが、あの目を覆うばかりの悲惨さ、残酷さ、非情さを、私は目ではつきりと確めた体験から、原爆による恐るべき破壊力とその殺傷力を思い起こすとき、その言葉は全く通用しないのは、自明の理である。これは、まさに人類にとって絶対使用してはならない兵器であることを、肝に銘じて痛感させられた次第である。私達は、今後、絶対忘却できない体験から得られた現実を直視し、核兵器廃絶のため、私達人間同士がえい智を絞って、その使用を許してはいけない努力をしなければならぬ。平和を愛し、その尊さや大切さが必要であればある程、その希求する願いは、人間共通の気持ちであり、そのためには、人間を破壊させる核兵器こそは、必ず絶対に廃絶させなければならぬ、と重ねて空に向かって大声で叫びたい。最後に、私の五項目の信条を披れきして、固い決意を表明する次第である。

信条

- 一、忘れることなかれ。
- 一、許すことなかれ。
- 一、おごることなかれ。

- 一、使うことなかれ。
- 一、行うことなかれ。

以上

追記

私は、被爆後、やっとの思いで武雄市の実家へ帰りつくことができたが、其の後の体調は思わしくなく、約二週間位下痢症状を訴え、主に母の作ってくれた重湯を食べて治療に専念した結果、八月末頃には、畑仕事に従事できる状態にまで体調は回復した。そのうちに、昭和二十年十月、長崎医科大学より授業再開の通知があり、佐賀市多布施町の假校舎で復学できたわけである。假校舎では、山口広志君と再会を喜びあい、本当に感無量の気持ちで一杯であった。それから、長崎県諫早市小野島町の假校舎に移り、昭和二十三年三月無事卒することができた。しかし、これまでに被爆した学友は、次々と倒れ、入学当時の四十名は半分以下となり、大学では再募集する有様であった。さて、社会人となってからは、中学校教諭をふり出しに、佐世保市保健所勤務をへて、現在も民間病院において、薬剤師としての職務を遂行している。しかし、その間被爆者という立場を考え、いつも潜在的意識として、健康には不安と危惧の念をもっていたことは事実であり、私

広島の話聞いた直後に

十九歳だった。この年の四月に長崎医科大学付属薬学専門部（現長崎大学薬学部）に入学、浜口町で下宿生活を始めた。だが、戦況の悪化で講義は満足に行われない。間もなく三菱電機長崎製作所で働くようになった。

九日は午前八時半から工場に出た。十時五十分からの休憩の時「広島に新型爆弾が落ちて大きな被害が出たらしい」と聞いた。十一時に仕事を再開した途端、突然、紫白色の強い光が目の前を走り「ドカン」「バリバリ」と激しい音がした。窓ガラスが粉々に壊れ、屋根がつぶれた。負傷した人の悲鳴やうめき声が、そこから響いてきた。窓際にいた作業長は、ガラスの破片で顔中が血だらけになっていた。後ろから倒れてきた鉄の棒の下敷きになったが、「大変な被害に違いない」と直感し、痛みをこらえて外に出た。

屋外にもたくさんの方が倒れていた。十数人いるはずの同級生は一人しか見当たらなかった。わたしは比較的元気だったので負傷者の搬送を依頼された。ガラスで血だらけだったり、足や腕を骨折したり、皮膚が真っ赤に焼けただれたり、けがはさまざまだった。

の人生は、もう終わりに近づいたのではないかと、何度思ったかも知れなかった。特に、昭和四十六年胃潰瘍による大量の吐血により、生死をさまよう状態にまで追詰められたが、幸にして、九死に一生を得て全快し、ホッと安堵した次第である。私の健康管理方法をあげれば、食生活においては、菜食、海産物、梅干しが主体であり、日常生活では、発汗運動（例えば、スポーツ、徒歩、家庭菜園など）を心がける姿勢を基本にして、毎日の生活を過ごしている現況である。私も片手間ではあるが、被爆者の仲間の一として、微力ではあるが、長崎県被爆者手帳友の会佐世保中央支部の会員の皆様のお世話をさせて頂いている者である。この被爆体験によって得られた教訓が、風化することなく歴史的事実として、後世に永久に語り継がれることを、心から念願しながら、この稿を終ることにする。

（佐世保市）

平成七年七月九日記

午後三時すぎに工場を離れる許可が出た。実家の疎開先の佐賀県武雄市に戻ることに決め、浦上から道の尾方面を目指した。住宅地は火の海が続き、体に火の粉が振り掛かった。長崎製鋼所の裏を走り、大橋球場を横切って線路によじ登った。街のあちこちに死体が転がっていた。

線路伝いに歩いて午後七時すぎ、道の尾に着き、炊き出しの行われていた道の尾国民学校で一晩過ごした。翌日、負傷者を満載した列車に飛び乗り、諫早で乗り継いで肥前山口へ。そこからは徒歩で帰った。

十一日の午前二時ごろ、ぼろぼろの風体で武雄に着き、驚く母に「長崎にすごい原爆が落ちて、やっと逃げてきた」とだけ告げ、そのまま眠ってしまった。ひどい下痢が約二週間続いた。

爆心地に近い下宿は跡形もなく、下宿の母娘と三人いた仲間のうち二人はそれきり消息が分からずじま이었다。残る一人は亡くなった、と後日聞いた。

(爆心地から二・八キロの平戸小屋町、三菱電機長崎製作所で被爆)

私の願い／核兵器使用を絶対に二度と許してはならない。残酷な被爆体験の教訓が風化することなく、歴史的事実として永久に語り継がれることを願う。

(「長崎新聞」より)

(注) 大隈直之様は、残念ながら平成二十年四月五日帰らぬ人となりました。



川平小学校にての被爆体験講話 子どもたちにも語り伝えたいこと

川平小学校の皆さん、こんにちは、元気そうですね。今日は川平小学校の元気な皆さんに、お会いする事が出来、本当に嬉しく思っております。なぜかと申しますと、私も十三年前までは、この川平小学校に、庁務員として四十年余り勤めていたからです。

川平小学校の本田教頭先生より、私の所に電話がありました。て、原子爆弾当時の体験談を、川平小学校の皆さんにお話し下さい、とお話がありました。

一応私は、人様にお話しはできません、とお断りしましたが、「この話は原子爆弾を受けた人にだけしか、話す事は出来ないのだ」と思いましたので、皆さんにお話しする事を引受けました。そして私の話が、皆さんに一つでも二つでも分つて、そうだったのかと思ひ、心に止めて頂きましたら私はとても幸せです。

私が皆さんにお話しすると言う事で、一つ一番気にしたこ



長濱 キミ子

とがあります。それは何かと申しますと、一年生の皆さんから六年生の皆さんまで一緒に話を聞いて頂くと言う事です。五、六年生の兄さん姉さんには分つてもらえても、一、二年生の皆さんには「無理ではないのかな」と、いろいろ考えました。分り易く優しく言うで一、二年生の皆さんに分つてもらえるけれども、五、六年生の皆さんにはちょっと優しいと思ふ所もあるでしょう。どうしようか迷いましたが、今日は低学年の皆さんに合わせて、話をする事にいたしました。

そして一つでも皆さんに多くお話を伝えたいと思ひ、ノートに書いて来しました。年を取りますと、今思っている事でもすぐに忘れたり、言葉に出て来ない時があります。

私達は去年十一月末に何年振りかの、西浦上国民学校の同窓会をしました。原子爆弾で亡くなられた先生方や同級生、その後亡くなられた同級生の方がたに黙とうをし、冥福をお祈りして同窓会が始まりました。その中で原子爆弾の時のこ

とは話すまい、思い出したくもないから、と言う事で誰一人として話す人はいませんでした。私もそのうちの一人です。

思い出したくもないし、人に話したくありませんでした。でも今、私達、年を取った被爆者が話さないと、戦争の恐ろしさやこわさ、そして戦争の無い平和の有難さが、分らないのではないかと思っています。幸い私達が住んでいる日本の国は「戦争をしない」と言う（憲法）国の決りの元で、戦争のない平和な毎日を過す事が出来ておりますね。今、その国の決りが壊されようとしています。恐ろしい事です。

長崎でも昨年十一月三日に、国の決り（憲法九条を守る会）を守る会が出来まして、会長さんに元の長崎大学学長であられた土山先生がなられ、初めての会合が家野町の長崎大学中部講堂でありました。一般市民の方はもとより大学生などの若い人から、そしてお年を取られた方がたまで幅広く集っておられて、私も出席してよかったですと実感して帰った一人でした。

今、平和だから欲しい物が何んでも手に入り、お金さえ出すと品物がありますよね。でも今、世界中のどこかで戦争があっています。それがテレビで映し出される場面を目にします。子供達が戦争のために食べる物もなくて、やせて逃げ回る姿を見る時、どんな気持ちになりますか。戦争があると戦

争に関係のある兵隊さんばかりでなく、一般市民や子供達までが必死に逃げ回らなければなりません。

私達が今住んでいる日本の国も、六十年前は丁度テレビ等で見るように、敵の飛行機が来ると防空壕に逃げ込み、かくれ、敵の飛行機が来ない時に仕事をしていました。いつ何時に敵の飛行機が、自分達が住んでいる所に来るか分かりません。戦争がひどくなると、夜でも眠れませんね。電気も真暗して眠ります。なぜかと言うと、明るくしていたら、人間がいる事が敵の飛行機に分り、爆弾を落されます。

平和な時は今ののように、何んでも品物がたくさんあります。欲しい物がすぐに手に入ります。戦争が始まると、すぐに何んでもなくなります。食べ物から、着る物、靴、下駄、学校で使うノート、学習に使う半紙、折紙に至るまでなくなります。どうしてでしょうか。「誰かがかくしてしまうのでしょうか」皆さんは戦争が始まると、なぜ品物が無くなると思えますか。

私達は学校から帰ると、農家ですのですぐに畑に行き、一生懸命に働いて頑張っているのに、食べる物もない。不思議ですね。そうです、戦争があると私達はその戦争に勝たねばなりません。勝つために兵隊さんが使う「飛行機や船、戦車や爆弾など」戦争に使う品物をたくさん作ります。農家は自

分の家で作った米や麦、いも等、(供出) 国に出さなければならぬのです。

農家がつけている田や畑を見回って、これだけの面積があるのでこれだけの量は出しなさい。割当が来て、それを出さなければならぬので、自分の家で自分達親子で作っても、自由になりません。自分で売る事も出来ないのですよ。

それからだんだん戦争がひどくなり、長崎の空にも敵の飛行機が毎日のように来て、空襲警報が出されるようになりました。

今は平和ですので、学校も土曜日、日曜日と休みますね。会社でも土曜日、日曜日と休み所が多くなりました。当時、戦争の時は土曜日も日曜日も全くありません。一週間が「月、火、水、木、金、金」でした。戦争のために休みなく働き続けたのです。

私に通っていた学校は「西浦上国民学校」です。今の昭和町に付属中学校が建っている場所です。国民学校は初等科と高等科に分れていて、初等科が六年生まで、高等科が二年間でした。私は原子爆弾が落ちる時は、高等科の二年生でした。今なら中学校の二年生ですね。

戦争も日増しにひどくなり、空襲警報が毎日のように出されるので、初等科の六年生までは別々の地域で(分散授業)

わかれての授業になり、各地区にある神社や、米や野菜などを国に出す出荷場に集り、先生が時々回ってこられて授業をしました。しかし地区が多いので、先生が来れない時は自分達で自習をしていたようです。

高等科は毎日夏休みもなく、学校に行って何をしたかと言いますと、男子生徒は高等科になると学徒動員と言って「西浦上国民学校の横が兵器工場」でしたので、毎日そこへ出勤して働いていました。

女子は食糧増産という農作業です。西浦上国民学校は田んぼをたくさん作っていました。今の浦上水源地の先の「人野」と言う所と赤迫の六地藏の所にも、広い田んぼが何枚もありました。畑は住吉の向う、線路を越えて西北という所にあり、さつま芋を作っていました。作物の手入れの暇の時は、運動場を耕していました。運動場までもだんだんと畑に変わって行きます。

戦争中は食べる物から、着る物、紙類、筆、ペンに至るまで不足して靴などもなく、家で米を収穫した後の「わら」で作ってもらったわらぞうりです。それが水に弱く雨が降るとすぐに切れるので、雨が降ったりするとぞうりは脱いで手に持って帰りました。

着る物はどんなにしましたか、と言いますと、母親が持つ

ていた手織りの着物をつぶして、それで上着とモンペーと頭にかぶる頭巾、頭巾は頭に傷を負わないように、綿を入れて母親が縫ってくれました。そしてこの上着と頭巾には名札を書いて、住所、保護者氏名、本人氏名、年齢と血液型を書いて上着の胸と頭巾に糸で縫い付け、それを着ていました。

今は道路も舗装されてきれいな道路ですが、昔は小石だらけのでこぼこ道でした。幸いなことに自動車は一台も通った事はありません。リヤカーと荷車だけです。荷車を牛に引かせて通っていました。

私達は戦争がひどくなっても、戦争には勝つものと信じていました。なぜかと申しますと、日本の国は「神の国」である。最後は神風が吹いて戦争には勝つ、と教え聞かされました。毎日、私達が言っていた言葉がありました。

「海行かば水く屍ね 山行かば草むす屍ね 大君のへにこそしなめ帰り見はせじ」とあと二言

「一億一心 われここに有り」もう一言

「欲しがりません勝つまでは」これが三ツの言葉です。

どんな事かといいますが、

「海に行ったら海の中で死に、山に行ったら山の草の中で死屍となり、大君（天皇陛下）のお傍で死にます。この身はどうなってもかまいません、と言う事です。」

二番目はその時、日本の人口が一億いたそうですので、「一億の人が一つの心になり戦争に勝ち抜くのだ、その自分はこのにおります」とのことです。

三番目の言葉は「戦争に勝つためには何もいりません、何も欲しくありません」と言う事です。学校に行ったら、毎日の言葉を言ってから仕事にかかります。

昭和二十年八月九日、その日も朝から空襲警報になりましたが、九時前に警戒警報に変わり、（空襲警報の時は学校に行かない）それから同級生五名（川平方面）組と学校に行き、学校に届いたのは一〇時前後ではなかったらうかと思っております。

今は、道路も変わった場所もあり近くなっておりますが、その当時は川のそばが道路で曲りくねっていました。家から学校までは四五分から五〇分ぐらいかかったと思っています。家が遠いので、学校に二回行くのが大きかったです。たまには午前中と午後（空襲警報の関係で）と二回行った事もありました。

幸いな事に、私の家の隣組の「谷口キクさん」と言われる方が、西浦上国民学校の「用務員」さんで、わたしより三歳年上なのでよく「キイ姉ちゃん、キイ姉ちゃん」と言って、お友達にし学校の昼休みなど、川平組は用務員室に出入りを

させて頂いていました。

学校に届いてしばらくしたら、先生が教室に見えられました。私達の先生は田中先生とおっしゃいましたが、先生になられて一年目と言う、とても若い女の先生です。

「今日は空襲警報が終るとすぐに学校に来てくれましたが、あなた達はすぐに帰りなさい。仕事も何にもしなくていいです、すぐに帰りなさい」と言われたのでびっくりしました。

早く帰るように言われたので、すぐに教室を出て「おかしいね、空襲警報でもないのに」と言いながら用務員室に行きました。谷口さんをお願いして、午後、又教室に行くまで居らせてもらう事にしました。

「今日の田中先生はおかしかよ、空襲警報でもないのに」そんな事をいろいろ話していたら、田中先生が用務員室に見えられ、又「すぐに帰りなさい」と言われたので、返事だけ「はい」と言つて、先生が又職員室の方へ行かれると、又私達は座込みます。

しばらくして又、私達が帰ったか見に田中先生がこられて「まだ居る、早く帰りなさい」と言われたので、「午後、又学校に来るのがいやで、午後教室に行くまでここにおいでもいます」と言つと、田中先生は「今日は午後も学校に来なくていいので、すぐに帰りなさい」と言つて、又職員室

の方へ行かれたので、「どうしよう、昼から来なくてよいなら帰ってもよかね」「でも、今日の田中先生はおかしい」と言いながら、用務員室を出て帰ろうとします。

今度はすぐに又、田中先生が見えられて「早く帰りなさい、あなた達が帰るまで先生はここにいます」と少し強い口調で言われたので、私達は用務員室を出ました。学校の回りは田んぼばかりで、田に水を入れる溝があり、いつもきれいな水が流れていて、手などよくそこで洗っていました。その時は、用務員室から先生が見ておられるので、手洗いもせずに早く通り抜けました。私達は田中先生に学校を追い出されたと言いますか、見送られたと言いますか分りません。

その辺の店屋さんと言うと、学校前の文具屋さんと大井手の山田商店、その下隣の原口商店です。その日、私は配給の醤油を買う事になっていて、配給の券を持って原口商店で醤油一升を買つて、山田商店の前には「大きな大きなさんだんの木三本」もあります。とても暑い日でしたので、木陰に立って間もなく、少し赤みが入った黄色いものすごい光を見ました。

そのあと何が起きたか分りません。四、五mも飛ばされていましたが、風が吹いた感じも知りません。何かがおこったと思ひ、辺りを見回す事なく、山田商店の前は一面田んぼで

したので近道を行って、学校帰りは田の畦道をよく通って
ました。

その畦道をどんなにして走って通り抜けたか分りません。
今の川平入口バス停の下の、墓がある所など山がおおいかぶ
さり、昼間でもとても寂しい所でした。川平に入りまして最
初にある家が、今の下川平バス停の所にありました。その家
に火がつき火事になって、家の中ではおじいちゃんとお母さ
んが荷物を一生懸命、庭に投げ出しておられました。

普通の家の火事と言うのは、台所などから火が出ますが、
原子爆弾の火事は家の一番高い所（棟）に火がついて外から
燃えていきます。その家も一番高い所から燃えて、中ではま
だ荷物を投げ出しておられました。

回りは山の近くに家はありますが、その時はあたりを見回
す余裕はありません。回りは田んぼばかりです。私達は火の
粉が飛んで来ないように、川において川の渚の草にすがった
り、川の中に入って歩いたりして、なかなか進みません。

三川橋の少し先まで来ると、道のそばに又一軒あって、そ
このおじさんが私達が川を歩いているのに気付いて、「そん
なにしてあんた達は帰られん、あぶなかばい。自分所の防空
壕に行つて様子を見て、夕方、飛行機のこんなような時から
んね」と言われ、そのおじさんが私を見て「あんたは何んば

したとね、前中服でも何んでも黒くなってしまつて」と言わ
れて、初めて醤油を買つたのに気が付きました。飛ばされた
時に醤油の瓶が割れたのですね。その割れた瓶が入つた手提
袋を持って走つたりしたのに、誰一人として私達の仲間は私
の服が黒くなっているのにも気付かず、自分のことで一生
懸命で恐ろしさと、こわさで体中が、がたがた震えていまし
た。

割れた瓶が入つた手提袋をその家に置いて、裏の畑の横に
ある防空壕に入れて頂きました。防空壕でも体の震えはなか
なか止りませんでした。時々、飛行機の音がすると身がちぢ
む思いがします。又、そのあたりに爆弾を落とされるのでは
と心配しました。飛行機の音が少なくなったので防空壕の外
を見ると、畑の里芋の葉には黒い油雨が降っていました。

家の事も心配なので、皆んな帰ることにしました。我家ま
では急いでも三〇分近くかかります。筒水まで来ると向かい
の山の近くにある「松本」の叔母の家（父親の妹）が焼けて
しまっていました。筒水を通り過ぎて「今のガソリンスタン
ド」がある隣に、一軒家がありました。全部焼けてしまつて、
家族の人は田の畦に腰掛けておられ、家の道具もぜんぜん出
してない感じでした。

急いで家に帰つて見ると私の家は傾き、中は「すす」だら

けで足の踏み場もない様子でした。家では私が帰って来ないので、探しに出ようと喋っているところのようでした。私も家につくと急に具合が悪くなり、何んと言ってよいのか、どこが痛いと言う事ではなく、吐気がして気分が悪いのです。母親がお茶は毒消しだからと言って、お茶を濃くして飲ませてくれたのを、今も忘れません。その頃は薬も不足していたので、「げんのしょうこ」とか、「医者殺し」と言う草など飲んで飲んで治していたのですね。

そうそう、私達の田中先生はどうなられたのでしょうか。西浦上国民学校は焼けたのではなく、平ちゃんに倒れてしまったのです。田中先生も他の四名の先生も、校舎の下敷きとなって亡くられました。田中先生は大きな柱の下敷きになって、「助けて下さい。誰か助けて下さい。」と叫んでおられたようですが、すぐに柱を切つてのける「鋸」などもなく、五時間後に助け出された時は、力がついて亡くなられたそうです。(谷口さんの話) 私達の身替りになり、私達を学校から追い出して先生が亡くなられたので、私は一生、田中先生を忘れる事は出来ません。

用務員の谷口さんは、と言いますと「けが」だけで済みましたが、その後病気になるに又「ガン」になって、入院したり退院したりを繰り返して、今も立山町に住んでおられます。

原爆でその日に亡くなられた方が、この小さな川平町だけでもだい分おられます。私の家の隣組でも九軒しかありませんでしたが、二人亡くされました。二名の人を隣組で行きましたが、死体も見つかりませんでした。

川平の同級生で学徒動員で亡くなられた方は、川平で一人、六枚板で一人でしたが、西浦上国民学校の同級生を入れると多い人数になります。

長崎では原子爆弾で八月九日の一日だけで、どれくらい亡くなられたと思いますか? 「水が欲しい、水が欲しい」と言って浦上川(大橋の下辺り)に行つて水を飲むと、もうそこで折重なつて川岸で死んで行かれたそうです。水にも毒が入っていたのでしょうか。一日で何んと、七万四七〇〇人亡くなられたと聞いております。

その日に亡くなられた人だけでなく、原子爆弾が原因で病気になる、その後亡くなられた人や今もなお、病院で病気に苦しんでいられる方々もおられます。原爆の日に傷にも負けずに帰つて来た人が、四日か、五日して急に亡くなられました。恐ろしいですね。私も四十日を過ぎた頃、体中吹出物がしました。

丁度その時、長崎大学の永井隆先生の子供さん二人とおぼあちゃんが、私の家の横を通つて山の中の一軒家に疎開して

おられました。永井先生も原爆後一週間ぐらい後に、その家に看護婦さんを連れて見えられ、永井先生自身も体全体に傷を負い、杖にすがりながらも皆んなを見て治療を下さっておられました。その看護婦さんの話で「今のフランシスコ病院」そこが原子爆弾が落ちるまでは「神学校」と言っていて、「カトリック」の人が神父様になる学校でした。そこが「急に病院に変わり、アメリカからの先生や看護婦さんもおられ、薬のよいのがありますよ」と教えて下さいました。もちろん日本人の先生や看護婦さんもおられます。

急に病院になったと言いますが、雨が降る時など雨もりがするし、ガラスが割れてしまっていて板など打ち付けてはありますが、風が吹き込んで来ます。昭和町の二郷橋から病院までの道路の横には、牛や馬の死がい、そして人間の頭の骨など多くあり、その辺を通り抜けるのも大変でした。病院に着くと患者が多くて、待つ時間も大変でしたが、又その辺りの臭いが大変でした。病院では日本人の先生や看護婦さんもおいらっしやいましたが、アメリカの人が多かったです。今でも覚えているのは、とても太ったまっ白い肌のシスターがいつもにこにこして手招きして下さいたり、待合所にいると迎えに来て下さって、とても感じのよい方でした。

その後、風邪でもひくと、今度は原爆症ではないか、原爆

が原因での病気がいつ出て、いつ死ぬかと思うようになりました。私達の頃は、誰でも原爆症を心配して結婚しない人、それに結婚した人でも子供が産めない人、いろいろ居ます。同級生の中にでも、子供もない、身寄りもないので、今はまだ食事でも作れるので、食事でも作れなくなると「原爆ホーム」にお世話になると話しております。世の中には戦争のために、いろいろと苦しんでおられる方もいらっしやいますね。それを思う時、やはり戦争のない平和がよいです。そして

日本の国だけでなく、世界中の人々が平和で過ごすことが出来ますように願っています。いつまでも、いつまでも戦争の無い、平和な世の中であって欲しいですね。

今日は私の話を一生懸命聞いてくださいます、本当に有難うございました。

私の「原爆」 その日、その時



プロフィール 私は当時十四歳（現在七十四歳）、三菱兵器大橋工場の技術部、実験場で被爆しました。爆心地より一・一kmの所で奇跡にも、生き残り、生証人、生存者の一人として、原爆投下の一日の、有り様を一部始終を語り綴りました。



早
崎 猪之助

私は昭和二十年四月一日に三菱兵器大橋工場に入社して、三ヶ月の実習を終えて七月一日より、現場配属となり部所は技術部の実験場でした。

当時十四歳の右と左と知れない、中一日一日を上を敬ひながらの一日でした。

子供なりに戦況の姿が暗い方に動くのを、知りながらも自分の本心を口に出せない時代でした。

そして、八月九日の訪れでした。

その日は又、蒸し暑く朝は曇り空でした。会社に着くとやがて、空襲警報が出十時、解除になりました。

各人職場に戻り、その内に時計は十一時を差している。するとその時、技師より「君、此の歯車のピンが固い、先を削ってくれ」その一言が私を生死の別れ目でした。二十m先の技術ビル一階のグラインダーまで小走りに走り、身を一米もある柱に寄り添ってグラインダーを動かした時、一秒間の何分

の、大音響は天地を破裂する音と、光、風は物凄く、私は宙に浮き上がり、右八m位の大きな冷蔵庫の奥に吹き込まれました。

其の比は何があつたか、知らないが直の爆風は、一m角の柱が受け止めて、壁に当った反射の風が私を連れられるも、頭を打つてないので、ヒジで受け止めてました。別に外傷が無く、意識を失う事が全くなく空襲でも無いのに何事かと、不思議でならない。

私は上は裸、半ズボン、足は素足で、個室に吹き込まれ、目も、耳も何の役にも立たない暗闇の中、うづくまり視界はゼロである。

七、八分してもまだ、明るくならない。十分位して少し明るくなった。でも轟きの音は消えない。黄黒い煙はまだ地面を、なめて居る、煙は二十、三十、四十cm位の早さで視界を見せた。

私は小羊が小屋を逃げ出す様にすると今まであつた工作機械何もある物体はビルの外にある。一体、何事かと機械のそばを、無意識に外に、外にと工場より外にと思ひ、第三門にと向かうも、遠くは煙りて見えない。行くと目の前は組立て工場はガレキの山となり裸の工場が倒れている。横目で見ながら、守衛室は吹きやられ姿もない。門を出ると前は八月

の美しい田んぼの中は水だけが残り、水より上は燃え尽くしている。その時はまだ動く人影は一つも見当らない。踏切の前は照円守、其の足元には松の大木、それが吹き倒され葉は一枚もない、一本の松は逆立ちしている。何たる有り様か自分は夢を見ているのではないかと思う。すると、一人の人が目の前に現れた。ポロポロのシャツ、そして手足も巨峰の様に変色して皮膚はぶらさがって居る。声を掛けても何の返事もしない。鉄道の枕木は白い煙を出して居る。線路を大橋の方に行き、西町の方にと想ひ、右にと想ふと、右の田んぼに西郷寮より毎日運ぶ工員の弁当を積んだ馬方さん、馬共田んぼの中で死んでいる。又、西町目出して進と、家が上下に屋根が動いて居る。大きな牛が下敷きになって居るがその、奥さんたるや、五歳位の子供と抱き合つて泣いている。其の倒れた家に子供と、じいちゃんが居るその母さん、半狂乱となつて居る。

道端に大木が倒れて先に行きにくい。道端に一人の母親が皮膚は剥がれ大火傷して横になって居る。脇に五歳位の男の子が「母さん起きれ、起きれ」と泣きながら腕を叩いて居る。私に問い掛けるも何もできない。心の痛む一時、又、二分も奥に行つたら、三人連れの西郷寮の工員さんが、真っ裸で前をカボチャの葉で隠し背中にも、赤ちゃんの、口程の傷があ

る。夜勤上がりでその時入浴中の下敷きとなり命からがら逃げ出した人、私は「ヨモギ」を石で潰して、傷口に当ててやるも、鹿児島の人でした。

又、遠くより半狂人の声は聞こえる。奥へ、奥へと行くと、動物とも人間とも言えない。聞きなれない声がある。行くとそこが三菱兵器で一番大きい西郷寮です。三階建ての木造は全て倒れ、煙又、炎が上がって居る。

夜勤の者は全て家の中、下敷きとなり、助けを呼ぶ声は聞こえても、動き廻る者は誰も居ない。何も知らず休んで居る内、元気な筈の夜勤者が煙と、炎の中、大きな悲鳴は、いつまでも聞きゆるのです。何と言う事が、可愛想も地獄の中より抜け出しは無理。木の倒れた山の中は煙くて入って入れない。

何と恐ろしい有り様か。もう何処も逃げる所は無い。又、恐る恐る線路の方に戻って来た。もう二時位ひか、今度は、一変して鉄道沿線は黒焦げの人、大怪我の人で陣取って居る。

火傷の人は巨峰の色、怪我の人は血で染まり赤鬼の様になり、まるで口で言い表し様は無い。又、ガラスが皮膚に食い込んで居る人も多い。全て兵器工場の若い男女で二十歳以下の若者が五割は居る。昨日まで美しかった人も、今日は黒焦げの人、右見ても、左見ても動く人全て怪我人、無傷の人は見当

らない。

無数の怪我人の中より、私の名を呼ぶ声がある。ふと見ると、谷口組の上司、目が合うと水、水と言う。首の横の骨は折れ拳程の穴がぽっかり、水をやればダメと大声で怒鳴る人が先に居る。でもその人を救う道はない。水を水を飲ませるも何も器が無い。

ふと見ると、一枚の布団がくすぶって居る。もうこの人は生きることなく、綿を引き破り、田んぼの水で洗い、水を染ませて口に絞り込んでやった。又、一度繰り返し返すともう何も言わないが、そばの黒焦げの人が又、水を言う。七、八人の黒焦げの人に何回も、何回も絞り込む、すると目の前を社の上司、永野伍長が通るのを見た。走り寄ると、永野さんも顔半分血だるま、此有り様何たる事かと問うと、此は広島の新型爆弾と同様と言う、何も無い今は親が居れば一刻も早く親元に帰れと言う、それでやつと事の由を知ったのです。すると又、爆音がある。

誰一人逃げる者は居ない。横になった多くの人は、黒焦げの人と、血がにじんだ怪我人である。住吉、赤迫と行くも、何処も怪我人と家はつぶれ、火がつく家も誰も火を消す元気な者は居ない。赤迫のトンネル工事は韓国人ばかり。火傷をして、アイゴ、アイゴと泣いて居る。目に入るのは黒焦げの

人と血で染まった人ばかり。何と言う有り様か。此の惨状に、誰一人怪我人に対し手を貸す人は誰も居ない。

身体が無傷な者は見当らない。仕方なく工場のほうに来て、田んぼの土手に腰を下ろすと住吉の方より、列車がバックして、枕木に水を掛けてくる。救援列車は工場の所で止まった。係員は一人、一人手助けして列車に乗り込ませて居る。赤くにじんだ人も、黒焦げの人も、我先にと列車目がけて動きだす力を見て、これが最後の力かと想いました。列車に乗ると一口も開かない自分も乗ったが、怪我人から先だと怒鳴られて、渋々下車する。それが二度、三度と繰り返しである。一人畑の土手に腰を下ろして想い付いた事に、自分も怪我人に化けないと列車に乗れないと想い付き田んぼのヘドロを顔と、身体に塗り着け火傷の人に見られる様にと想って三度の列車を見送り稲佐の山に日は静かに暮れるでも、空は火事で焼け、空、夜の外でも人の顔は見える、其の内に又、列車がバックして来る。今度こそと、すきを見て乗り込んだ。黒焦げに化けた私は、土間に横たわって居る。

何の為に此の様になったのか誰も知る人はない。又、車内で一口もぼやく人も無い。其の元氣も無い。

怪我人を満載した列車は音もなく、各駅を過ぎていく。諫早着は夜九時半頃と思う。誰一人、鳥原線に乗り替える人は

居ない。

黒人の様に汚れた私に乗客はこじきの子供と想い込んで居る。事の由を聞き驚き、驚きの一言「列車に乗れんので体を汚している」と聞き自分に同情が集まりました。汽車は石炭が悪くて動かず朝の三時に鳥原着、それから二時間の道乗りを素足で朝の五時、汚れた体も元氣なだけ、誇りに想い、我が家は何も変わり無く、家族は私の汚れにビックリでも無事を共に喜びました。

汚れの訳を話すと、母は涙流して居る、今やつと長い一日が終わり有りし一日を振り向けば、あの惨事が、五歳の子供、炎の中で泣き叫ぶ人、列車の黒焦げの人、自分は運良く助かった者の人の命を一人も助ける事のできない。あの悲しみが込み上げて涙が止まらない。あの、五歳の子供に何の力にもなれず、いつまでも心残りがします。

幾年去れど、あの幾多の人が一瞬にして、変わり果てた何事も、代の移り変わりも知らず他界した人は一口の小言も言わず、世を去っていった。年毎に悲惨さを知った。人は少なくなる中、私十四歳の少青年も今や七十四歳、あの時を昨日の様に思い出します。戦争は巨万の富も命を消え去る永遠の平和を祈り続けます。

すべてが真つ平らに

当時、大橋町の三菱兵器工場で、養成工として働いていた。あの日は潜水艦のエンジンの実験が昼から予定されていて、朝はその準備をしていた。技師の指示で歯車のピンを研ぎに、グラインダーなどの機械が置いてある部屋へ入った。ふと時計を見ると十一時。「そろそろご飯の時間か」とぼんやり考えながらピンを研ごうとした。

その時、まぶしい光が、ごう音とともに辺りに広がった。雷が百個ぐらい合わせて落ちたのかと思った。背にしていた柱が壁になり直接爆風をうけなかったが、それでも十二mほど飛ばされ、業務用の大型冷蔵庫にたたきつけられた。

意識はあったが、しばらくうずくまったまま動けなかった。一〇分ぐらいたち、ようやく動くという気になって、がれきの中からはい出た。辺りを見回してびっくりした。何もなかった。建物も木も倒れ、すべてが真つ平になったようだった。夢じゃないかと鼻をつねったが何も変わらない。

とにかくどこかに逃げなければと思いい、山にある防空壕(ごう)を目指した。歩く先には、全身の皮膚がただれた男性、死んだ母親にすがりつく子ども、まさに地獄だった。「水を

くれ、水をくれ」と叫ぶ声も聞こえたが、水をやるうにもコップもひしゃくもない。落ちていた布団の綿をちぎりとり、田んぼの水に浸して、水を求める人に絞ってやった。

そうしているうち、会社の上司が歩いてきた。「ここには何も残ってない。少しでも元気のあるうちに親元に帰れ、ここにも死ぬだけだ」と言われ、列車に乗って実家のある深江村(現南島原市)に帰ろうと決めた。

近くの線路の方へ向かうと、まもなく救援列車がやって来た。この列車に乗って帰ろうとしたが、救援隊の人に「重傷者から先に乗せろ」と言われて乗ることができない。次の列車も、その次の列車でも同じことを言われた。日はとつぷり暮れ、次第に疲れがたまっていくのが分かった。このままここにいたら力尽きて死んでしまう。そこで田んぼに入り、体中に泥を塗り付けて真つ黒になった。四本目の救援列車にはなんとか乗ることができた。

諫早で列車を乗り換え、実家の深江村についたのは朝五時。母は「体一つあれば何よりの親孝行」と言い、帰宅を喜んでくれた。

(爆心地から一・一kmの三菱兵器大橋工場で被爆、長崎市在住)

私の願い／今の人たちは平和であることが当たり前だと思っ

ているが、それは違う。ひとたび戦争が起こると人々から笑顔は消え、悲しみに包まれる。戦争で亡くなった人を慰める言葉はない。もう二度とあの悲惨な戦争を起こしてはいけない。「永遠の平和」。ただそれだけを願う。

(平成十九年五月二十四日付「長崎新聞」より)



歩き続けた一昼夜

辻 原 津 田 子

辻原津田子と申します。

現在なら中学二年生です。とにかく軍の命令で、鉛筆をやすりに持ち替えて、十四歳で、本部の三菱兵器製作所機具工場というところに配属されたんです。そして毎日毎日救急袋、防空頭巾、祖母の着物を解いた緋のもんぺと上着を着て、日の丸の鉢巻を締めて、旋盤を持って、兵器の本部の治工具工場というところに配属されました。

給料がいくらあったのか全く記憶にございません。

八月の九日の当日ですけれども五島、富江辺りからも私たちと同じような年齢の子供たちが、たくさん動員されて来ていました。五島から通勤するわけにもいかず、結局は寮に泊って、近くの寮に泊って夜になると、帰りたいよ、母ちゃん帰りたいかよ、父ちゃん、トミエちゃん、どげんしとろうかね、土地の訛りの言葉をそのまま出して泣きじゃくっているのを忘れられません。

原爆の当日ですけど、橋せつ子という、富江から来た、私と年もあまり変わらないその子が、十一時頃に弁当を取りに行つて来いといわれて、私たちその頃時計なんて持つておりません。取りに行つて来いと言う、それは絶対服従ですから、それで取りに行きましたが、しかし、弁当はおろか本人も戻ってきませんでした。

そして、十一時二分、強烈な爆風と、……トンネルは一号から六号まであつて、一号から四号までは貫通してましたが、五号と六号はまだ、貫通してなくて、私がおる六号はまだ朝鮮人がストップパーをかけて、手鑿で、こつこつ掘りながら、ある程度穴が開いたらそこに爆薬を入れ、それを四、五個所ぐらい、発破をどんとかけていました。土煙が上がる、そういう中で、作業をさせられたんです。爆弾が落ちたその時にも、一瞬にして吹きとばされ、跳ばされた事自体も自分ばかりませんでした。そして気がついたときにはその旋盤を動

かしてはいたんですけど、魚雷の部品でした。私の上を乗り越えて踏み越えて行くのに、われに返って気が付いたんですよ。

そしたら、「生きてる者は外に出ろ」ということで、とにかく、トンネルは裸電球がぶらんと下がってて、そして一号から六号までは横穴がところどころあるんですよ。

ただ、「伝令とかなんとか、通達事項があると、一応外に廻つたら、横穴を通って行って、説明ということになりますけど、そういうことで、横穴伝いで、一号トンネルに集結、いうことで集結しました。

生きてる者とはにかく一号に來いと、来て、集まったら外に出ると、出たらなんと、今日のようなそれはそれはいい天気です。どこに爆弾が落ちたとやるかというぐらいの上天気でした。そして、「みな集まったか、集まったら土手を下りて、この汽車の線路を踏み越えて向うの山に逃げろ」という命令が下ったんです。

そして向こうの山に逃げて身を潜めておりました。やがて夕方になり、しかし、敵の飛行機がすーっと旋回しながら爆弾の落ちたあとの被害状況などを偵察していたんじゃないかなるかと思えます。

やがて夕方になり、元の穴に戻れということで、六号には

戻らずに一号トンネルに戻れということで、一号トンネルに集結して、トンネルがこうあれば、その側溝にみんなもたれあって、みんな、肩を寄せ合って、壁にもたれて、「帰りたかよね、母ちゃんなどうしろるか」言いながら夕方近くまで潜んでおりました。私たちはまだ、十三歳、十四歳の女の子たち、親のこと、兄弟のこと、心配するんです。私も、気持ちはほんとに心は一つです。

やがて一夜が明けて、「生きてる者は一号トンネルに集結せろ」、一号トンネルに集まったのが結局、ちよつと話が前後しますが、橘せつ子という人は、昼の弁当を取りに行って、そのまま帰らぬ人となってしまいました。弁当といつても、その頃の弁当がどういふ弁当であったか、人間が食えるようなものではありませんでした。豆かすというか、牛か豚の餌のような、そういうものでした。そして一号トンネルに集結して、前の汽車の線路を踏み越えて、向こうの竹山に逃げろ、ということ、崖を攀じ登って、逃げました。

そして、線路の向うの方から、南瓜を一荷、担ってくるおばあちゃんがおりました。南瓜をそこにおいたが、私たちを見て「南瓜は取らるるけん、」

私たちはその南瓜を取る段じゃないです。私たちは自分の命が惜しいばかりで、こういう人もおるかなと、今にして思

えば考えます。トンネルを越して向うの竹山に逃げました。竹山は根が張ってて、普通の山と違って大丈夫だという思いがあったんでしょう。そこで日暮れを待ったんです。飛行機はぐるーっと旋回しながらどこが今燃えてるか、どこの被害が一番大きいか、カメラで撮ったんじゃないかなろうかと、今にして思えば、そうじゃなかったらうかと思えます。

そして、命令で元の一号に戻れということで一号に戻って、結局、何も食はずみんな、その穴に肩を寄せ合って、手を握り合って、家を出るときに朝ご飯をたべたつきり、寮におつた人は寮のご飯をたべたつきり、昼食べない夜食べないあしたの朝も食べない。全然、何も一つも口に入れてないんですよ。そして一夜明けて一号トンネルに集結、集結して、東西南北に並べ。という命令があつて、「お前どこか」、「南山手です」。「南山手は南部だな、じゃあこの端に並べ」、そういうことで並んで、その絵が、これです。このいちばんちびが私です。みんなの人に見守られながら、もつと何人もいたんですけどね。これは十日の絵ですよ。九日に原爆が落ちたんですが、ということ、十日に朝、夏の夜明けは早いから、五時くらいから起きて、とにかく人に見つからないようにということ、そして、したら飛行機がずーっと旋回してから何か落ちてきてたんですよ、「伏せろ！敵機ぞ伏せろ！」ということ、

な耳を押さえ、眼を押さえて川の中であろうと畑の中であろうと、みんな伏せました。

暫くしたら爆音が消えて、何か紙が落ちて来ました。その紙を取って見たら、

「日本の国民に告ぐ。昨日落とした爆弾は、B29二千機の爆弾に匹敵するものである。一日も早く天皇陛下に降参するようにと、国民一同から申し上げ伝えろ」

というようなことが書かれてありました。私はそこまではしきれなかったけど、何かデマかなと思っていたら、男の人はもう破るなり、足で踏んで踏みつけてから、もう悔しいと。

歩いて山を越え、峠を越え、川を渡りして、流れ川の水を飲んだりして、昼も夜も歩いて、ひもじいとも思いませんでした。十日に話は前後しますけれども、東西南北並んで、私はいちばん後ろに並んで、野越え山越えして、敵のピラを、嘘だデマだと言って破って、とにかく我が家に着いた時には翌日の夕方でした。その間ずーっと歩き歩き続けていたんです。

もう、涙が込み上げてきて、声がつまり、皆さんにもお聞き苦しいとは思いますが、十日の夕方、やっと家にたどり着いたとき、父は戦闘帽にゲートルを巻いて、私の遺体を

探しに出たという母の言葉です。私と入れ違いでした。

トンネル工場は大丈夫だろうとは思うけど、はっきりしたことはわからないと。

私たちには交代はなかったんですけど、男は朝八時から夕方五時まで、五時から深夜から朝の八時まで二交代、女子は三交代で昼は一日、夕方から夜の十二時まで、午前一時から朝の八時までというふうに、女子は三交代でアメリカをやっつけるために魚雷の部品を作っておったんです。

そういうさなかに攻撃に遭い、やっと我が家にたどり着いたときには誰もいない、門前払い、多分防空壕だろうと思つて、防空壕に行つてみたら、父が戦闘帽かぶつて、ゲートル巻いてでかけたという、泣きました。

ほんとに、自分が自分であるかどうか、わかりませんでした。その年の五月には胸を患い、約一年、あとで聞いたら、ストマイとか、いい薬が出たそうですが、ただ単なる風邪という風邪薬で、病院にかかってもレントゲン写真すらない、そういう中で、近所から夏みかんを求めてきて、それを午後になると熱が出るもんだから、夏みかんを食べて、時を過ごしていたわけです。

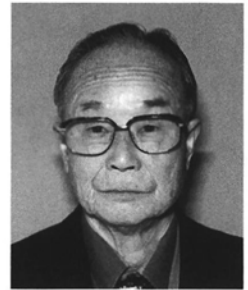
大きな病気はやはり、心臓を患い、狭心症という病気を未だに抱えて、ニトロは手放せません。

話が前後したり、いろいろでしたが、私はここで失礼させていただきます。

ありがとうございます。



核の廃絶に願いをこめて



松尾 富士雄

“あ、々々あの顔でこの声で

手柄たのむと妻や子が

ちぎれるほどに 振った旗（日の丸）

遠い空間に また浮ぶ……”

出世兵士を送る銃後国民の戦勝をこめての 勇壮なる歌の一節である。

戦争は、多くの人命を犠牲にした、尊い生命を失い、或は傷つき、またそれに伴って肉体を生涯の障害となった人を現存させる行為である。個人々々同志は敵対もなければ憎しみもない。ただ顔色の異なり、直視に差いがある相手との対国民的お互いが訳もなく殺戮し合う行為である。

加うるに、軍艦・飛行機・戦車・大砲・夫々中小の兵器は破壊消滅させる、莫大なお金・多人数の労力を惜しげもなく消滅させる。

経済的に考えれば一銭の得にもならない馬鹿げた行為である。しかも戦争闘志国同士の物心共々の消費は、言語を満たないものがある。結果において残されたものは、被災した人々の悲しみだけが、いつまでもいつまでも残るものである。

戦争こそ、唯一最大の経済消失の行為であることは、言を待たないことである。

その消費により一部の軍需産業のみが利益を得るという人間社会の不公平極まることを為政者は好むものであろう。また国民を思想統制、しめつけによって厳しく規制を加えてその批判こそすれば国賊扱いされるものであり、日本国の当時の体制は、まさにその数年を強圧されたものでありました。

長崎の被爆から六十二年を経過して想うこと。

市民の生活環境の一変、日常生活の豊かさの中に埋没して暮す習慣は、戦前・戦中・戦後・加うるに被爆によって生じ

た、表現絶する手痛い廃墟と化した長崎の町・飢え敗戦の混乱・茫然自失の人心および現象は、想像だに再現はむずかしい。

原子爆弾……当時は新型爆弾……による被災のむごたらしさ、筆舌にはつくし難い惨状・直撃による人の変形した死体・負傷・火傷・苦痛・悲鳴・凄惨・絶叫……まさに巷の修羅場は脳裏に焼きついて、忘れようとしても忘れられない。この世のものの出来事とは思えない壮絶の極の世界でありました。

爾来、長崎に住む吾々の心の中には、常に人間の住む世界から核兵器の廃絶と恒久平和を絶叫続けなければならない。

地球上万物の幸せと繁栄を願って……

世情は、その心を逆撫する如く、核の開発の進む一方、米のイラク紛争から、北朝鮮の核の開発を駆け引きに展開、アフガン人権問題等々その愚行は止まるところを知らない。

核の拡散が人類・生物の破滅を示す——核保有国指導者の無思慮に対し、激しい憤りを覚えるのは私だけだろうか？……

長崎では高校生による反核一万人署名活動代表団の国連本部への陳情活動なりを通して反核運動の拡がりは着実に若い力で長崎の声として、国内外に積極的にアピールして行こう。

さて、私の核廃絶に願いをこめて、昭和二十年（一九四五年）八月九日の体験とその一端を演述してみたい。

「ほしがりません、勝つまでは！」の合い言葉、一億国民挙げて戦勝を確信し、神国日本悉く軍事優先の国家体制のもと、男という男はすべて戦場へ!! 銃後を守る老人婦女子、子供まで国土防衛、食糧増産、若き女性は、女子挺身隊、学生徒は学徒動員令によって軍需工場へ兵器の生産に従事、文字どおり国家総動員の戦争に誰一人として不平を許さない時代の毎日でありました。

その戦も利することゆらぐ。二十年八月六日広島に、そして九日長崎市松山町上空五〇〇米において炸裂した原子爆弾（ピカ・ドン）は、人々の口々にあの忌しい戦争、そして再び核による人類の災禍を起こしてはならないと固く誓わせる心で一ばいである。

忘れようとしても、決して忘れられない、一九四五年（昭和二十年）八月九日、投下された一発の原子爆弾は、浦上の町を中心、幾万の尊い人命を、住いを、日々働く職場を、そして緑豊かな町並も、一瞬の強烈な閃光と爆風によって、焼土と化し、まさに生きたこの世の地獄絵巻を現実のものとしてしまったものでした。

生存した者も肉体的に精神的に強い打撃をうけ、その後の

生活にも深刻な影響を余儀なくされたものでした。

G・H・Q(連合軍総司令部)がプレスコードによって(占領軍司令部が主として、占領政策への批判の取り締りを目的として、新聞・出版物に強制した)一〇ヶ条の規範事項、昭和二十四年廃止されたが、二十七年(一九五二年)講和条約発効まで、その方針は継続された、いわゆる被爆の真相報道を規制したため国民の被爆者に対する認識が薄く、いわゆる誤解と偏見によって、特に県外においては就職や結婚に対して、伝染病のような差別を受けたことが、原爆被災をうけたこととそれ事態を口を閉ざしてしまう社会風潮を、事実として声を大にして特筆しておきたい重大なことがらであった。

即ち被爆者は、自分が原爆被爆者であることを口にしたがらない風潮は、心と口を貝の閉じた如く、堅くいつまでも閉じて過すことを余儀なくされたゆえんであったことを忘れてはならない。そのうち時間の経過を共に自分が受けた被災の実真相すら忘却してしまった人も多いことだったろう。

それから六十二年、いまもお多くの人々が後遺症に苦しむ——または、被爆後廃墟となった町並を、まのあたりにした人々の脳裏からは、いつまでも消し去ることのできない悪夢として、後々の世の人に語り伝えなければならない責務ではないだろうか。

私も十五歳の中等学校三年生、動員学徒の一員として、三菱長崎製鋼所(長第四〇三一工場)機械場(第二工場)(第一工場は現長崎新聞社から法倫会館までの一帯)(第二工場はブリックホールからもりまちハートセンター一帯)第三工場(浦上川対岸梁川町創価学会長崎平和会館一帯)第四工場(長崎バス茂里町一帯)の第二工場機械場で兵器の生産に従事しておりました。

当八月九日は快晴、ただ北東部に一塊りの積乱雲あるのみ
の快晴日和。早朝から空襲警報発令、八時頃は警戒警報に切り替えられたために道ノ尾駅から列車で浦上駅へ、そして工場へ出勤。平常勤務に服務中、工作機械で軟鉄塊を爆弾頭もしくは魚雷頭に成形するバイト(削り刃)を受け取るため詰所から伝票を受け第三工場に赴き、その帰り道のことであった。

竹の久保町市道を梁川橋へ向かって歩行中、上空かすかに航空機飛来を耳にし、はるか上空に白い落下傘のようなものが飛来落下するのを目撃するや否や、瞬時の出来事であった。突如、強烈な閃光に目がくらみ、無我夢中物陰に、両手両指で眼と耳を強く塞ぎ路上に伏した。(かねての対爆撃被爆の訓練である)数分、いや数十分、あたり一帯暗闇の中、しばらくのうちに我にかえり、人々が走り去る山際めざしての一

目散、どこをどう走ったものか？唯々一帯の建築物悉く倒壊、火の手が上がり、時折炸裂音響に恐れおののき、文字どおり、無我夢中、危険地帯を避けながら、本能のおもむくまま、焼け落ちる家並をぬけ、山あいの小路を辿りつ、大橋鉄道線路に辿り着く。線路枕木の燃えくすぶる中を避け線路沿いに歩行、道の尾駅へ向かう。夕刻近くなった。その頃には、血みどろに喘ぎ助けを求めて逃げさまよう負傷者の姿も三三五五、怪我の少ない我が身をかえり見ず、手負いの人に介助の手を差しのべる平常心に戻り行動したように記憶する。

滑石町に小さな特設応急救護所が在設されていたのを知っていたので、その救護所に一生懸命救急活動に従事した。

時津村浦郷中通りの自宅へ帰宅したのは、可成り日が暮れ遅くなったようであった。

私の身を案じた両親は、息子の無事を喜んだものであった。しかし長崎医科大学事務局勤務の長姉の姿は、その日のうちには目にするとはなかった。駒場町二丁目十四番地居住の清水惣市、サワ夫妻（二姉婚家の両親）の安否も術はなかった。時津の自宅の窓ガラスは破損、二階天井は吹き上げられる体であった。

翌日、父に伴って被災地をめざしたが、大橋手前、家の町付近で入市を阻まれた。

警防団、在郷軍人等の被災地役務によって、当面、幹線道路の往来だけの確保のための片付け作業の最中のようなであった。

翌々日は、大八車を借用、近所の小父さんの応援をうけ、家族総出で被災地へ。道中大橋付近から整理された道路の両側は、黒焦げの性別判別すら容易でない焼太りの遺体、荷台車をつけたままの黒焦げに焼太りで横倒しの牛や馬の死体など、おびただしく浜口町付近まで続いており、目につくものは、この世のものとは思えない修羅場の光景、今尚強く目蓋の奥に深く焼き付いて離れない。

駒場町（現在松山市民プール本館付近）の清水惣市さんは、木工細工をしていたらしく、鋸、金槌、鑿、金切鋏等が遺体の傍に散乱（勿論、木質部分はすべて焼失）サワさんは針仕事の様子、惣市さんとはあまり離れない位置で黒焦げの二遺体として目の当りにした。一方坂本町、医科大学管理棟は見事焼失、（現医学部記念講堂）執務中であつたであろう、机の配置のままの白骨化の遺体は、行儀よく並んでいた。病院側医師の判別により、集骨する。清水惣市夫妻の遺体は、再火葬（焼け残りのトタン板の上に残り木を集めての、主に頭部、内臓部の再火葬）、当時は骨壺とてなく、手作りの木箱に集骨、焼跡整理を含めて、三、四日、毎日時津村からの徒

歩よつての現場作業も、今日の發達社会を考えれば、想像だに苦しい作業の連日だが、当時は当然の如く、作業には小學校六年生の弟も含め、よく働いたと思うものである。

しかし、父の娘を想う心は、骨は収骨したにも拘らず、もしや、どこかに？……被災者收容所に娘の姿を求めて……

穴弘法・金比羅山、新興善小收容所をはじめ、各所、長与村、矢上村、諫早市、大村市、川棚村まで捜し求めて足を運んだ姿は、父の心情を察するに、今日なお、むごい出来事であつたと俚ばれてならない。

私は父の心を大事に継承せねばと心の中深くきざみつけて過ごさねばと思つており。

二十七年八ヵ月間、毎朝降つても照つても父の墓のちの母、又姉を葬る墓参を欠かしたことはなかつた。出勤時刻を十分間早く家を出れば墓参は可能であつた。……

大橋の川添いに水を求めて群がり、息絶えた数知れない遺体・路面電車の焼け残る鉄骨台車に横たえる遺体、蛆に傷を蝕まれる遺体と生きての負傷者の姿があり、あちらこちらとなく「水をください!!」「水をくれ」と叫ぶ多くの被災者たちの声を耳にしながらも、なす術すら意のままにならなかつた自分、ただただやり過し去らねばならなかつた被災地の、この世に見る地獄修羅場の町のさまは、筆舌に尽くしきれな

い痛々しいもので一ぱいでありました。……（合掌）

今日の長崎は、日本社会の豊かさで繁栄、平和によつてもたらされていることを想うとき、被爆による十幾万の尊い命よ安らかれと唯々冥福するばかりであります。

世界の核の廃絶を叫び、人類普遍の原理の追求と堅持、そのためには恒久平和を願うことに併せて、まだまだその後、尚いまだ絶えることのない極地的戦乱に苦しむ人々、あるいは、文明に取り残されて過している多くの数知れない差別の中にあつて暮しておる多くの人種人類に平安と平等、自由を与えられる地球上であること、すべての生物の上にも全き平和、真の平安の追求、それが実現を求めながら、私のまづい演述のまとめとしたい。

二〇〇七年十二月二十一日

（長崎市）

す
はむ里に平和願ひつ人の愛

日々育みて遠く希望まむ

松尾角蔵（景松）

生きている証し

私は語り部の方のような原爆の体験がなく、被爆者として肩身のせまい思いをします。あの八月九日、私はいつものように家を出ました。三菱電機に動員され敗戦間近とも知らず明るい張り切った毎日でした。

家を出ると前方に隣りの友人が歩いていきます。走って一緒に行こうと思った時あの不気味な警戒警報が鳴り響きました。私は立ち止まり迷いました。そして自宅に引き返しました。非国民的行動と自分を責め乍ら初めての欠勤でした。それが遠ざかる友人との永遠の別れでした。彼女は一片の遺品も残さずいなくなってしまうました。残るのは今も臉上浮かぶ彼女のうしろ姿です。家に戻って一人留守番していると爆音が出てきます。B29だと急ぎ玄関に下り立った瞬間ピカッと真昼の閃光を浴びました。あつと思っただけでした。

我にかえった時は家中の物が吹きとび散乱し呆然としましたが何よりも畑に行っていた母が心配で諸畑へ急ぎました。



嘉松愛子

背中がジリジリ焼けるようだったと言いつつも母は無事でした。その後の混乱終戦と人並の苦労を重ね、ようやく身心ともゆとりが出たのが平成に入った頃。その頃です、俳句に出合ったのは。俳句と言っても、雪の朝二のじ二のじのげたのあとと小学校で習った程度の知識しかありませんが、たのしく句会に出ていました。その時私の生涯に最も悲しい事がありました。二男の突然の死でした。かたときも離れ得ない悲しさ、生きている事の空しさ、そんな私を救ってくれたのが俳句でした。句会での一瞬だけでも息子の事が頭から離れているのです。息子の死から十年になりますが、私に元気をくれた俳句。私の生きている証しとしての句。この証しを重ねていきたいと思えます。

拙ない句ですが発表させていただきます。

三カ日の厨にあそぶ皿いろいろ

こけそうな黄色い茸一年生

風船がぬっと留守番していたり

包丁のありったけ研ぎ花の雨

打ち水や猫が出てくる自動ドア

血管探るナースの針や遠花火

猫の皿にスペシャルランチ夏期手当

菊捧ぐ背ナみな丸し戦没忌

干し魚にぐい呑みふたつ夜長かな

大阿蘇の草ひとにぎり鉦叩

枯れ草や淑女ドスンと滑り台

サービスエリア師走の牛が首を振る

浅くすわる銀行の椅子十二月

未だに苦しむ毎日



深井 美智子

昭和二十年八月九日十一時すぎ私はひるごはんの用意のため家の入口の所で、じゃがいものかわをむいていました。その時、ヒコウキのおとがした。でもけいほうはかいじよになっていたので、なんでヒコウキのおとがするのかなあぐらに思っていた。その時、いきなりピカツと光ったと思ったら急にぐらくなつて、びっくりして家の中に入れて入ったまではおぼえているが、その後のことは、どうして自分だけ家の中でひばくしたのか、家の中でいちばんひどくばくふうでこわれたがれきの下できをうしない、三・四時間ぐらい気をうしなつていた思いがします。

私があつたときなんとかしてたすかりたい一心で、少しでもあかりが見える方に、がれきをくらすみではいでてやつとの思いで家の外に出た所、浦上方面のひさい者の方々がものにつかれたようにして、みんな西上の方に、ぞろぞろあるいて行くさまを見てなぜかおかしくなりわらってしまつた所、自

分の足の左の足のすねの所がいたので見たところ、かわがはげてべろつと下にたれさがつて血が出ているのに気づき、あわてて家のウラにアロエがはえていたのを思い出し、やけどにきくと言ふことをおやたちからきいていたので、むしりとつて足のきずを、たれさがつたひふをそうつともち上げてアロエをはり、ポロキレをさがしてほうたいがわりにしてなんとか少しはいたみはかるくなつた。でも夜ヨルになつてぐわいがわるくなり、母たちがごはんをたべるようにいうけどたべることができなくなりました。

ほうくうごうに入ること出来ない。中に入るとキンギョのさんそのない時のようにいきをすることもできない。ただ一人家のこわれた外で石にこしかけて夜空をながめかなしくなつて一人でなきながら夜空を見上げてない。その内うちにきずは一日一日少しずつよくなつたように見えるが、きず口をさわることも出来ない。一ヶ月ほどして少しはなれた所

のしんせきのおばさんがなくなり、おやたちのかわりに浦上方面のはかまでいきました。おほかの石ヒのそばに男の方がふくをきて、足にゲートルをまいたかつこうでなくなっていました。あわててにげるようにそばをとおりすぎました。

私が今になってあたまがいたいのは、原ばくの時にあたまを大きなはしらやいろんなものがれきでいためたのが原因ではと思います。大学で一度あたまのけっかんがきれて毎日毎日くすりをのんでもなおらないので、いきつけの内科の先生に、いくらくすりをのんでもいたみがとれないと言った所、それはなんかおかしいというので大学の先生をしようかいて下さいました。すぐに入院しようすを見ることになり、一ヶ月後に手術してもらいました。けっかんがやぶれて血がたまり、そのため、あたまがいたいとのことでした。あたまをうったというきおくはなく、原ばくの時に家のこわれた下じきになりそのためげんいんと思います。

大学で手術をして、又二、三年した時におなじようにあたまがいたくなり、さくら町のエビス町病院にて又あたまの手術をしました。その時もちよこ一ぱいぐらいの血がたまっていたとのことです。

あたまのいたみは、それからもずーっといたいたのですが、手術をしてもこれいじょうはもうできないといわれ

てくすりにたより毎日毎日くすりづけのようになっていきます。自分はいたいと思ってもみんなの人はなんともないのでわからないと思います。

私もとしをとり、いまさらもういたいためにいたくないのでくすりにたよりにあわせてがまんしている。りょう目も白内しょうを手術してなんとかみえるようになりました。

人間はちよつとした運命でくるしんでいる人がいると言うこと、同じ所でひばくしてもどうもない人、でも私は、なん十年経ってもげんばくのおそろしさそのためにくるしんできます。

(長崎市)

戦争体験記



河邊 總子

敗戦間近の昭和二十年八月一日。長崎駅付近に在った魚市や銭座小学校近くの九電の変電所等、市内数カ所がアメリカ軍（連合国）の空襲を受けた。焼夷弾等の爆撃である。私は当時学徒動員で（県立長崎高女四年に在学中）三菱兵器製作所茂里町工場で魚雷製作の作業に従事していた。空襲警報が鳴ると避難で帰宅が許されたので銭座町に在った自宅へ避難する途中空襲に遭い慌てて銭座小学校前に掘られていた防空壕に飛び込み、じつと敵機が飛び去るのを待った。機銃掃射で機関銃弾が地面に撥ね返るのを恐怖に震え乍ら体験した。戦争映画そのものの実戦である。

家に戻ると二階の屋根に大きな穴が空き青天井で空が見える。ガラス戸は振れガラスは全部割れ落ち下足の儘家の中を歩いた。炊事するにガスは出ず七輪にコークスを燃やし乏しい食材で作った雑炊の夕食を母兄弟と私の四大家族で食べた。

翌朝（八月二日）母の決断で生命を守る為に時津村の知人

宅に私が弟と二人疎開し母と兄が銭座町自宅に残る事となった。時津村の知人宅は戦争が厳しくなり少し家財を疎開で預って貰っていた所である。身近最小限の荷をリュックに詰めて、乏しい配給の食糧の中から工面した物を、自転車に括りつけ出発した。学徒動員先の工場を欠勤する事は監督の学校教師の叱責を怖れたが、「生命を守る為」と母の勇氣に励まされ弟を連れ田舎暮らしを続けた。父は海外勤務で不在だった。（旧横浜正金銀行印仏ハノイ支店勤務）母の決断で一家無事に終戦を迎える事になった運命に感謝している。八月九日朝、疎開先時津村で農家の方々から少しずつ分けて頂いた野菜（南瓜、じゃが芋等）を母達に届けたく弟を連れ時津を出発した。疎開者に対し農家の方々は理解する人は少ない状態の世相だった。

食糧不足で材料調達の困難さはとても辛い時代だった。暑さの中重い荷物（野菜）を積んだ自転車を押し乍ら、道の尾

駅付近「打坂」の辺りで、敵機来襲に遭い道路横の溝の中に伏せた。「ピカッ」熱い熱射を受けた。七輪のカッカと燃えた熱い炎を被せられた様な熱さだった。空を見ると夏の日射しの中、ムクムクと入道雲の様な雲が盛り上がり（色は柿色の様な色）広がった。疎開先時津へ戻ろうか？自宅（長崎）へ行こうか？迷ったが長崎へ進むうち道の尾駅方面から来る人々は傷ついた姿で続いて来た。歩いて来る人は「長崎は火の海でも行かれん」と口々に話している。「直撃弾が落とされたとやろか」？等話し合っている。仕方なく時津へ戻り夜は赤く燃える長崎の空を見上げ乍ら、まんじりとも出来ぬ一夜を過した。

八月十日早朝、時津の警防団の報らせて母と兄が時津へ避難に向かっている事がわかり「ホッ」とした。やがて兄に手を引かれた母が溝鼠の様な姿で私共の許へたどり着いた。顔も舐も傷つき血まみれだった。避難の途中畠の隅にあった肥え溜め（タンポ）に足をとられ、その中に落ちた為。糞尿（汚物）臭い汚れ姿だった。早速風呂をわかし舐を洗える所だけ洗い、サッパリなった母と兄が話す避難行動は地獄そのものだった。その後時津の救護所に当てられたお寺へ、母を連れて行ったが陸軍の衛生兵の方からヨードチンキを、筆先で、一筆、二筆、塗っただけで何の手当もない有様であった。銭

座町の家で被爆した母と兄は家の大きな梁や柱の下からやっとの思いで這い出て、山伝いに浦上天主堂付近、医大グラウンド付近をさまよい鉄道線路に添い浦上川に出たそうだ。逃れる人の群れの中を必死で時津の私共の処へ辿りついたと話した。家に火の気が無かった事が幸で倒れた家の中から脱出する事が出来たのだった。

爆風で潰れた家の柱や壁にとじ込められた二人は、兄が先に這い出し母を助けたが、梁とか柱と土壁の中に下の方の位置に潰された所から、手足の自由を奪われた姿で這い出す事は、とても難しかったそうだ。家の前を逃げる人一人をやつと見つけ柱を動かす手伝（応援）を頼んだが、我が身一つ守るのが精一杯でその人の耳に届かなかつた。と話した。母も兄も持てる力を生きる為に出し尽し脱出に成功したのだった。兄の若い力と神仏のお加護を頂いたと常々語り合つた事である。私と共に行動した弟は平成七年二月に六十二歳で他界、母は平成七年八十八歳で他界。兄は平成十九年四月七十九歳で死去している。

銭座地区でも隣近所沢山の方々が被爆で死去しておられる。動員学徒の茂里町工場に勤務した学友も即死その他原爆症等で百名以上死去している。十五歳で被爆した私は唯独人家族の中で生存して残っているが戦争体験記を書き乍ら、今日の

平和な日々は、膨大な数の戦争犠牲者の方々のお蔭と
思っている。この方々のご冥福を念じ上げ乍ら、一日一日を大切に
身近の小さな事から平和を愛する強い心を精進して持ち続け
たいと思う。戦争のない世をと切に希って居る。



あの日、あの頃、そして今へ



山本 正人

昭和十七年（一九四二）国民学校高等小学校を卒業した、私は働きながら学ぶため、同市、木鉢町一丁目、林兼重工業長崎造船所（林兼商店本社下関市）に就職した。十五歳だった。時代は暗雲がたちこめていたが私は若さに満ち、希望に燃えていた。太平洋戦争の中でほかの世界を知らない、軍国少年でした。当時は多くの少年が国家のために、役に立ちたいと思っていたのである。午前八時から午後五時までが勤務時間で仕事が終わると真っすぐに、浦上の竹の久保三丁目の丘にあった。長崎市立中学校（旧制夜間中学校）は長崎県立瓊浦中学校内に間借授業を受けていた。（この学校は今はない）（現在県立長崎西高等学校）（戦前からある学校の中で今でも昔のままあるのは西高だけである）夜間中学校の雰囲気は良かった。みんな昼間働きながら勢心に勉強していた。昭和二十年八月九日、爆心地から五・〇キロメートルの本針工場の屋外作業中に（勤務中）閃光を浴びて被爆した。突然の

ごう音その時巨大な「ドカーン」という強烈な火花（光）と地響きに大きく揺れた。

いきなりの爆発音に、すぐ近くに爆弾が落ちたと思い込みすぐに身を伏せた。天と地がひっくり返ったようなほんの一瞬间の出来事でした。気がつくと爆発地の浦上上空には高く上る黒い大きなキノコ雲（黒煙）の塊がポツカリと浮かんでいた。原爆投下の翌朝からすぐに造船所の社船（良丸）で稲佐町同社林兼鉄工所（当時は軍需産業）の救援の任務を言い渡された。工場の屋上の破損復旧作業に従事した。

被爆当時、校舎があった市立中学校は、爆心地の程近く約八百五十メートルの近距離にあった。母校の校舎に駆け付けた。（市内竹の久保町）火災は免れたものの、一瞬にして、なぎ倒されて全壊していた。私が勉強した当時の教科書も、青春の記念となるものも（写真本）失われた。竹の久保町の市立中学校は「県立瓊浦中学校」（現県立長崎西高校）内に

併設校として産声を上げたという沿革がある。当時の夜中生徒は、瓊中生徒と同じ教室で、同じ先生によって学んでいた。

被爆直後に焼け野原をさまようなかに、私の担任でもあった中島弥修郎先生（主事）に偶然に会った先生から全壊した校舎の内部室で下敷になって（校内にいた）数川校長の外数名の先生方の涙ながらの死亡を知らされました。学友の友も亡くなったことを知りました。行方不明者の学生をさがしているとお話でありました。学校周辺の防空壕。正門の下り坂の防空壕と側溝面付近を中心に校外の各地を移動して中島先生と共に行方不明者（学友）を捜し回ったが生存者は発見できませんでした。一週間さがしたが、多くが亡くなっていたと思いました。私の通学路であった浦上駅近くの梁川橋踏切のあたりを歩きました。浦上川に群がる被爆者の光景はまさに地獄。正気を保つのが精いっぱいだった。「水を水を」と無数の傷ややけどを負った人たちが水を求めてさまよった、あの頃が思い出される。「原爆」は水を見るたびによみがえる。「今は冷たくてきれいな水があふれているのに……私は一滴も飲ませてあげられなかった。いつまでもこだわってしまっているのである。このような悲劇が一個の爆弾によってもたらされたことを知るのは戦後しばらくたってからであった。

戦争や原爆によって青春を奪われ、精神的にも肉体的にも

かなりのハンディを負いながら、戦後の混乱期を生き延びてきました。

戦時中から木鉢町の林兼造船所に勤めていた有田良三（昭和十六年入社、養成工）さんは終戦後も同社に勤められて工場長という役職で定年を迎えていました。平成十年長崎原爆の日頃、被爆者健康手帳の申請に必要な証人になってほしいとの電話がかかり被爆から五十年ぶりに再会する事になりました。五十数年分の実感できる懐かしい香りまでする多くの思い出、身の上話から語り始めました。現今では給任という職業は見当たらないようですが有田良三さんの弟である（有田良吾と植村浜田）（長崎県の西部に位置する現西海町出身）の三人の学友は市立中学校（今はこの学校はない）の専属（給任）のような立場で任えさせていたように記憶しておりましたので在学時代（三人の学友）からの話から始まりました。被爆翌日、同市竹の久保町の母校、市立中学校に駆け付けて（一週間過ぎても）毎日捜し回ったが三人の学友とは会えなかったと、口惜しい思い出が心に残っているとの話は私はしました。

爆死者や行方不明者の消息や情報を得ることなく確認も確実には掌握されておらず残念であると再度の話をしました。ところがです、「こんな現実があったのか」と驚いた。私が

連日捜した学校正門に連なる坂道を下り、土手に掘られた、横穴式の防空壕へと避難していた三人の学友は、早目の昼食を食べ早くからその壕の中で教科書（勉強）の話に花を咲かせていました。

かすかに爆音が聞こえてきたようで東の方の空を眺めたらキラキラ光る物体が目につき、その一瞬に（原子爆弾投下）壕の中深へと避難をしました。今では、想像し難いことかも知れませんが当時は極めて当たり前の光景でした。学友の三人が生存して生きていることを偶然に発見したのは、有田良三さん自身であり、ご本人からのお話で初めて、知りました。弟の（良吾）を何が何やらわからないままに探し求めているのである。それにしても、爆心地より九〇〇メートルの被爆という事実とその過酷な体験を経ても、なお生き続けた学友たちの生命力に圧倒される。

偶然と呼ぶには、あまりにも過酷な偶然に今として言えることは夜学生としての生き方を見習って、困難に負けず自分の持っている生命力を最大限に引き出した生き方があった思いが残る。終戦後、弟の有田良吾さんは、大学事務官（職員）として、社会人としてのスタートを切ったが勤めてから十年目過ぎた頃に変な出来事が生じました。闘病生活空しく他界したのです。包容力と温かい思いやりがある弟有

田良吾さんの話中には、時折涙ぐむ有田良三さんを見ているに私も大粒の雨となりました。目頭をハンカチで押さえて、改めて、ご冥福を祈ります。植村・浜田のお二人は教職員資格を取得して教員となり教職生活を大過なく終えて定年を迎えました。平成十三年元旦迎春の年賀状には、ご無沙汰しておりますがいかがお過ごしでしょうか。旧年中はなにかとお心遣いをいただきありがとうございました。年を取ったせいだろうか、何歳になってもあの日の青春時代のあの頃を思い出して、若い頃にもどりたいです。気ままに生きたいです。ゆつくりとお会いしたいですねと年賀状をいただいたのが平成十四年以來の年賀状も電話も手紙も全く届かなくなりました。平成十三年で最後の便りとなりました。この世の人ではなくなりました。

原爆の痛みを乗り越え（復活して）時をこえて生き続けるあの頃の勇姿を六十五年前の記憶が改めて刻みつけた。被爆から六十数年、激動の昭和も過ぎて、時代がすっかり変わり、経験のまったく異なる幾つかの世代が生まれていることを考えた。同時にすでに人生の峠を越えようとしている被爆者の年齢のことを思い、その苦闘のあとを継ぐための対応が急がれることを思った。戦争を知らない若い世代に原爆被爆の実相を伝えることは、難しい。私にとっては、戦時は少年時代

と重なることもあり、自分なりに戦争や原爆を語る言葉を持つていたが、伝えたいこと、それが伝わってゆくこととの間にかなりの距離があることに気付き、そしてこれまでの原爆を語るとき、身近な所にある、資料に頼るだけで多面的な取り組みによる努力を怠っていた自分を叱った。私たちが共有する長崎の原爆体験を子や孫たちに伝え戦争の悲惨さ、特に核兵器の人類にもたらす、影響や脅威について広く世の人々に訴えていこうというのがそのねらいでした。

同期の学友の戦死であり、原爆死なのであります。

業半ばにして、あたら若き命を奪われた同窓学友の原爆犠牲者に対しその無念さを偲びながらここに鎮魂のことばを捧げる。あの日、あの頃、そして今へ（思い出すままに）手帳友の会四十周年記念に寄せて。

あの頃、あれから、 これからとの声を聞き

半世記の歩み

題名に「あの頃―あれから―これからとの声を聞き―半世記の歩み」としましたが、今から六十五年以上のことで、しかも戦前から、戦中から終戦直後にかけての時期でもあり、社会も環境も今とは全く違う時代のことであって、現在の人々には、想像も理解もしにくいかも知れませんが、私達が育ってきた時代は、確かにそういう時代でもあったので、誇張も卑下もせず、現在までありのまま、姿を披露します。

さて、最近になって捨て難い思いも募り、書齋を整理中に、その奥にしまっておいた古い数冊の出版図書を取り出してみると、あの頃に逆戻りさせられたが、その中に日夜声なき被爆者と対話をし、がんや白血病など原爆症の重症のまひで落ち込み、後遺症が残るか、健康不安がうごめく恐慌の海に船の舵をとる。（その航海の軌跡をたどる。）

被爆者手帳友の会、出版―空白の二十時間―原爆被爆惨状絵図の全容。「原爆記」が記すものは、一つの学校がくぐりぬけた、戦争の暦である。

召集令状で出征していく学生、学徒動員で過ごす勤勞奉仕の学生たち、勤勞動員で学業の本業から離れて軍需工場などでフルに働く学生たち、女子勤勞挺身隊は、ともに事実上強制労働だった。戦争の激化で労働者の多くが徴兵され、足りなかつた労働力を学生学徒で補う学生たちになかなる明け暮れがあつたか、そこに戦時下の生活史が集大成される。

そして、原爆が惹き起こした劫火の惨禍、竹の久保町の校舎（現県立西高等学校）で三菱兵器製作所大橋工場長崎商業報国隊（現長崎大学文教部キャンパス）で三菱造船所幸町工場、三菱造船所の養成工の一人のものの夜学生としての学友の会で、教師と夜学生とが体験した、生涯忘れることのない凄惨このうえない原爆の実態がつぶさに記されている。

昭和十八年の学徒戦時動員体制確立要綱などに従って軍需工場などに動員された学生、学徒は約三百五十万人、女子勤勞挺身隊は五十万人にのぼつた。原爆犠牲者を含めた動員学徒の死亡者は、一万人を超すと推定されている。（国家総動員法時代の証言者による）

「原爆の「記憶」今も消えず。」

「原爆記」を今に伝えるものは、三菱造船所殉職者のうち、養成工の一人のものの出会いは、厳しかった戦時下の夜学生生活であつたが、先生の講義を少しでも聞きもらさぬように努

めた。授業開始ギリギリに教室に飛び込み、通勤通学しているなかに、学生用の配給のパン、節分の豆を半分ずつわけ合つて食べたことも何回もありました。「青春人生」常に可能性へ挑戦し続ける在学中に「奇妙な感かくを覚えてる。」危機感を持つ危うさを抱え原爆投下で、やがてかなしい別れとなりました。（爆死はその後に知りました）

青春の記念となる教科書も食糧もあらゆる物資も失う状態になりつつあるとき、日本は八月十五日で終戦となつた。そして、戦後の荒廃から立ち上がる日本のすさまじいまでの気力、体力、努力を振り返つて戦時の夜学生の生活ぶりに、学んだどん底から立ち上がる気力を養つてくれた貴重な軌跡をたどりながら、六十数年前を回想する時にいまは懐かしく思い出されます。

心身にも暗い悲惨な記憶「原爆記」今六十数年前の悲劇を思い浮かべるのは難しい。昭和二十年八月九日、爆心地の南約一キロにあつた旧国鉄浦上駅の駅舎は、原爆の爆風と熱線で焼き尽くされた。軍需工場の最寄り駅として賑わつた駅舎は跡形もなくなり、コンクリートのホームと鉄軌道だけが残つた。長崎原爆戦災誌によると、駅にいた国鉄職員約七十人と、女子挺身隊約十五人のほとんどが即死か数日後に死亡

したという。浦上駅勤務の国鉄職員のなかには、勤労働員で働きながら夜学に学ぶ一人のもの「学友」としての出会いとともに大変な存在感でした学友の爆死は戦後、その後には知らされました。

入学して間もない頃、お会いしたばかりなのに悲しく信じられない思いでした。

「原爆記」を今に伝えるものは、駅舎脇に国鉄労組が建立した「国鉄原爆死没者慰霊碑」だけだ。戦後建て替えられた浦上駅通りの浦上川沿いに位置していた三菱製綱所右面側の梁川橋踏切を歩いた。

その折、警報機が鳴って、しゃ断機が降り始めていたので一時停止線側にそのまま立っていた。戦時下のこの踏切は私の通学路でした。

この踏切に立っていた場所に立ったとき「物音一つ、動く物一つない、真空管の中にいるようだった」この踏切では、軍需用品と思われる品を列車に積込作業のため、道路は封鎖され、待ち時間がながくて学校の始業時間（六時から）を気にかけながら学校まで走り急がねばならなかった。

生徒はみんな遅刻するも、先生はひとりで待っていたのである。学校も休む気にはならなかった。お心のこもった配慮をいただきました。先生とお話するときは、いつも畏敬の念

をひしひしと感じておりました。

いろいろな苦勞を乗り越えてこられた方と感じさせる、大きな包容力で尊敬すべき広い心の持ち主でした。原爆で先生が逝去されたことを知らされたときは、我が身を疑い絶句しました。最愛の奥様とともにどうか安らかにお眠りください。合掌。

踏切の向こう側の三菱製綱所は、軍の統制のもとで軍需生産を行っていた。原爆投下により工場としての機能は失われた。工場の被害とともに動員生徒及び教官、女子挺身隊養成工等々の人的にも大きな被害を受けた殉職者従業員の中かの一人のもの「学友」としての出会いがありました。戦時下の梁川橋踏切。浦上駅は狂気の中にあった。私の脳裏から、「あの時の記憶が消えることはない。」

（震災殉職者1406人）（長崎原爆戦災誌による）。

長崎県被爆者手帳友の会（会長井原東洋一）は創立四十周年を迎える。

昭和三十二年発足した。動員学徒犠牲者の会が主体となつて、手帳友の会（昭和四十二年六月）が創立された。敗戦の焦土からただ一人被爆の援護救済の戦いを使命として開始された。常に団結だ、常に前進だ、走り続けてきた、その連続

が手帳友の会の歴史だった。大きな役割を果たした友の会の歴史をふりかえるには、まず深堀前会長の被爆状況からのべねばならない。あの時―それは、昭和二十年八月九日十一時二分長崎原爆から数十時間後の出来事でした。さて、原爆被爆惨状絵図（第三十九号）「原爆記」が語るものは、原爆にうたれ苦しむ人たちの揺るがぬ証言である。

被爆者の脳りにやきついている、あの光景を絵画にした記録集である。被爆直後の数時間の被爆負傷の状況、絵画と作成者。詳しい資料にまとめられたものである。さらに学徒としての日記、手紙、体験記が迫真の絵図で紹介されているのも特筆に値する。彼は、八月九日の朝七時すぎにいつものように市内本原町の家を出た。動員学徒として働いていた三菱兵器大橋工場に向かった。自宅から工場まではわずか六百メートルである。原爆投下により（被爆地点一三七六メートル）工場を出てここを逃げねばと体をおこしてふらつく足で建物の外に向かったのはほとんど本能的だった。

全身に負傷して、三步進んでは倒れ、五歩進んでは倒れながら線路を越えて西町の防空壕に向かった。現場から出てからついたのは十一時四十分頃でした。職場からわずか四百メートルの防空壕までいかに難航したかがわかる。そこに、怪我人と急病人を優先的に救援列車で病院に運ぶことになっ

たという情報が伝わってきたのである。強烈な後遺症に悩まされた前会長は、線路端にかけつけるべく体をおこしにかかったが立ちあがれない。無理もない、道すらさだかではなく、なくなった焼け跡を行くのである。座りこんで身動きできなくなった。そのときそこを二人の朝鮮半島出身者が通りかかった。なかば諦めながら、線路端まで連れていってもらえぬかと頼んだのである。彼等は、即座に応じてどこからかリヤカーを調達してきてここに乗れという。かくて難なく線路端に着いた。たどりつくことで精一杯だった。思えばこの時の二人が命の恩人である。結局戦後の人生を決めた、友の会の源泉ともなった。救援列車が動き出したのは夕方七時ごろであった。列車に乗り込んでからわかったのは、同じ職場で働いていた奄美の挺身隊員も列車にうずくまっていた。互いに気はついたが目で挨拶を交わすが、上着からもんぺの腰の辺りまで血をにじませてうずくまっていた。原爆投下からの夜、八時から十二時までの間に救援列車に収用されて大村海軍病院に入院した。被爆者総数（七百五十八人）であった。

（長崎原爆の記録による）

リヤカーでの出会いの瞬間をそっと控え目に刻み込む語る言葉に耳を傾ける。在日朝鮮人二人の助けをかりてもらわなければ「出血多量」で死んでいたろうと、して世界の人々と、

ともに平和への思いを新たにし平和への祈念を分かちあう（神様より）この運動をするように生き残されているとの思い、この運動を終生続けたいと思っています。その内容からは私心を捨てて友の会の仕事に賭けている姿勢が伝わってくる。

私は朝鮮人に助けられたが、口くせで二人の朝鮮人の行動、かけがえのない存在意義、その背中を追い続けての報恩の思いを胸に戦後を生き抜いた慈しらしさぶりがうかがえる。くる日もくる日も原爆に向きあっている神秘的な能力のある人でした。一年数カ月の歳月をかけて実行絵図の体験を綴った、そして援護業務、救済対策という一点での正確な綴りを知ることができました。それが現場の声が「源泉とされた絵画」「朝鮮人二人の「リヤカーの役割」の行動が橋渡役となり情報となり、物心両面での「日韓友好」への思いを回帰させるにふさわしい「象徴」だと考えることは、日本は戦争のない六十余年を享受することができましたが、戦争体験、被爆体験をもつ人々が老齢化し亡くなっていくなかで、現代は核兵器廃絶ができるかと、どうかの分岐点にある。絵図の全容を読み下し死生観、輪廻、転生が明確に示されている。「まさか」の生き方に差がつく「知的」生きかたを読み解きました。二人が寄り添うリヤカーを無台に人情が交差する、リヤカー

という役務（提供）の援助で歴史（友の会）と個性が輝く交流が世界の人々と深めながら新たな環境で国際化へと発展して、方向性を定めて、今こそ「平和の文化」を創出の取り組みを進めていくことは、日本にとって最大の悲劇であった原爆被爆都市の使命として、広島長崎の被爆体験が世界化される。世界の人々のものになることを意味しています。長い闘病生活原爆症のなかで一年数カ月の歳月をかけて原爆に向きあって実行した名著「被爆惨状絵図の全容」には、昭和から平成にかけての時代の転換期の今日に新たな道筋を指し示している。きわめて貴重な時代の証言である。あの激動の日々を被爆者がどう生き抜いたかを、その心情とともに詳しく伝え、感動を誘う場面も多い。戦争を生身で経験した被爆者らが言葉にしきれなかったこと、伝えたかった思い、そして人生そのものがこの絵図集にはつまっているのだ。在日朝鮮人二人との出会いのその恩義に報いるべく瞬間を繊細に、真摯に、そつと控え目に刻み込む言葉に耳を傾ける。再会を喜び合う二人の朝鮮人の姿はなかったが存在感を増した。被爆者の援護に日本人も韓国人もないとして多くの韓国人被爆者の支援を続ける。友の会の活動方針は原爆の悲惨さを多くの人に訴えました。昭和五十六年十二月に日韓政府間の合意によって来日治療がはじまり延べ五年の間に長崎市、広島市の

両原爆病院で三百四十九人の韓国人が治療を受けました。昭和六十一年には打ち切りました。(五年間という合意) 日本政府としては韓国からの来日被爆者に相当の待遇を心かけている。韓国から来た被爆者と交流が盛んになっています。文化スポーツ交流など事業が始った。これを機に両国……友好関係を深めていきたい。平和十四年「第一回韓日平和交流功績賞」の受賞できたことは国際的交流を促進するなど両国の橋渡し役を果たした。

在外被爆者は六十三年間、援護で差別されている。韓国の被爆者にももっと気を配ってほしい。対話で解決してほしい、原点に戻った考えに援護の手を一步一步進める事である。原爆は決して忘れてはいけない記憶が焼き付けられています。

大島紬の里、奄美に埋もれていた奄美の原爆乙女「原爆記」が伝えるものは、原爆による劫火の悲惨さだけではない。

「今のままではだめ」被爆者の声を傾け国と交渉する、被爆者の代弁者としてその救済にかけた被爆者手帳友の会役員の日二間にわたった友の会調査団は、参集者(百四十人)の大半は被爆者手帳の存在さえも知らず、その場で七十名ほどが取得申請を希望した。かくて奄美の被爆者には直接被爆地の長崎より二十七年も後れて、対策が講じられることになったのである。戦後二十九年も経て、被爆の後遺症に老化

現象の重なりはじめている被爆者を掘り起こすことは時代の急務と思うと……できるかぎりの相談に乗ることを約した。

広島とも長崎とも無縁の奄美大島に、被爆者の群がいまなお身をかくすようにして住んでいるという事実、なぜこの離島に被爆者がいるかという、六十数年前昭和十九年度に入るとすぐに、大島紬を織っていた島の娘たちが大島女子挺身隊として各方面におくられたが、長崎にいたのは推定二百人で、その二百人が即死し、残りの千人のうち半数が島に帰ったと見当をつけて、その後の死亡者を指し引いたとしても、郡内には四百人前後の原爆乙女が埋もれているはずだったという。これまでに掘り起こされた原爆乙女の数はざっと百三十人とされる。爆心地から(一・三キロ)の三菱兵器大橋工場の女子挺身隊のうち、生き残ったのは二人だけであった。(原爆投下の当日に同期のうち三十二人が亡くなりました。)

四十年間埋もれた奄美の原爆乙女の掘り起こしを促進し、いち早くその手続きや対策についてコーチしてくれたのは、国でも県でもなく長崎の民間団体に過ぎない友の会であった。組織もなく知識にもとほしい奄美の被爆者としては、友の会を頼るしかない、ことなどを、物静かに語る被爆者の言葉は、淡々としているだけに、人々の胸を打ち、奄美の原爆乙女の

存在をはじめて知った友の会の支部長会議での報告で、彼女たちが被爆者に手帳が与えられて、それなりの手当や特典を得ることができたのを知ったのは、原爆後四十年過ぎた頃である。(昭和六十年頃であった)手帳の存在を知ったのである。原爆病院に緊急入院した被爆者の体内には、右脇腹に手づかめるほどのガラスが入っているのを承知しながら、戦後を苦痛に耐えてきた緊急入院の要するかつての挺身隊を呼びよせ、その結果(四人は)原爆病院で手術を受けて特別手当の受給対象に認定された。胸から腹部にかけて一面にケロイドが残っていたのである。

従来、原爆病院に入院して精密検査を受けるには、原則として病院側との十分な打ち合わせを終えた上で、可否が決定されることになっている。突然思い立ってすぐ入院が許可されたのは異例であり、これは「戦後処理」のおくれた奄美に、同情の念を惜しまない深堀前会長の鶴の一声で決まったと聞かれています。悲しげだった奄美の原爆乙女の皆さんの表情が明るくなった。団結力を大切にして、安全で安心して暮らせる奄美に生まれ変わった。長崎で培った経験を生かし古里のために貢献したい。前向きな姿勢を見せたという。

奄美の娘たちが女子挺身隊として原子爆弾に竹槍で交抗して勝ち目のなかった八月九日のあの原爆の投下より奄美群島

は、本土から行政的に切り離して占領されていた。奄美が日本に復帰したのは、昭和二十八年十二月二十五日であった。原爆投下によって吹きとばされたその体に食い込んだガラスの破片を最近になって摘出した奄美の原爆乙女たちは、初老期にさしかかってはじめて、遅すぎた被爆者手帳の存在を知り取得したのである。その体からガラスの破片を摘出していい。

戦後から四十年間にわたって厳しい暮らしのなかに埋もれていた被爆者の掘り起こしが遅すぎたと、こんなところにも戦後史の欠落した「原爆記」一頁があったことに、被爆者の年齢のことを思い、その苦闘のあとを継ぐための対応が急がれることを思った。

戦争、子どもたちに語り継ぐ「原爆記」が伝えるものは、原爆による劫火の悲惨さだけではない。戦争を体験した我々世代が戦争を知らない世代に戦争の悲惨さと命の大切さ、平和の「尊さを語り継ぐ」という活動の基本方針は、まず戦争体験者同士が話し合うのでなく戦争体験の無い若い世代に語り継ぐこと、二番目が他人から聞いた話や本で読んだ話でなく実際に自分が体験したことを話すこと。そして三番目が体験を通じて戦争の悲惨さ、命の尊さ、平和の大切さを教えることです。市内の公立小中学校では、八月九日の登校日に合

わけて、平和の願を発表したり、平和の集会などが行われています。学校の先生方からお話を聞きました。果して今の小学生、中学生が私たちの話をよく聞いてくれるかと心配していましたが、実際にはおとなしく、礼儀正しく真剣に聞いてくれました。我々は先入観を正しました。いずれも戦争をなくすことを真剣に考えていることに感動しました。この純真な子どもたちが大人になった時には、戦争のない平和が世界に訪れるとして子どもたちへ継承を祈ります。毎月九日（反核の九日）月例慰霊祭は犠牲者の冥福をお祈りする。長崎の鐘が建立された原爆公園で執り行われている。平和への誓いを新たに祈り活動を続けている「友の会」その足跡は、さまざまな形で残されて今も語り継がれている。

「学友の遺志を継ぐ何歳になっても勉強を」

「昼働き、夜学ぶ人生だった」卒業証書を手にしみじみ振り返った。

少年期、青年期は戦争中で生きるのがやっとの時代。それだけに勉強への思いは強かった。勤労学生だった十八歳のとき長崎市木鉢町の工場で被爆。翌日、同市竹の久保町の市立中学校（旧制夜間中学）に駆け付け学友たちを捜し廻ったが、多くが亡くなっていた。今でも毎年八月九日には、配給のバ

ンを分け合って将来の夢を語り合った学友を思い、浦上川にそっと花束とパンを流し続けている。戦後は地元の銀行に就職、高度成長期、夜は銀行業務についての勉強を重ねながら無我夢中で働いた。「志半ばで亡くなった友の遺志を継ぎたい」との思いが定年をすぎて強くなった。大学進学を決意して、受験資格に必要な新制高校卒業資格取得のため、旧制中学卒業資格に加え長崎市立高校（定時制）編入、卒業しての入学だった。一年間勉強して長崎大学商科短期大学部経済専攻（在学年現三年制）に合格した。

平成四年四月入学して、銀行の関連会社で働きながら夕方から講義を受け、帰宅してからも夜中一時も二時まで予習、三年間、一日も休まなかった。

二十代から六十代まで世代の違う八人がそろったゼミナールでは「高齢者雇用」を若者に交じって教授の「社会人としての心構え」の説教を聞いたこともある。平成七年三月十一日晴れの卒業式を迎えた。六十七歳だった。

「戦後から現在までの経済までの経済が勉強できてよかった。岩戸景気、神武景気：無我夢中で仕事をしてきた日本の復興期を、学問として振り返ることができた」「生涯学習が基本。日本の繁栄の影には高度な教育がある。何歳になっても勉強しないと時代に遅れてしまう」が持論となった。世は

まさに生涯学習時代。「壮にして学べば すなわち老いて衰えず 老いて学べばすなわち死して朽ちず」含蓄を味わうに値する言葉である。

「老いても今なお輝く商短の思い出」

私は現在、満八十一歳である。夜間大学を了してから満十四年を経過した。歳月が流れている。つい最近だったように見えるが考えて見れば遥かな歳月が流れている。半生紀近く経っているのに実感としてそう遠くない感じがして、その当時の懐かしい思い出が浮かんで来る。目を閉じれば最近の出来事のように先生方及び友達の顔が浮かび、何か活力が湧いて来るようである。

地区の老人会や長崎市リサイクル推進員として伴わせて町内会、公園トイレ清掃等諸行事への参加等、忙しい毎月がちよっとした空き時間を有効に生かして私の生きがいである健康保持の一助にもなっています。

平成二十年四月三十日

(長崎市)



一瞬にして命が絶たれた日



吉田 ハルヲ

平成十九年の夏で、六十三回目の八月九日を迎え、又過ぎ去っていきました。

昭和二十年八月九日十一時二分、八月六日の広島について、長崎に原子爆弾が落とされました。

原爆の破壊力はすさまじく、広島では三十二万人が被爆し十二万人が亡くなりました。

長崎では二十七万人が被爆し七万四千人が亡くなりました。当時私十歳で小学四年生でした。ジリジリと照りつける陽ざしをさけて庭で友達と遊んでました。

十一時二分、頭上で真昼なものもつと明るい閃光が走りました。もう何が何だか分からず、急いで家に帰りました。私の家は立山なので、爆地より二・四キロ離れていましたが、玄関の戸が倒れ、ガラスは割れ畳は持上がり、家も傾きました。

すり鉢の底にある長崎の市街地は火に包まれ、ガス会社の

タンクが大音響と共に爆発、街は大きな炎と真つ黒な煙とおわれしました。

焼け出された人、火傷をした人、怪我をした人が立山の坂を逃げてきました。

ボロボロになった服、丁度わかめがぶら下がっているように見えたその姿は、実は熱で溶けた皮膚がぶら下がっているのです。

親にはぐれたのでしょうか、幼い子どもがはだしのまま大人についていきました。

「水、水を下さい。」母が水を飲ませ食べ物を分けました。私たち家族は家の中に居ることも出来ず、木の下で蚊にさされながら寝ました。

夜になると焼け跡から立ち上がるいくつもの火とすごい臭い死体を積み上げて焼いているのです。

それが毎晩、毎晩、繰り返されました。

十一時二分を指したままの柱時計、原爆が落ちたその瞬間から、人々の営みと命が絶えたという事実の重さに、六十三年たった今も身震いする思いがします。

「ひとつの命が地球より重い。」このことを私の信条とし、いつかは、被爆者が一人も居なくなっていくきます。生きた人でも多くの人に、自分の体験を語っていきたい思いがします。

(長崎市)



鮮明に残るあの時の光景



永田 マツエ

昭和二十年八月九日、いつもの朝と変わりなく、皆で朝食を済ませ、それぞれ出掛けて行きました。今日も朝から日が照りセミがジージーと鳴いている。きょうちくどうの花

が真つ赤に咲いていました。家族は城山で被爆し、私は十九歳で本博多局で被爆しました。原爆が落ちる、どのくらい前でしようか。眠たくて、目を開けることができませんでした。その時、アツというまにガラスの破片が目の下に刺さり、血だらけになり、自分一人が怪我をしたのだろうと思いい外へ出ると、太陽は真つ赤に焼け此の世の終わりかと思うほどでした。

それから、どこをどうさまよったか覚えていません。新興善小学校で顔のガラスを取ってもらい、県庁の焼け落ちる音を耳にしなが、立山を通り大橋へ、行き交う人は爆風で手が吹き飛び、目玉が飛び出し、身体は焼けただれ、着物はポロポロに垂れ下がり此の世の生き地獄でした。水を水を水を

求めて、途中で生き絶えていく人、私も死体の横を通り、大橋へ出ると川には馬や人の死体で一杯でした。油木の商業の前は火の海で、どうして通って行ったか覚えていません。

その日は日が暮れて、家に帰る事ができませんでした。畑の溝の中で一夜を明かし八月十日、家に帰ってみると、母は全身火傷で髪の毛は焼け、目はつぶれ、又手の皮が、肘から逆さまにぼろぎれのように垂れ下がり、着物は吹き飛びほとんど身に付けて無い状態でした。

家にたどり付き土の上に横たわって居ました。後で聞くと、八月九日朝から母と姉と妹と三人で墓参りに行き、母と姉は帰りに田んぼの草取りに、妹は報国隊に行く為一足先に、家に帰り着いた途端、被爆、母は子供の事を心配しながら、人にはかわいがられ、又良くしていけよと、後の事を心配しながら、八月十一日に死んで行きました。

何日か経って姉を父と捜しにいきました。腹が太鼓のよう

にふくれ、身体はにえ、田んぼの中で死んで居ました。ずると引き寄、父と二人で気が狂いそうな気持ちで焼きました。田んぼの水はお湯のように湧いていました。又そばの池には、水を飲みに行つたまま、生き絶えて逆さまに長い髪の毛が水に浮いていました。父は毎日死体の後片付けです。生き残つた人も今日一人又一人と死んで行きました。今度は私死ぬんだらうかと思うと恐ろしい。末の妹は傷一つなく元気でしたが九月十二日死にました。又一人の妹は髪の毛が抜け鼻血が止まりません。又従姉妹は爆風で飛ばされ、太陽にジリジリと照り付けられ、ウジ虫がボロボロとこぼれ落ちていました。そばには一本の木もなく影一つありません。

だいぶん断つてから丸たんぼうを石垣に差し込みあばらやを作りました。それまでは毎晩土の上にゴロ寝でした。米の中のガラスの破片を一つ一つ取り除きそれを食べました。こまば町に醤油会社があり、皆それを汲みに行きました。今思うと醤油だるの中には爆風で吹き飛び人が死んでいたかも分かります。

私も間もなく高熱が出父にリヤカーで松山を通り馬町の病院まで道の瓦や材木を退けながら連れて行ってもらいました。それから三ヶ月余り寝込みました。

こまば町は飛行場に早変わり、そばには背が高いアメリカ

兵が銃を持って立っていました。そばを通る度に恐ろしい思いで通りました。山の火は消える事無く、燃えては消え、晩は闇夜で雨がよく降っていました。何年経っても魚を焼く匂いと、死体を焼く匂いが鼻に付き、食べる事ができませんでした。

あれから何十年経つた今でもあの時の姿が目焼き付き苦しんで苦しんで死んで行つた光景は一生忘れられる事はできません。相馬灯のように浮かんで来ます。核の無い、平和な世界が一日も早く来ますように祈ります。

原爆体験記二題

ビクともしなかったガラス片

八月九日、朝、「おはようございます。」の外の挨拶あいさつの声を聞いて、私は、外に出て、お隣となりと、近所の二人のお姉さんに、「行つてらっしゃい。」と、手を振ふつて、後ろ姿を見送りました。私は、家の中に入り、朝ご飯を食まべました。お姉さん達は、竹の久保の「兵器工場」に行くのです。年は、十六、七歳位で、私は、八歳の時の事です。家は、大浦日の出町二丁目の高い所で、六軒長家に、おばあさんと満州から引きあげて来た、おばさんと私の三人で住んでいました。隣のお姉さんの一人は、小川礼子さんと言つて、私は、休みの時に編物を教えてもらつたり、いろんな話をして、遊んでもらつて、本当のお姉さんの様でした。

山手の町内の防空壕に、警戒警報で入り、解除が出たりした時、爆音で、空を見ると、飛行機が低く飛んで、太陽の光に反射して、キラキラ光つて、「きれいだなあ」と思つて、

時々、見ていました。

十時頃、警戒解除になつて、町内の防空壕から出て、家に帰り、おばさんが、お昼の支度をしていたので、家の横の畑にある、高溝の上にあるペランダで、私の宝物にしている、着せ替え人形を、木のりんご箱を出して、上に並べて、一人で遊んでいました。その時、ピカツと光り、ドーンと大きな音と、地響じびきがして、爆風で飛ばされて、気づいた時、私は、ペランダの下の溝の水の中に、濡ぬれて、立っていました。回りを見ると、りんご箱や、大事にしていた人形が、グチャグチャに、水浸しになつて、何枚か、拾つてみたけど、ポロポロになつて、だめでした。悲しくなつて、涙を手で拭いてたら、頭から、血が流れていたもので、ビククリして、這はい上つて、家の中に入ったら、ふすまや、障子や、扉が、跳とんだり、倒れたりして、家の中が、何もなくなっていました。おばあさんが、私を見て、「大きいコブができたね。」と言つて、洗



小嶋 美智代

面器に水を入れて、タオルで冷やして、手当をしてくれて、しばらく寝ていました。昼ご飯に、ヒチリンにかけていた、ナベが、板張りいたばりに、ひっくりかえって、野菜類が、飛び散っていました。それを、おばさんが、拾い集めて、雑炊ぞうすいに炊き直して、三人で食べました。

しばらくして、町の班長さんが、メガホンで、「浦上に原爆ばくが落ちた。」と叫びながら、階段を駆け上ってきました。それから、外に出ていた人達が、集って、色々話をしていました。

三、四日してか、町内の人達五、六人と、二人の姉さんの家族が集って「兵器工場」に行つて、黒こげになった、死んだ人の中を捜さがしまわつて、大変だったそうです。その中から偶然ぐうぜんに、うつ伏せの死んだ人を抱き起こしたら、胸の名札に、「小川礼子」とついてあつて、家族の人は、「見つかつて、よかつた。」と言っていました。もう一人のお姉さんは、十日経つた頃、五、六人の男の人達が、ここの長屋を調べて、連れて来てくれました。町内の人達が集つて、お姉さんを囲かこんで、私もかけ寄つて見て、ビックリして、身震みふるいしました。頭から全身に、大小のガラスのカケラが沢山たくさん突きささつていて、髪の毛は焦こげて、チリチリなつて、なくなつていて、着物い物は、ビリビリに裂け焦こがれて、下がっていました。痛いたそう

で、私は、夢中で、後ろの腰こしにささっている、大きいガラス片を力いっぱい引いてみたけど、ビクともしないで、体にくいこんでいました。かわいそうでした。お姉さんは、何だか解らない事を言つて、ポーとしていました。そして、三ヶ月たつて、忌いくなりました。

戦争は、絶対にはいけません。原爆で亡くなられた人達の冥福めいふくと、家の先祖代々と子供や孫達の健康に、手を合わせる、私です。

六十八歳の昔話

八月八日、私とおばあちゃんとおばさんの三人は、浦上天主堂の前の道を、山手の方に登つて、親戚の家に、タオル、石ケン、着物を何枚か持つて、買い出しに行きました。家いで出来た、イモ、カボチャ、フダンソウや、ネギ他、色々分けてもらつて、昼に、イモの蒸したのをごちそうになりました。色々話をして、遊んでから、野菜を分けて、リュックに入れたり、手さげに入れて、提ひげて帰りました。

次の日、原爆ばくが落ちた事を聞いて、そのおばさん達が死んでしまつて、食べ物いを分けてもらえなくなつたと、おばあちゃんが話していました。私達三人は、がっかりして、昨日の事を、思い出していました。

その当時、住んでいた、大浦日ノ出町二丁目は、山手の方で、八歳の私は、配給の為に階段を上ったり、下ったり、一日中、何回もお使いに行きました。

米の通帳を持って、米屋さんに並んでいたら、先に並んだ人が、今日は何の配給だよと教えあって、待っていました。日本米は一ヶ月に、二、三日分しかもらえなかった。外米、麦、粟、トウモロコシ、カンパン、イモノ粉、メリケン粉、青大豆のつぶしたのとか、その日によって、何があるかわからないのです。私は、青大豆のつぶしたのを食べると、いつも、下していたので、大きらいでした。

野菜の配給もありました。町内の組長さん達が、当番で二、三人出て、野菜を人数分に山盛りにして、切り分けしてもらっていました。その野菜の色が悪く、大根、サツマイモ、里イモ、カボチャは、大きくなりすぎて、筋がたつて、ガジガジしていました。

家にある野菜に、少しの米か、麦、粟とかと、山に行つて、ハギナ、ノビル、カボチャの茎とか、食べれるものは、何でも入れて、雑炊をつくつて、食べつないで、生きていました。食糧難で、みんな、大変でした。今は、もったいなくて、幸せに思います。時代の流れでしょうね。

国民学校では、昼ごはんの時、みんな、麦ごはん、イモ

を入れたり、粟ごはん、カボチャを入れたりした、弁当を持って行きました。一人だけ、いつも、白いごはんを持ってくる、お友達がいました。家は、お医者さんの子でした。一回でもいいから、白いごはんを、食べてみたいなああと、思いながら、自分の、お弁当のフタを、横に立てて、隠しながら、食べていました。その時の事は、絶対に、忘れる事は出来ません。今と、丸反対ですね。

死と、生きる事が、紙一重で、大変だったなああと、思い出して、平和に感謝して、手を合わせる、六十八歳の昔話です。

少女の遺体

毎年、原爆忌のサイレンが澄み渡った空に響くのを聞くと、その瞬間に心をよぎるのは、あの日に見た少女の遺体である。広島市内で被爆した少女の遺体がどのような経過で、大阪の赤十字病院に運ばれて来たのかは知る由もないが、たしか一九四五年八月十六日昼食後、放送を通じて生徒は直ちに解剖室へ集合するようにとの連絡があり、駆けつける。

初めて入った解剖室は、灰色がかったコンクリートの床で、中央に固定されたベッドがあり、その周囲は動き易いようにかなり広いスペースがとられていた。見学者からよく見えるように階段式になっており、数十名は座れる椅子が用意されている。

すでにベッドの上には白布で覆われた遺体が安置されていた。やがて教授が改まった声で、只今より解剖を始めるが、この方は広島市内に投下された原子爆弾による至近距離での爆死である。今までに日本では一度もこのような遺体の解剖



末次昌子

はなく、臓器などにどのような影響を受けているかをよく見ておくようにとの前置きののち、遺体に対し「黙禱」と大きく言って頭を垂れて合掌された。それに倣い助手や生徒も長い祈りを捧げ、それが終わると助手が遺体の白布をさつと取り除いた。

一瞬遺体に目をやった時の驚き……。体のどこにも傷はなく、まるで眠っているような少女の表情だった。やがて透き通るような白い肌に、何のためらいもなくメスがさつと走った。生まれて初めて見る解剖、しかも原子爆弾によるいたいけな少女の死、何とも言いようのない思いが心の中にいつぱい広がった。

ここで話はさかのぼるが、一九四五年に入ると空襲は昼夜を問わず、しかも屋上の赤十字の標識をめがけて焼夷弾を雨のようにおとし、その上、運動場には爆弾で大きな穴が出来、水が溜ってまるで堤ができた状態であった。教室も大方は破

損して使えず、生徒のうち一年生は各支部に帰して教育を受けさせた。残った二年生のみ各病棟に配属されて看護実習を続けていたが、栄養不足と夜毎の空襲で睡眠もとれず、疲労の重なりで発病する者が続出した。

私も胸膜炎を罹患、高熱と呼吸困難で入院させられたが、ゆっくり入院できる状態ではない。結局は自宅療養を命ぜられ、九州方面へ帰る者数名といっしょに幾日もかかって島原の自宅へたどりつき、療養することになった。

実家は食糧が充分にあつて栄養も休養も満足にとれ、若くもあつたせいかすぐにもとの体に快復した。その頃田舎でも空襲は激しくなつており、八月六日ラジオは広島に新型爆弾が投下されたと報じたが、その後の情報は何も入らなかつた。そして九日の十一時頃、幼い弟を寝かしつけてその横に寝ころんだとたん、強烈な閃光に驚き弾かれたようにとび起きた。家がぐらぐらとゆれ出した。このままでいると家が倒れるのではとの不安がよぎり、すばやく寝ていた弟を座布団でくろみ蹴で外へ飛び出した。

外はまだ昼前と言うのに夕暮のように暗く、田畑で働いていた母や近所の人達が、西の空を指しながら走って帰ってくる。指さす方を見ると、まるでシネマスコープの画面いっぽいに写し出されたようなきのこ状の雲が、どかっともり上つ

ている。そして、不気味な色の黒から紫がかつた色へと変わりながら、しばらくは消えることがなかつた。

皆も突つ立つたまま、初めて目にする怪しげな雲に見入っていたが、恐ろしさと不安で顔は土色になりひきつっている。そのうち誰からとなく、川棚か長崎の軍需工場が空襲を受けて燃えているのではなからうか、と言う話になった。

翌日になって、長崎市内に新型爆弾がおちて家は崩壊し、死傷者がかなり出たらしいとの情報が伝わる。

そうこうしているうちに、自宅療養の期限も終わりに近く、父母は私を大阪へやらない、やると意見が食い違つて、あわや喧嘩になりかけたところへ、丁度こちらに家族を疎開させていた神戸の叔父が間に入り、責任をもつて連れて行つてやると申し出たので、私も行くこと決めたのであつた。

それは広島が被爆して七日目であつた。広島に近づくと、鉄道も駅も跡形もなく破壊され、そこで汽車はストップ。じりじりと照りつける午後、瓦礫と化した市内を幾時間歩いただろうか、まだ燻ぶっている衣類や人を焼く臭いが鼻につく。長崎市内の惨状を聞いてはいたが、まさかこんなにひどいとは思わず、ただ呆然と立ちつくしてしまつた。

このような焼けた広島島の街に放射能が残存していることなど知る由もなく、喉が渴けば、瓦礫の中にむき出しになつた

水道管から流れる水を手ですくって飲んだり、歩き疲れると道の隅に座り込んだりしてはまた歩いた。夕暮にやっと貨車が用意され、その中に一夜泊まることになった。顔はすすだらけになって体もぐったり疲れ果て、お互いに肩をよせ合っ
て眠った。朝になって貨車が動き出し、家を出てから三日目の夜半、大阪の日赤の寮にやっと着いたのである。

そして終戦、日本人なら誰しも味わった虚脱状態と混乱の世を経て平和な日々が訪れた。或る日なにげなく開いた新聞の数行に、「エラノ・ゲイ航空日誌売却さる」との文字が大きく目にとまった。

広島に原子爆弾を搭載した飛行機B29エラノ・ゲイを操縦した飛行士がその日のことを詳しく日記に記しており、ゆずって欲しいと幾度もたのまれながら決して手放さなかったのを、飛行士が死去して間もなく、その妻が売った、との記事であった。この記事を読みながら自分の被爆のルーツにたどりついた思いがした。

あの広島での一日が、被爆の後遺症を私に一生背負わせることになろうとは……。一瞬にして幾万の死者と、後遺症に苦しむ者、そしてあのいたいけな遺体の少女も一発の原爆によって犠牲になったのである。飛行士が手放さなかった日誌への思いは、広島の惨状を知る故ではなかったろうか、飛行

士もまた苦痛の人生を背負って生きたのでは、との思いに至った。

今年是被爆五十年、しかしあの長崎、広島の子野に立つて地獄絵を見た人々に、それが心のくぎりとなることはあり得ないであろう。

私も一被爆者として生きている限り、後遺症の不安と恐怖にさいなまれながら、あの解剖台上の少女の姿が心の中から消えることはないと思う。

終わりにあの少女の解剖にふれるが、喉もとから下腹部まで一直線にメスでさかれ、胃、胆嚢、十二指腸と次々に内臓が切りとられ、一つ一つ重さが測られたあと、ホルマリン液を入れたケースの中に入れられる。この行為を息のつまる思いで見学していたが、自分ながら顔面蒼白、冷汗の流れるのが分かるほど気分が悪くなって来た。やっとの思いでフラフラと立ち上り、教室を出たのだった。

そして解剖室の裏のうす暗い庭に蹲っていた。どの位時間が過ぎたのだろうか、ふと吾にかえり周囲を見渡すと、二人三人と私と同じ状態の人が座り込んでいないか、あまりに恐怖と刺激の強い見学だったのである。

こうして青春時代を戦いの中で生き、さまざまな境遇や病気を克服し、今まさに古希に近づいた命がいとおしくさえ思

えるのである。きつとあの少女の分まで生かしてもらっているのではなからうか……。ふとそんな思いを抱いてしまうのだった。

(佐世保中央支部会員)

歌集

(エノラ・ゲイ航空日誌より)

十八歳の吾に原爆浴びせたるエノラ・ゲイ航空日誌競売さるる

被爆者と吾をなさしめし八時十五分航空日誌に記されあるらし

夫たりし機長逝きて妻すぐに競売に出ししころ思へり

その日誌長く秘めしは被爆者への鎮魂のためと思ひある朱夏

被爆者の苦悩も機長の自責苦も白昼夢めくひとひらの雲

被爆にて逝きし幼の解剖をおののきながら見たる暗き室

幼子の遺体切りさきて無雑作に被爆の臓器医師は取り出す

被爆遺体メスにさかれつつ吾の肉も刻まるること足裏傷めり

耐へがたく席を立ち来ぬ幼子の被爆の頭蓋剖かれゆくとき

被爆せし少女の遺体無傷にて声をかくれば目覚むるとき

貨車なかに家畜のごとくつめられて被爆せし夜を駅に寝ねたる

焼けし駅の水道管にあらそひて水を飲みたり手にすくひつつ

遺体より夜すがらあがる茶毘の火を貨車の中より見し夏寒し

原爆を浴びたる街の死の匂ひ今もときどき心をよぎる

黒き雨にうたれしも業年を経て右眼腫瘍と診断されつ

ひたひたと雨降る夜半を手術せしその眼裏に見し「黒き雨」

鳴り出づる「十一時五分」頭ちてくる被爆直後の彼の焼死体

放射能いつまで体にとどまるや視力乏しき眼をかばひ居り

患者等と対話のときに鳴り出づる受爆時刻よ共に黙禱す

電話にて被爆のさまを聞く孫に人死にしさまあらはに告ぐる

被爆体験孫に語りて受話器置く言へざりしこと裡に疼くも

“今だから語ろう！九死に一生を得た「運」の強い男” あの日・あの時の想い出

寺井眞澄

昭和二十年八月一日、長崎はアメリカの艦戦機による爆撃によって大きな被害を受けました。

当時・私が、下宿していた伯父宅（現在・長崎市岩川町の福砂屋浦上支店の一角）も爆弾の直撃を受け全壊し、伯母（当時・五十歳位）と、その長女（当時・十四歳）の二人が爆死しました。

それより以前の、昭和十七年、長崎駅及びその周辺が爆撃を受け、村松村（現在・西彼の琴海町村松）青年学校の教官であった・森先生が殉職されたのですが、それ以後、空襲警報は頻繁に発令されましたが、爆撃されることは、あまりなかったように記憶しています。

下宿先である伯父の家族は、二男二女の六人家族で、長男は陸軍特別幹部候補生として、松山陸軍航空隊へ、二男は三菱長崎造船所に勤務中、軍の徴用を受け不在、長女は専門学校に通学、次女は空襲を避けて伯母の実家に疎開していたの

です。

昭和二十年四月、私達中学三年生二百数十名は、学徒報国隊として三菱製鋼所に徴用され、兵器の生産に従事していました。研修後、私は第三機械工場（現在・長崎市茂里町ハートセンター付近）の大型旋盤工場に配属されました。それから約一か月後、中型旋盤工場（現在・長崎県医師会館&法輪会館）に転属しました。ここには工員が一人もない工場長直轄の学生工場であったのです。

製鋼所には、大小合わせ十数本の煙突が立ち並んでいます。私の現場の側にも直径三メートル位の大きな煙突が立っていました。この煙突が私の「運命」を左右しようとは夢々思いませんでした。

現場のすぐ近くに通用門があって、そこを出て右に曲がり汽車の踏みきを渡れば下宿先、左へ出れば竹岩橋であった。橋を渡って突き当り付近（現在・全労災の裏）に大きな横穴

式防空壕があった。我々学生には、空襲警報が発令されたら直ちに壕へ退避するよう命令が出ていたが、私の場合は毎回下宿先へ飛んで帰っていました。

工場には、ピッカピカの新しい中型旋盤機が数十台並んでいましたが、全台とも運転がうまくいかず作業は休止状態となり、集められた学生の殆どが元の作業現場に戻されたのです。一年先輩になる「有田さん」「吉永さん」と私の三名が居残ったのですが、雑用の仕事を時々する程度で殆ど毎日のように工場内をブラブラしていました。

工場長からは「警戒隊には見つかるなよッ」と再三、念を押されていた。それから日を追って空襲警報が発令が激しくなり、その都度、二人の先輩は「ルーズベルトの定期便が来よったばい」と言いながら何処かに雲隠れしていた。

昭和二十年七月三十日、同三十一日、翌八月一日の三日間、連続して爆撃を受けました。七月の三十日は長崎の港内にご挨拶に来た程度の空襲でしたが、どうしてどうして・三十一日は本格的に、三菱造船所、製鋼所、兵器製作所ともに大きな被害を被ったものでした。

私は、三十日同様警報発令と同時に下宿先へ飛んで帰りましたが、伯母とその長女は留守でした。突然「港」の方角から「ヒューン・ドーン」という爆弾が落ちてくる音、炸裂す

るような大音響がして驚きました。少し遠いなと思っていると対空砲火の応戦が始まった。下宿先の軒下に人「一人」入れる位の「壕」が掘ってあった、これは軍部の命令で「壕」は各戸毎に掘るよう指示されていたので何処の家庭にも申し訳程度のものであったのである。私はその「壕」に飛び込んで暫く様子を伺っていた。対空砲火の機関砲に混り、製鋼所の屋上に据えられた「機関銃」も応戦していたが、その発射音たるや「ディーゼル・エンジン」で港内外を航行している「ポンポン船」と同じような迫力に欠けた「オモチャ」みたいに聞こえてきたので少し歯がゆい思いでした。

兵器製作所（現在・長崎大学文教キャンパス）の防空守備隊が据え付けていた二五耗の高射機関砲の発射音は見事なもので、私達には、頼もしく大変な勇気の源となり！ヤレーッ！もっと！ヤレーッ！と思わず吠いた程でした。突然「シュル・シュル・シュル」「ドカン」ときて、壕の上に板を乗せ盛ってあった土を頭から被った。きたな、と直感し近いと思つた。上空では爆音と対空砲火の音、地上は爆弾の破裂する音、金属片の飛び交う甲高い音に身体の震えが止まらなかつた。

両の手の指で目と耳を押さえ懸命に我慢した。間もなく「ドーン」という大きな音と共に大地が突き上げられたようなショックを受け、頭から胸まで泥を被り埋まっ

てしまったのである。両手でもがいても出ることができなかった。長い時間が経過した後、警報が解除され、見回りの警防団に救出されることになった。

下宿から約三〇メートル位離れた所に町内の壕があったが、そこはまともに直撃を受け中に入っていた五、六名の人が爆死していた。

無残にも手足がバラバラに千切れ四方八方に飛び散り、誰の手か、また、誰の足か分からぬ状態だった。その近所に住んでいた純心高女の生徒も「壕」の中で爆死していた。

翌八月一日の爆撃は、昨日、一昨日とは一転し想像を絶する被害を受けた。昨日の至近弾が恐くて下宿先には帰らず工場の煙突と山積みされた石炭との間に身を潜め退避していた。耳を劈く爆音、それを迎え撃つ高射機関砲の発射音、炸裂音、宙に舞い上がった工場の外装板が落ちてくる音、第二波、第三波と襲ってくる爆音に全身の震えが、なかなか、止まらなかつた……。

波状攻撃の合間に通路に出たところを警戒隊に見つかり、大目玉を食らい退避を命じられ「竹岩橋」の方向へ走った。橋の手前で「敵機来襲」の大声にその場に伏せた、大雨が降ってきたような「ザー・ザー」という音に続き「ピシャ・ピシャ・ピシャ」と水面を叩く音、「プシュ・プシュ・プシュ」

と地面を叩き付ける音に身動きできなかつた。「機銃掃射」であつた。爆音が低くなると同時に「今だ！走れ！」と警防団の号令で「壕」へ一目散に走つた。壕の入口には警戒隊が数人陣取つていた。間もなく「来たぞ・来たぞ！」と警戒隊の叫び声に合わせ、また伏せた。長崎港の上空から浦上川の上を、製鋼所の煙突より低いと思われる高度で岩屋山方向へ飛び去る戦闘機を見た。パイロットの顔が見える位の低空であつた。対空砲火で気違いのように撃ちまくつていたが、残念ながら一機も撃ち落とすことはできなかつた。

間もなく警報が解除されたので工場には戻らず下宿に帰つたところ下宿先の前で数人の町内の人が立ち話をしていた。みんな、青ざめているのだ、ふと見ると下宿の家が無くなつていではありませんか！ガレキの山だつた！屋敷の中央部に大きな穴が空き、何も可も散乱していた。伯母、長女の姿が見当らない、一昨日、昨日と食料の買い出しに行つていたので今日も行つているものと思ひ町内の人達にもそう答えておいた。下校して来た弟と母の実家（現在・長崎市清水町照円寺）へ向かつた。道路には、小石、板切れ、ガラス等の破片その他が散乱していた。弟は裸足、私は下駄履きだつた。当時の中学校では編上げの革靴若しくは裸足と決められていたのだが、貧乏で買う事ができず、また品薄で大変高価だつ

たこともあって、動員学徒の下駄履きは、半ば黙認されていた。弟には、私の下駄を履かせ自分は裸足で歩いた。お寺に着いた私達の顔を見て伯母（母の長兄の妻）が「どうしたのか……？」と目をまん丸くしていた。私は今までの出来事の流れを説明した直後、伯母と二人して引き返すことにしたが戻ってみて「アゼン」と立ちすくんでしまった、戸板に横たわっている変わりはてた伯母と、その長女の姿が目飛び込んできた、町内の人達が倒壊した家の下敷きになっていた二人を捜しだして収容してくれていたのだ。

翌・八月二日、下宿先の被害状況を担任の東先生に話をし、暫く休暇を貰うことにしたとき、早急に現場復帰をするように……を念を押されたものです。この言葉を最後に「東先生」とは永久の別れとなってしまうました。工場は、ほぼ壊滅状態となっていた。

昭和二十年初頭の頃だったと思う、佐世保の海兵団から一個小隊指揮官・樋口海軍少尉、大阪市出身二十五歳と聞いていた約八〇名が兵器製作所の防空守備の為、照円寺に寄宿し、二五耗の高射機関砲を、兵器製作所の周辺三か所に据え付けていた。はじ山（現在・JR長崎市三芳町踏切の上）高台、家の町高台・山里小学校近くの高台に陣地を構築し、空襲に備えていた。

私も昭和十八年四月から、同二十年三月迄、照円寺に下宿していたので、彼等の行動は手に取るように解っていた。約八〇名のうち、七〇名弱が四十歳前後の召集兵の一兵卒で、残りは下士官三名、班長四名、衛生兵二名から構成されていた。指揮官は同志社大学卒業の海軍予備士官で大変温厚な人柄だった。下士官三名の中に四十歳を過ぎた沖繩出身の先任下士官を勤める「猛者」がいた。

この人が隊の実権を握り、班長外一兵卒まで毎日毎日深夜まで、そして、倒れるまで「ビンタ」の制裁を加えていた。毎晩、兵を怒鳴る声、ビンタの音、殴られる度に大声で「ハイッ・ハイッ」と返答する声が夜中迄響きわたり、眠られぬ日が続いた、毎晩のように誰かが殴られていたものだった。

伯父が仕事先の瀬戸（現在・西彼大瀬戸町瀬戸）から戻り、伯母と長女の葬儀を終えて、一段落していたところ、八月六日の夕刻、その指揮官から広島の新爆弾「について」の話が聞かされた。居合わせた母が「次は長崎バイ」と言った三日後の八月九日早朝、警報が発令され「壕」に入った。間もなく「解除」になり「壕」から出て一息ついた昼前、突然、強烈な凄惨な光を感じその場に伏せた。全身にショックを受け、気が失ってしまった。間もなくして気がつくとも頭から全身に泥、板切れ等を被っているではないか、至近弾だと直感

した、二発目、三発目を予想して私は暫くジーンとして動か
なかつた。顔を上げて見ると家が倒れ、樹木はみな、なぎ倒
され、兵器製作所から凄惨な火の手が吹き出しているのが見え
た。お寺の家族それに炊事の準備をしていた兵隊の姿は見え
なかつた、間もなく住吉方面からも火の手が上がり、兵器製
作所の火の手は数ヶ所になっており、私はこのお寺も延焼す
るのではないかと思つて、急いで岩屋山の麓（現在・我が家
の付近）まで一目散に走つて逃げたのである。

途中、農家が二、三軒あつたが、その時は全く私の目には
とまらなかつた。当時、この付近には農家が三軒あり、それ
ぞれ徒歩で五分間位の距離があつたと記憶していた。

「山と田んぼ」で狸や猪が出る所と聞いていて、人の気配
すらない寂しい道で恐怖感には既にパニック状態となり、時折、
聞こえる爆発音に敵機来襲ではないかとその都度木陰に身を
寄せ隠れたことを思い出します。私は射的場（長崎医科大学
の射撃訓練場、現在・長崎大学交流会館）に逃げ込もうかと
何度も考えましたが必死で我慢をしていた。

日が暮れかかったのでお寺に戻ることにし、お寺の下の川
端（通称・ばんぞう川）迄来て、私は思わず立ちすくんでし
まいました。それは、顔を川に突っ込んだまま動かぬ人、焼
け焦げて人間とは思えぬ凄まじい形相をした全裸状態、半裸

の人、川へ入ろうとして息絶えた人達が折り重なっているで
はありませんか……。

お寺の下では、大勢の負傷者とその介抱をする人たちで
ごった返しの有り様で、水を「ッ」「水を下さい」「ッ」と
悲鳴に満ち溢れた黄色い叫び声が入り乱れ騒然としていた。
一体全体、何が起きたのか理解することはできなかった。た
だ、燃え盛る火の手は火柱と黒煙と共に天高く舞い上がり人
は苦しみを紛らすために狂気のように走り回り負傷者の「叫
び声というか・うめき声」だけは、暗闇を突き刺すように何
時までも・いつまでも、響き渡つていて、私の耳から離れな
いのです……！！

お寺に通じる本段を駆け上がり境内に立つと御堂、庫裡の
外、建物全体が倒壊し、足の踏み場もないような状態でした
が、火災は免れていました。当時の住職は応召中で留守、住
職の母、その二男、三男、また、その妹二人、下宿先の伯父
の二女、（伯母、長女の葬儀で戻っていた。）は爆死（即死）
であり、住職の妻は重傷、伯父も同じく重傷を負っていた。

やがて、周辺は暗くなり、足元がやっと見える程度となつ
たが、負傷者は次から次へと運び込まれてくるではありません
んか！兵器製作所で負傷した人達だった、中には「汽車に、
乗せて下さい……」と懇願する人がいましたが、汽車は走っ

ていません。歩ける人は道ノ尾駅まで行け！」と言ってきた人がいました。その人が言うには道ノ尾駅から救援列車が出ているから田舎（市外）に頼れる所がある人はその汽車に乗ればヒョツとして助かるかもしれない！とのことでした。

私は、そこら辺から古びた「バケツ」を拾ってきて、ばんぞう川の水を汲んで、負傷者たちに振る舞ったが、負傷者の大半は目の玉が飛び出し、鼻は吹き飛び、髪は焼け焦げ、白眼が異常に光って不気味にさえ見えるのでした。背筋が凍りつくような恐怖心はあったが、勇気を奮い起こして、水を茶碗に入れ、その茶碗を近付けてもその人の口がどこか分からず、顔にかけてやったところ「ギャーッ」と言う大きな悲鳴をあげられビクリ仰天、こっちが泣きたくなりました。

傷に沁みただけでしょう、私は平謝りに謝った。一口にいつて、「生き地獄」とはこの場の態を言うのではないだろうか……。

深夜まで負傷者の介抱をしてお寺に戻ると、兵隊がテントを張ってくれていた。全員がゴロ寝でしたが、一晩中、負傷者達の「悲鳴とうめき声」は絶え間がなかったのです。

翌朝、負傷者達の大半は絶命していた。肉親を探す人達が多くなってきた。中には反狂乱のようになって身内の名前を呼び続け一人一人を確認して回る年配の人がいた。中には、

身内の振りをしながら、負傷者に近付き腕時計や指輪を外し、持ち帰る「ふとどき者」もいた。更には死んでいる人の口の中から金歯をはずし持ち帰ったという「罰当り」の人間もいたことを後になって聞かされました。

陣地に分散していた兵隊の七十数名の内、生存者は二十名弱だった。四十歳前後の招集兵は殆ど爆死していた。隊の実権を握っていた先任下士官も重傷を負って、お寺の防空壕に寝かされていたが誰もが敬遠して近づく人はいなかったようです。

八月十六日だったと思います指揮官から日本は「無条件降伏」をしたと聞かされましたが詳しい説明はありませんでした。

同席していた母が「これから先はどうなるのでしょうかね……？」と尋ねましたが返答は何もありませんでした。中には、故郷の家族に花を咲かせる兵隊もいたようです。

数日後、指揮官以下五名を除く全員が復員して帰ってしまつた。第一班長を勤めていた福岡県出身の松本三等兵曹Ⅱ（十九歳と聞いていた）が私達の面倒を見てくれ食事の世話もしてくれました。

ある日、「手伝ってくれ」と言われお寺の裏山に同行した。八畳位の広さのテントの中に、米俵、非常食、乾麺等二年分

の食料を確保していたのだ。被災して以降、食べ物には一切不自由していなかった大きな「謎」がここで分かった。お寺で放し飼いにしていた鶏の首を締め、「とり飯」の御馳走にもありついた。

街では、食べ物が無く飢えと暑さに苦しんでいると聞いてはいたが……。これは何という幸運か・天と地程の違いではないか……。

ある日、米を盗まれたと言って、実弾を込めた小銃を持たされ、不寝番に立たされた。犯人は・ある外国人・の中の一であった。

終戦の直後、指揮官から「ちょっと手伝ってくれ」と頼まれ、陣地の遺体処理に同行した、途中防毒マスクを着用させられた。現地に着いてみると地面を焦がす灼熱の太陽に曝された遺体は、腐乱がひどく悪臭を放ち機関砲は鉛のように曲がっていた。雁爪を遺体のバンドに引っ掛け、ズルズルと地面を引っ張り、一個所に集め火葬にした。

十五〜六名の遺体を確認したが、暑さと悪臭以外何も感じなかった。

八月下旬、突然下痢と高熱に襲われた。喉が渴いて・渴いて我慢できず、お寺の井戸は枯れ果てて使用不能、濡れた木の葉を吸すって喉を潤した。夜露には毒が入っているから、

絶対に口にするな！」と言われていたが私の耳には入らなかった。炊事用の水は何処から汲んでいたのか……？知らなかった。当時、少年警察官をしていた従兄が飲み薬を持ってきてくれた、一口飲んで吐き出そうとしたところ「飲み込め」と一喝され、鼻をつまんで飲み込んだ、以後、朝夕、湯飲み茶碗一杯ずつ頭を抑えられ飲まされ続けた。後日「ひまし油」だったと聞いた、同じテントに寝起きしていた従姉妹が大変心配し、日夜介抱してくれていた。お寺の安否を気遣いお見舞いにくる人がだんだん・だんだん！増えてきた。

元氣だった人の髪の毛が突然抜け落ち、腕には斑点が出来、下痢が続いて次々に亡くなっていると聞かされ愕然とした。中には、枕もとで「お大事に！」と言って丁寧に十字を切つて去る人がいた。

この瞬間「俺も死ぬんだ！」と一度は覚悟をきめた。思考力が薄らいでいたのか、「死」というものが決して恐いとは思わなかった。

九月上旬、熱が下がり、下痢の症状も回復してきたので、実家（琴海町西海郷）に戻ることにした。指揮官からは米、乾パン、その他の食料品を頂き大変嬉しくもあり・ありがたく、涙がとめどもなく止まらなかった。実家に戻り数日後、学校再開の新聞広告を見たが、もう、下宿する所もなくなり、

生存の確認の届けすら放置していたところ、九月中旬頃になって、父が「下宿先」が見つかったから」と言ったのでシブシブと同行することにした。

西山水源地の上の山奥の、伯母（父の姉）宅にお世話になる事になった。農家であった為、食事には、事欠かなかったが、居心地は決して良いとは言えなかった。

翌日から登校することにして、復学の手続きの為、職員室に入るといきなり、田中肇先生から「お前、生きとったのかッ」と声を掛けられ感慨無量だった。しかし、自分の担任だった「東先生」の姿は残念ながら何処にも見当らなかった。その翌日、全学年の死没者の「合同慰霊祭」が寺町の皓台寺で質素に取り行われたが「死没者」の名簿に、私の名前が「ご丁寧」に書き込まれていた。

ここに来てようやく「故人となった仲間達」と永遠の別れの大事な「けじめ」をつけることが出来て、内心では悲しくもあり、また凄く寂しい思いをしたが一応「ホッ」と安心することができました。

私は、百名を越える同僚のご冥福を生きている限り、心からお祈りして止みません……！「友よ安らかに……！」振り返ってみると、「悪運」と言うか「幸運」の持ち主の一人の男が死線を幾度となく乗り越えて今日まで生き延びてきたの

は、私の周囲の人々が暖かい手を差し伸べて下さったお陰であり、被爆者の皆さん方が一致団結して「平和運動」に取り組んでくれた賜物だと思つて深く感謝いたしております。この事は私の生涯において絶対に忘れてはならない事柄だと考えています……。

深謝

平成十五年十一月二十六日

（西町支部）

あの日あの時

赤倉 ミサヲ

昭和二十年八月九日、雲一つない暑い朝でした。私は一六歳で、茂里町三菱兵器製作所で働いていました。その朝、私はいつものように、モンペ姿に救急袋、頭巾を肩に掛け、職場へと急ぎました。そのころ欠勤した人は詰め所の前に「米・英・加勢者」と書いて名前を張り出されたのです。

十時頃警戒警報が鳴り、女子工員は、山王神社近くの横穴防空壕に避難しました。しばらくすると、空襲警報が解除になりました。警戒警報が解除にならないと、いつもは壕から出ないのに、その日に限って、空襲警報が解除になると職場に戻りました。

二十分ほどたったでしょうか、「ピカッ」と強烈な光がしたかと思うと、「ドカーン」と物凄い大爆音、とつさに目と耳を塞いで伏せました。しばらくして、目を開けてみると、あたりは真つ暗で、何も見えない。耳も聞こえない。近くに爆弾が落ちて生き埋めになったかと思いました。

徐々に明るくなったので、あたりを見ると、工場の建物が倒れ、仕事をしていた人達の姿が見当たりませんでした。近くにいた人たちはどうなったのか、今でも不思議でなりません。無我夢中で倒れた建物を乗り越え、やつとの思いで外へ出て更に驚きました。さつき、通った所には、家も何もなくて一面の焼け野原となり、火傷をした人達や、傷をおった人達が、救いを求める叫び声をあげていました。

私は放心状態で立ちつくしていましたが、気を取り直し、防空壕めあてに走り出しました。三歳くらいの男女の区別もつかない子どもが、ボロボロになった物を引きずりながら、よつん這いになり「カアチャン、カアチャン」と泣き叫んでいました。あっちこつちに転がる黒焦げの死体を越えて、大学院の方へと行きました。

それは、それは、ひどいものでした。防空壕の前には一糸まとわず、両手をだらりと下げ、髪は焼けちぢれ、とてもこ

の世の人とは思われない形相で、男の人が茫然としていました。洋服がボロボロに垂れ下がっていると思っていたのは、何と、布ではなく『皮膚』だったのです。歩く事も出来ず、座り込み、「水を、水を」「助けてー」悲痛な叫び声、まさに生き地獄さながらでした。

一人ぼっちだったけれど、途中知人と会い、お互いに無事を喜び合い、一緒に避難する人達の後について山の方へ登りました。道なき道を、少しでも安全な場所を求めて登っていると、敵機が低空で来たので、もう駄目かと思い、草の中に頭だけ突っ込んで震えていましたが、何事もなく敵機は去って行きました。浦上方面を見ると、黒煙がもうもうと上がり燃えていました。みんな上の方へ登りだったので、私達もついて登りました。少し行つたところに、火傷をした兵隊さんや、傷ついた人達がいたので、私達もそこに、くずれるようにして座り込みました。

爆風で飛んできたのか、松の木の枝にボロボロになった洋服が、あっちこちで風に吹かれて、ひらひらしていました。再び敵機が低空で来たので、伏せていたら雨がパラパラと降ってきました。私は、爆死した人達の無念の涙、被害を受けた人達の恨みの涙雨かと思いました。

そのとき、初めて頭巾、救急袋も持っていないのに気がつ

きました。そして、父母達の安否が急に気になり、一刻も早く家に帰りたい一心で、知人の止めるのもきかないで夢中で上の方に登って行きました。やっと道らしい道に出、まわりの畑には、カボチャがごろごろと転がっていました。そのカボチャを捕虜兵の人達が食べながら避難している姿を見て、私は味方にやられ、どんな気持ちだったか、とても印象的でした。

頂上に着き、市内を見おろすと、県庁、長崎駅方面は黒煙が上がり燃えていました。私は一目散に、立山の方へ走りくんだり、やっと家にたどり着き、「かあちゃん」と呼んだが、声がしないので、裏に廻ってみると、台所は崩れ、父が一人座っていたので、「とうちゃん」と叫んだ。「オオ、無事だったか」お互いに涙：肉親と会えた喜び、家にたどりつくまでの恐怖、父にすがって泣くだけ泣きました。

父は、「お前を茂里町まで探しに行つて、さつき帰つてきてもう駄目かと思ひ、別れの酒を飲んでいるところだった」と言いました。父は酒が一滴も飲めないのに、心の中で「とうちゃん有難う」と言いました。

だんだん暗くなつて行くのに、まだ、あっちこちで家族の名を呼び、探している声が聞こえていました。その夜はいたる所で燃え上がり、火の海で空まで真っ赤に焼けてこの世

の終わりかと思いました。体がだるく、下痢するようになり、母がゲンノシヨウコを煎じてくれ、毎日飲みました。

十三日に茂里町の工場に連絡のため、労務課まで行きましたが、そこから私の足は動きませんでした。労務課は救護所になり、ここにも全身焼けただけの人達が大量寝かされていました。肉親を探している人が、一人一人の顔をのぞいていました。顔を見ただけでは、男女の判別もつかない状態で、生きているのか死んでいるのか身動きもしないで、顔にハエがたかっけていても、それさえはらいのける気力もなく、生きながらにうじがわき、あたりはしんとして無気味なものでした。

突然、「水」「水を」と求めている声が聞こえてきました。生と死は、本当に紙一重、あの時、私も防空壕から出るのが遅れていたなら、この人達同様、焼けただれどこかに横たわっていたでしょう。

私は気がついたら、連絡もしないで家に帰っていました。父は仕事の関係で、毎日、死体処理作業に従事していました。家に帰ってくると、「むごい事だ、むごい事だ」と言っていました。

それから数年後、私は避難したというより、逃げた道を歩いてみようと思いい、山王神社（鳥居は、そのとき一本足にな

り有名になっています）まではすぐ分りました。

五十年間は、草木も生えぬときいていましたが、草木は青々と茂り、周囲には家が建ちあの日の大惨事は、ほとんど跡たもなく復興していました。でも私の臉には、あの日、あの時の事が昨日の事のように焼きついて離れません。私は声を大にして叫びたい。あんな恐ろしい核兵器を、再びもちいてはなりません。そして、原爆で亡くなられた方々のご冥福と、被爆者の健康を、心よりお祈り申し上げます。

(当時十六歳)

私の被爆体験 無気味な黒い粒の降下物 山の中での火球と暴風の恐怖



井原 東洋一

昭和二十年八月九日、当時、私は満九歳、長崎県西彼杵郡矢上村立矢上小学校の四年生でした。

居住地は、田中名字赤松小字蔭平一三九七番地でしたが、夏休み中でもあり家の手伝いで、母親と隣りのおばさんとの三人で、同じ田中名、薩摩城の通称鯨岩の山中にタキギ取りに行っておりました。

私の役割は、高い木に登り、鉈鎌で枯れ枝を切り落とし、母親たちは、落下した枝を拾いあつめて束ねる役目でした。

灌木の森の中には一きわ高い木があり、それらは人があまり登らないので、たくさんの枯れ枝が残っていて、薪取りにとっては、格好の目標物でした。

木登り上手の私は、高い木の枝を渡って、次々に薪材を切り落とす作業に没頭していました。

昼近くだったと思いますが、木の葉の間からキラリと閃光が走り、アツと思う間もなく、太陽の何倍もあるような大き

な火球が、西側の山の上に表れ、繁った葉の中にいたのに、「熱いッ！」と感じた瞬間「ドーン」と大音響と物凄い振動が伝わって来ました。数秒後、暴風が吹き荒れました。

今までに体験した事がない強い風のため、私は、木の上からもぎとられるかのような衝撃を受け、真逆様に落下したかのようにでした。森の中のざわめきの中で、落ちて気絶している私を見た母親は、「東洋一が死んだ！」と叫んだそうです。幸いにも、息を吹きかえした私にケガはなく、やがて、あたかも正露丸のような大きさの黒い粒が大量に降って来ました。

木の葉の繁みを通して落ちてくる黒い粒は、バラバラ、バラバラと落葉を鳴らして、とても無気味でした。

「さわるなよ、爆弾かも知れん」と語り合い、岩カゲにかくれて待ちましたが、黒い固りは、丸で雨が降るように止まるところを知りません。

そのうち、あたりはとばりをおろした様に暗くなり、三人の不安がいや応なく募って来たので、意を決し山から出る事にしました。

広い通りには、帳票が焼け焦げた切れ端など、通常では考えられないような重いものが風に乗って宙を舞い、あちこち降下する状態で、昼というのに、夕暮れのように暗い道をせきたてられるようにわが家へと急ぎました。

隣のおばさんの長男、完一郎さん（当時三十五歳、現在も元氣）が「なぜ帰って来ないのだろうか」と心配して、途中まで迎えに来てくれました。

原爆落下中心地から、六・五キロメートルで被爆した私は、その時の恐怖を生涯忘れられません。

一九七六年（昭和五十一年）の地域是正により、私はその時点から第三号該当の被爆者でしたが、その事を認証しておらず、実際に被爆者健康手帳を手にしたのは、それから二十六年後の二〇〇二年十一月（平成十四年）の事でした。



死者名簿に自分の名

田 中 清 六

あの朝もいつも通り、午前七時ごろ山里町の下宿を出て、勤務先の三菱長崎造船第三機械工場（大橋町）に向かった。昭和十七年（一九四二）、佐賀の親元を離れ、長崎の三菱工業青年学校（川口町）に入った。週三日ずつ学校と工場を行き来し、工場では魚雷艇の部品を作っていた。

工場に着くと警戒警報が鳴り、山手の防空壕（ごう）に逃げた。すぐに解除されたので工場に戻った。原爆が落とされた瞬間のことはほとんど覚えていない。何かパツと光がした後、気を失った。気が付くと工場はつぶれ、機械が倒れていた。

「助けて」。機械の下に手足を挟まれた人が叫んでいた。一人ではどうすることもできず、火の手が迫ってきたので、その場を去った。工場の西側に広がる田んぼを越え防空壕に行ったが、人でいっぱいだった。

血まみれで歩く人たちを見て、自分もけがしていることに

気付いた。両腕、両足、額の上……。衣服を着けていない部分はすべて焼かれていた。左足の付け根には鉄板片が刺さっていた。傷口から血が流れていたもので、逃げながら抜き取った。九日夕方、やつのことで道ノ尾駅にたどり着き、救援列車に乗り込もうとした。一番列車は満員で、二番列車に回された。大村海軍病院に運ばれたが、朝まで道端で寝かされた。手当てに来た看護婦がやけどした両腕にぴったり着いた作業着を脱がそうとすると、皮膚まではがれた。

大村ではベットがなく、十日には嬉野海軍病院に運ばれた。寝かされたトラックの荷台がガタガタ揺れ、傷口に響いた。

九月末になると、髪の毛がすべて抜け落ち、医者から「手の施しようがない」とさじを投げられた。佐賀の家族の元に戻った後も、貧血がひどく、親族が代わる代わる輸血してくれた。

あの工場で死んだのは一二五二人だった。その名簿の中に私の名前もあった。私は死んだことになっていた。一緒に働

いていた純心女学校の生徒たちもほとんど死んだと聞く。かわいそうでならない。

(爆心地から一・一kmの大橋町で被爆、長崎市在住)

私の願い／貧血、がん、胃かいよう…。 子どものころ、病気が一つしたことなかったのに、原爆にやられてから病気ばかり。子どもへの影響が気掛かり。被爆二世にも手厚い援護を。もう二度とこんなことは起きてほしくない。

(「長崎新聞」私の被爆ノートNo 451)



突然赤と黒の光線

藤原 只夫

十六歳の私は古里の五島を離れ、三菱工業青年学校の三年生だった。平戸小屋町の三菱電機製作所に配属され、モーターなど工作機械の修理や整備を担当していた。

寮は城山町にあり、あの日はいつものように寮生二十人ぐらいでまとまって歩いて出勤した。竹の久保町付近で警戒警報が聞こえ、午前八時半ごろには職場にいた。

同僚と三人で工作機械の部品を取り替える作業をしていて、休憩しようとした際、突然、木炭が焼けるような赤と黒の光線が差し込み、「ゴー」というドリルで地中を掘るような何ともいえない音が聞こえた。

間もなく、ものすごい爆風で三mぐらい体を吹き飛ばされ、後頭部と腰を強打し瞬間的に意識を失った。気が付くと工場鉄骨が崩れ、ガラスがほとんど割れていた。爆風で機械がほこりと泥まみれになり、「新型爆弾が落ちたぞ」とみんなが騒いでいた。

海軍の工作隊が助けに来てくれて、工場の裏にあった防空壕に寝かされた。体中が痛かったが我慢した。

近くに大きな広場があり、翌日からそこに野宿し、一〇人余りで次々と運ばれてくる遺体の火葬に追われた。家などを解体した廃材を一mぐらい積み上げて、油をまいて火を付けていた。遺体はほとんど黒こげで、きれいに肉が残っている人が少なかったのをよく覚えている。朝から晩まで飲まず食わずだった。

十二日だったと思う。城山町の寮を見に行つたが、家々は倒壊して姿形がなかった。浦上川付近を歩いていると小さな子どもの遺体があり、水色のパンツが尻にへばり付き、顔も崩れてよく分からなかった。

十五日の昼ごろに五島の父が漁船に便乗し、捜しに来てくれた。翌十六日の夕方に長崎港の岸壁を出港し、十七日の朝、船を乗り継いで古里の荒川にたどり着いた。

帰ってからは頭髮など体毛が抜けてしまい、頭がぼーっとすることも多く、福江の公立病院などで診察を受けた。現在でも幻覚症状などに悩まされている。

(爆心地から二・五kmの平戸小屋町で被爆、新上五島町在住)

私の願い／被爆して六十年がたった。世界を見ると国によって人種や精神が違う。時代に即応した政治で外交を正常化し、良い方向に向かってほしい。戦争のない平和な世界を望む。

(「長崎新聞」私の被爆ノートNo473)



みな口々に「水欲しい」

坊上テイ

当時、私は東彼杵郡宮村（現在の佐世保市宮地区）にある国民学校高等科二年生（十四歳）だったが、学徒動員のため宮村の自宅から東彼川棚町の川棚駅へ通い、切符切りやポイントの切り替え作業をしていた。

あの日も、いつもと同じように作業をしていると、長崎市の方向の空に、灰色の雲を見つけた。その時は、原爆のきのこ雲とは夢にも思わず、仲間たちと「あれ、何やるか？」と見上げながら話しただけで、あまり気にしていなかった。

翌日、駅には早朝から地元消防団の大人たちが集まり、全身に大やけどを負った人たちが、次々と列車で運ばれてきた。大人たちから「長崎に大きな爆弾が落ちて、ひどいことになっている」と聞き、初めて原子爆弾が投下されたことを知った。運ばれてくる被爆者は、みな年齢や性別が分からないほど、全身紫色に焼けただけ、私は子どもながらに焼きナスやイチジクのようなだと思った。その記憶は今も鮮明に残っている。

大人たちは戸板に被爆者に乗せ、川棚海軍共済病院（現在の長崎神経医療センター）や役場に運び、私たち学生は、大人たちに搬送先を伝える誘導の役に当たった。

その日、朝から夕方まで、駅構内には被爆者のうめき声が響く中、救護に当たる大人たちが慌ただしく動き回っていた。私も悲しむ暇などなく、「病院へ運んでください」とひたすら声を張り上げ続けていた。

被爆者は、みな口々に「水が欲しい」とうめいていたが、実際に一人一人に水を飲ませられるような状況ではなかった。それまで、宮村でも小規模な空襲はあったが死者は出ていなかった。被爆者を見て初めて「戦争ってこがん恐ろしかとやるか」と思い知りながらも、「日本が負けるはずはない」と信じて、誘導に当たった。

疲れのため、家に帰ってもすぐに寝入ってしまう日が続き、「あの人たちはどがんかったとやる」と不安と悲しさが込み

上げてきたのは終戦後だった。

（東彼川棚町で救護被爆、佐世保市在住）

私の願い／ 子どもが人の命を奪う事件を新聞、テレビで知るたびに悲しくなる。戦時中、満足に食べられない中で、助け合いながら生きていた私たちの世代には考えられないこと。子どもたちは、思いやりの心を持ってほしい。

（平成十八年七月六日付「長崎新聞」私の被爆ノートNo488）



走る格好で息絶えた人

川副政子

空襲警報が解除され、西山二丁目の自宅で昼食の準備をしていた。突然、虹のような光に包まれ、気付いたら隣の部屋に吹き飛ばされていた。

床は抜け、障子の形はなく、窓ガラスは粉々。屋根の一部は吹き飛び、青空が見えた。何が起きたか分からないまま、当時一歳の娘と、お守りをしていた一七歳の妹の無事を確認し、家の前の防空壕へ入れた。

午後二時ごろ、市役所の前で被爆し、顔の右半分と腕に大やけどを負った夫が帰宅、私たちの無事を確認すると、勤め先の軍司令部に戻った。夕方、父も訪ねて来た。父は三重町の親せき宅に疎開するように言い、城山町の自宅へ帰って行った。当時四八歳だった母や二六歳の姉、七歳と六歳の弟の安否はまだ分からなかった。

「城山町の家は焼けてしまつて何も無い」。十日午前一〇時ごろ迎えに来た父は、落胆したように実家付近の様子を話し

た。夜は防空壕で明かしたという。私は心配を抑えながら自宅を出発。娘を背負い、父、妹と徒歩で山を越えた。

浦上天主堂まで着くと、建物はごう音を立てて炎上。大橋町周辺では、立ったまま焼け死んだ馬や、走る格好で息絶えた男性の死体に目を覆った。焼け付くような日照りで死臭が立ち込める中、負傷者や死体の間を縫うように歩いた。

大橋町から国鉄の線路に出て、長与駅に向かった。駅では自分たちを捜しに来たという親せきと偶然に遭遇。心配されていることが、うれしかった。その時、大きなぎり飯をもらったが、のどを通らなかった。

滑石から山を越え、三重町の親せき宅へ着いたのは午後七時ごろ。その夜は「母たちが無事でいてほしい」と祈りながら床に就いた。

母、姉、弟二人が死んだのを知ったのは十二日。父と妹らが実家の様子を見に行くと、一カ所に四人の骨が寄り添うよ

うにあったという。空き缶に入れられ、戻ってきた骨を見て
「これが母や姉、弟の姿か」と思うと涙が止まらなかった。

(爆心地から二・五kmの西山二丁目の自宅で被爆、長崎市在住)

(平成十九年二月一日付「長崎新聞」私の被爆ノートNo.517)



燃える町ただ見るしかなく

川口 与作

当時十五歳。稲佐町三丁目の九州配電稲佐変電所で、技師としてボイラーに石炭をくべる作業に従事していた。浦上天主堂そばの本尾町の自宅に家族八人で暮らし、八月九日は、兄の戦死を受けて上五島から来た兄嫁とその子ども、つまり私のいとこもいた。

朝、会社に行くと、爆撃で被害を受けた西浦上の電線の修理に行くように言われ、同僚七、八人と車で向かった。

長崎師範学校そばの芋畑で、上半身裸になり白い長ズボンをはいて「よいしょ。よいしょ」などと声を掛けながら作業していた。青白い光が突然、ピカッと走った。近くに爆弾が落ちたと思った。慌てて畑に顔をうずめ、耳と目を両手でふさいだ。原爆がさく裂する音は聞いていない。

人の声があったので、体を起こした。けがはなかった。辺りはほこりが舞い、薄ぼんやりとしていた。「大変」と、われに返った。自宅方面が燃えていたので、本原方面の山手へ向

かった。

脇目も振らずに走った。途中、真っ黒い大粒の雨が降り、白いズボンは真っ黒になった。四、五歳の男の子を連れた母親から「助けて」と言われて振り向いた。だが、どうすることもできないし、自分が助かることで精いっぱいだったので、そのまま立ち去った。

西山を越え、本河内の同僚宅を目指した。午後三時前に着いたが、やっぱり家族の安否が気になり、来た道を引き返した。辺りは死体の山。生きている人から七、八回、とろんとした生気のない目で「水を飲ませてくれ」と懇願されたが、「水はないから勘弁して」と言うしかなかった。

本原の高台から、れんが造りの立派な浦上天主堂が崩れていく様子が見えた。天主堂そばに着くと、人が三十人ぐらい集まり、家族の安否を知らに確認していた。私は天主堂の坂から、長崎の町が一面燃えている様子をやるせない気持ち

で見るしかなかった。

一緒に暮らしていた家族たちは兄嫁や子どもも含め、高尾町の畑の一角にあった小屋にいた父以外帰らぬ人となった。父の元へ弁当を届けに行っていたであろう母は、遺骨さえ見つからなかった。生き残った父も、地元の上五島に戻った八月十七日、息を引き取った。

(爆心地から約一・八kmの家野郷付近で被爆、新上五島町在住)

私の願い／あんな地獄絵はない。戦争は当然いけないが、核兵器は造ってはならないし、使ってもいけない。戦争や核兵器は絶対に嫌だ。人間として生を受けた以上、みんな仲良くしていかなければならない。

(平成十九年六月七日付「長崎新聞」私の被爆ノートNo.533)

